
紅の殺し屋

久佐里くま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅の殺し屋

【Nコード】

N1602I

【作者名】

久佐里くま

【あらすじ】

謎の暗殺集団、紅の殺し屋。

それを撃退すべく結成されたハンドレット公国の主力部隊、ブルーウェイブ。

彼等の争いは、やがて二つの国を三度目の戦争へと誘っていく。

第一章 四人目の犠牲者（前書き）

この小説は死、戦争をあつかう作品です。
苦手な方はお読みにならない事をおすすめします。

第一章 四人目の犠牲者

紅の殺し屋。それは、日本国の巫女であるセンバ・セイナによって結成されたとされる謎の暗殺集団である。彼等は半年前、突如として我がハンドレット公国に現れ、当時ハンドレット公国軍の総司令官であられたフェーマ・バスカーク氏を亡き者とし、これから1年の間でハンドレット公国の重要人物を9人暗殺する、と宣言した。その後流れた、あの集団は日本国の巫女が作った、という噂。我々は、もしそれが真実ならば、彼女が我が国を襲撃するはずが無い、と何も手を打たなかった。

しかしその5カ月後である先月、またも紅の殺し屋は姿を表した。彼等は、ハンドレット公国軍医を暗殺、そしてさらに昨日、我が国の最高大臣までも暗殺した。もし今後半年間で、これまでのように我が国の重要人物が6名も暗殺されるとしたら、それは我が国の存亡に関わるだろう。

噂にあげられている日本国の巫女、セイバ・センナに紅の殺し屋について問うたが、一切関係が無いとの返答があった。

これらの事から我が国は、謎の暗殺集団・紅の殺し屋に対抗すべく、国家機密組織ブルーウェイブの結成を宣言する。

ハンドレット公国陸軍第八戦闘部隊所属セカンドのリヨ・イーストフルスは、ハンドレット公国の首都で軍本部のある街シグムントの中で一番小さな公園にいた。この場所は元々墓場だったのだが、何年も前の戦争で何もかも吹き飛ばされてしまったので、今は墓石がひとつ、ぽつん、とあるだけの丘だった。ここを公園と呼んでいるのも、彼　リヨと、今からここにくる彼女だけだ。

「ルアー…」

彼は最近、幸せな気分だった。1年前に、ルアール・レイとこの国で出会って以来、彼はずっと意気揚々としているのだ。一目惚れした自分、リヨの方が先に軍に入ったにも関わらずさっさと追い抜いてしまったルアール。彼女に思いを伝えてからというもの、彼の毎日桜色に染まっていた。最も　桜なんてものはこの国には無いのだが。ルアールがしばらく住んでいた国に、その桜があるのだそう。そう、彼女は日本国に住んでいたのだ。

「敵に、なるのか…ルアールは、母国と…」

いくらブルーウェイブが対処するといえど、紅の殺し屋のバツクに本当に日本国、セイバ・セイナがいるとすれば、そのうち全面戦争になるのは目に見えていた。そうなればサードである彼女が戦場に赴かない筈が無い。

「リヨ！」

考え込んでいたりリヨの耳に、愛しいルアールの声が響いた。振り返れば、少し離れてはいるが同じ目線に、ルアールの綺麗な桃色の瞳が輝いていた。頬が緩むのを感じながら片手を軽く伸ばすと、ルアールは頬を染めて嬉しそうに彼の手を取った。

二人は目下に湖の見えるところに座った。手は繋いだままで、ただ湖を眺めている。ふ、とリヨは、先程の考えを口にしていった。

「日本…敵になっちゃったね」

繋いだルアールの右手が、軽く脈打つ。動揺したのがわかり、リヨは安心させるようにルアールの手を握る手に軽く力を入れた。するとルアールも、その手を握り返した。

「…そうだね」

困ったように、悲しそうに微笑みながらルアールが短く言った。自分から話を振ったにも関わらずいたたまれなくなってしまうたりヨは、握っていた手を解いてルアールの腰を抱き、身体を近付けた。ルアールは安心するように、リヨの肩に頭を預ける。

「大切な人とか、いたでしょ？」

聞けば、目を細めて黙り込む。どうしたものかとリヨが湖を見な

がら考えていると、ルアールが口を開いた。

「…友達は、いたけど。でも、みんなもうあの国にはいないから」
「あの国には…？皆、国を出たの？」

「出た人も、いる。私みたいに、他の国でやる事があった人もいるし、あの国でやるべき事が無かった人もいた。でも、死んだ人のが多いよ」

ルアールがハンドレット公国にやってきた何ヶ月か前に、日本国が巨大な魔物に襲われ国土の三分の二を奪われたことは、有名な話だった。死んだ人…、とリヨが呟くと、ルアールは「でも、」と続けた。

「残ってる人もいるよ」

「その人達は？」

「そこでやるべき事がある人。でも、戦争とは関係の無い人達だから、きつと大丈夫。生き残る事を一番に考えてくれる筈：日本国が戦場になったとしても」

ルアールは優しい。口調も穏やかで、見ているだけで安心できるような人間だった。しかし同時に、ソードへ登り詰めた強さも兼ね備えている。それは、身体的な物も、精神的な物も。しかしどちらかと言えば、精神的な強さは目に見える身体的な強さよりもはるかに強いのだろうという事を、リヨは改めて実感した。

「…大丈夫だよ。きつと、ブルーウェイブが紅の殺し屋を倒して、何も無かった事にしてくれるよ。いくらハンドレット公国が軍事に長けた国だからって、呪術を思うがままに扱う日本国を敵に回したりはしたくないだろうからね」

そう言って微笑みかければ、ルアールは静かに笑った。そうなればいいね、と。

「それじゃあ、まずハンドレット公国の勢力をもう一度おさらいしてみよう」

机に片手を着いて、もう片方の手にペンを持ちながら、遊魔は言

った。

紅の殺し屋のアジトでは、会議が開かれていた。今朝、勤務時間前にハンドレット公国全軍収集の指令がかかって家を出ていた、炎火、遊魔、輝愛の三人が持ち帰って来た情報は、我等が紅の殺し屋に対抗すべく新組織を、国が設立したという公式情報だった。

「ハンドレット公国軍には大きく分けて、陸、海、空、術の四軍があり、各軍は戦闘十部隊、補給十五部隊を持っている。一部隊にはファーストが千人、セカンドが二人ずついて、次の階級であるサードの人間は各軍の指令隊長をやっている。リーナ（炎火）とルアー（輝愛）がそのサードだ。セカンドは何かしら特別な能力を持つた者が与えられる階級で、ユーマ（俺）は術が特別に得意な事から、セカンドをやっている。セカンドは大抵の場合、部隊の隊長、副隊長だ。

ええ、次に。サードの次の階級がフォース。これは知つての通り、四軍全てのサードより優れた才能を持つ者達だ。ミノル・フォレストと、バファロ・ストレフォーセ。奴等は何処にでも現れる、厄介な相手だ。そして総司令官のみに与えられる階級マキシシホワイト。現在はこれが不在、のはずだ。後継者の発表は無いからな。不在つながら確認しておけば、陸軍の第一補給部隊セカンドも一人欠けている筈だ。

つまり、現在の敵勢力は、一般兵ファーストが十万人、能力者セカンドが二百人、各軍の指令隊長サードが二人、権力者フォースが二人、という訳だ。

そして更にそこに、紅の殺し屋抹消の為の機密組織、ブルーウェイブなる物が発生したという訳だ、わかつたか？」

「いいえ、全く」

間髪入れず沙藍が言った。長い説明を話し終え溜息を吐く間も無く全面否定された事について不満を露わにしながら、遊魔は沙藍の方を振り返った。

「何で」

「つまり何なの、ブルーウェイブって」

「わかってんなら今話すつてば」

また二人の口論が始まった、と周りは溜息を吐く。遊魔と沙藍は何かとソリが合わず、特別嫌いなわけではないが（そもそも特別嫌いな相手と国を背負う暗殺集団などやっていられる筈も無いのだが）、こうして口論ばかりしているのだ。理由の一つには、家事全般を行う節約家の沙藍の言う事を聞かずに、事あるごとに遊魔が車を新調するところにあるらしい。

そうしている中、炎火が片手を上げた。

「お二人さん。ひとつ情報を伝えておきたいんだけど、良いかな」

「何」「どーぞ」

炎火は気持ち悪いほどニヤニヤと笑いながら、たいしたことじゃないんだけど、と言った。

「シユンがブルーウェイブになっちゃったって」

「それを早く言えよ！」

シユンとは、日本国とは何ら関わりが無いながら、紅の殺し屋に加担しているセカンドだ。軍の情報を持つてくるのは、スパイとして軍に潜り込んでいる炎火、遊魔、輝愛の三人よりも遙かに上手だった。しかし突然の出来事や嘘に弱い人物なので、ブルーウェイブに選ばれた時は動揺して涙目になりながら真っ先に炎火に連絡を寄越した。

「ごめん、ごめん」

「今！そのブルーウェイブの！実態云々の話をしてたんだよ！」

「知ってる、知ってる」

こちらも涙目になりながら情報提供の遅い炎火をまくし立てる遊魔を見ながら、先ほどまで黙っていた麻衣が口を開いた。

「……早く、次したら」

何かと言葉が足りないのだが、麻衣の言葉には何時も威圧的な物があった。本人はそんなつもりは無いらしいのだが、少なくとも遊魔と炎火には効果てき面だ。麻衣の一言を聞いて互いを見つめ合っ

たまま黙り込んだ二人を見て、沙藍と輝愛はそれぞれ違った意味で溜息を吐いた。

「はい、それで。人選は」

炎火の胸倉を掴んでいた手を離しそろそろと椅子に座ると、遊魔は改まって言った。言われた炎火は、えーと、と思いつくような仕事をして、話し始めた。

「えーまず、ミノル・フォレスト」

「まあ、そこは来るよな」

「それからバファロ・ストレフォーセ。まあ、これも来るでしょう。それからチーカ・ツスタ、ヤイチ・ナハト、そしてシユン・フィールド。確かそんなもんだったかな。フォレスト、ストレフォーセはご存知の通りフォースで万能型。何でもできちゃう、ってやつね。

ツスタとかいう女は、どうやら日本国出身だそうよ。でも幼い頃に親に捨てられ、何でもハンドレット公国の偉い楽師さんに拾われたんだって。本名は雌黄 千依香。とりあえず身元の確認を竜亜にしてもらってる。で、どうやら彼女はヤイチの隊にいたファーストだったよね。得意な事は爆弾処理、ファーストなりに普通の戦に出ただけだから、他に特別の何かかっていう情報は無いわ。」

シユン・フィールドは仲間であるし、ヤイチ・ナハトについてもリーナの友人なので、他に言うことは無かった。

炎火が話し終えたのがわかると、皆それぞれ考え込む。ハンドレット側としては戦争をするつもりは無いと思いたいが、あの王様のことだ、何をしでかすかわからない。再び日本国を戦場にすることもしないのだ。“あの事件”を知っているのは、このメンバーの中では炎火と輝愛と遊魔のみ。当事者は炎火だけだ。“あの事件”を思い出した炎火は、ギリ と歯ぎしりすると、立ち上がりこう告げた。

「とにかく、ブルーウェイブの戦いを見せてもらおうじゃない。今夜、対象No.4を殺す」

四人は頷くと、作戦会議を始めた。

「フィールド、聞いているのか」

隣に座って自分の話に耳を傾けていたチーカ・ツスタが、向かい側に座っているシユン・フィールドを咎めるようにそう言った。言われた彼はと言えば、肩を大袈裟にビクつかせ「申し訳ありません」と誤ってきた。

「ブルーウェイブがこのハンドレット公国にとってどれくらい重要な組織か、お前はまだわかっていないようだな」

真顔なのだろうが、ツスタの表情はフィールドのような人種の間からしてみれば恐れの対象なのだろう。その顔でこう言われてしまえば、いくら自らより階級が下であれ怖気づいてしまうのは無理もない。そもそもシユン・フィールドは術の暗号解読がハンドレット公国軍で一番上手いというだけの理由でブルーウェイブに選ばれたのだし、ツスタのような人間が苦手でも何ら不思議は無かった。

「ツスタ、良い」

ツスタを制し、それよりも、と話を続ける。今は、紅の殺し屋についての情報を整理しているところだった。今までの紅の殺し屋の動き方を見れば、ブルーウェイブ結成の情報を聞きつけて何もしてこない筈はない、という結論に至ったところなのだ。

「つまり、ミノル。今夜にも紅の殺し屋は次の犠牲者を出すかもしれない、ってことか」

ブルーウェイブ結成前から共に行動することの多かったヤイチが、確認するようにミノルに言った。ミノルはそれに頷く。しかしそれがわかったところで、次の犠牲者が誰なのかは全くメドが立たない。紅の殺し屋の行動には、今のところ規則性が無いのだ。

バサリと、バファロがその吊り目の表情を変えないまま、ミノルの前に資料を差し出した。ミノルは黙ったままそれを受け取り目を通す。

「紅の殺し屋のスパイかもしれない人間のリストか」

「ああ」

そのリストには、軍関係者一人、民間人一人、ブルーウェイブ関係者一人の名前があった。リーナ・ファイアセ、マリア・ナイト、シユン・フィールドの三名だ。ミノルは、未だにブルーウェイブの雰囲気慣れていないスパイをチラリと見やった。

「わかった。リーナ・ファイアセは以前から危ないと思っていたんだ。既にスパイを送り込んでる。問題は無いだろう」

その言葉に、シユン・フィールドが大袈裟に反応した。冷や汗をかいて、目を見開いている。わかりやすすぎなのだ、彼は。これでは叩き甲斐が無くなってしまふというのに。わなわなと肩を震わせているシユンに細く微笑むと、ミノルは次の話題を出そうとしたが、ヤイチが割って入った。

「ま、待てよミノル：リーナが敵だって？」

酷く動揺した様子で聞いてくる彼は、リーナ・ファイアセとは友人だった。「そうだ」と短く答えると、ヤイチは立ち上がり否定するような目を向けてきた。しかし彼女がスパイ、もしくは紅の殺し屋そのものだという可能性は非常に高い。彼女の行動にはクセがありすぎるのだ。それに国王自身が彼女は危険人物だと直に情報提供してくる程なのだから、もう確定と言ってもいいだろう。それだけの根拠がありながら、ここで決定を覆すことはできない。

「ヤイチ」

強く言うのと、ヤイチは首を横に振りながら腰を下ろした。彼はしばらく放っておいた方が良さだろう、チーカに頷くと、彼女は次の話を始めた。

「続いてこのマリア・ナイトという人物についてだ。この女は……」
チーカが話を続ける中、スパイの書類を左手に持ったまま、ミノルは相変わらず冷や汗をかき続けているシユンを見やる。そしてヤイチの方にも視線を移すと、彼もまだ否定するように眉間に皺を寄せてこちらを見て来ていた。それを振り払うように、視線を左手の書類に移す。

リーナ・ファイアセ。焦げ茶の跳ね毛が肩より下まで伸びている。

瞳の色は、自分のネイビーブルーより濃い、藍色だった。身長は平均的な高さ、身体は日頃の訓練により引き締まっている。

あ……よ……そ……わ……て……な……！

ふいに、ミノルの中にイメージが浮かび上がった。激怒した女性の声、身体中に血を浴びていて、胸元には大きな赤い宝石、乱れた服装、銀色に光る刃……。はためく、袖の裾。彼女の名はなんといっただか。

「ミノル？」

ポーツとしていたミノルの耳に、自分を呼ぶチーカの声が響いた。ああ、と返事をする、チーカは少し頭を捻りながらこう言った。

「以上のことから、次に襲撃される可能性が高いのはナハト家である可能性が高いということがわかりました。早々に作戦開始した方が良いと思います、指示を」

ナハト家、ヤイチの家だというのが。ミノルは深く目を瞑ってただに頭の中にある“彼女”の幻影を振り払うと、前を向き直した。紅の殺し屋が何者だとしても、抹消しなくてはならない。そしてそれを行うのは、自分達ブルーウェイブなのだ。

真夜中のハンドレット公国。対象No.4である技術開発局局長スナーク・ナハトの家を囲むように、炎火達はそれぞれの場所に配置していた。

「皮肉：それとも罠だったのかな……」

炎火はボソリと呟いた。何といても今回の対象者の息子であるヤイチ・ナハトは、炎火の友人なのだ。“あの事件”の後、奈美の下で紅の殺し屋を作りハンドレット公国へ潜入、メンバーを三人、軍にまで潜入させた。その時、軍事学校から上がって来て炎火と同期に軍に入ったのがヤイチだった。他にも、フォレストやストレフオーセも同期でヤイチと彼らは仲が良かったが、たまに会うことはあっても炎火と彼らが仲の良い友達になることはなかった。今思えば、あの頃から互いに警戒し合っていたのかもしれない。こい

つは敵だ、と。そんな中ヤイチと炎火が仲良くなったのは、説明のしようがないのだが。

ナハト家の当主は代々技術開発局の局長を勤めている。しかしヤイチは、長男にも関わらず、次の局長は自分では無いようだ、そんなことを話していた。

炎火がそんなことを考えながら進んで行くと、目的の扉の前に行き付いた。いかにも入り易そうなその窓は、一見たいした部屋では無いので警戒していないと考えられるが、しかしここは技術開発局局長の自宅だった。リイナがその窓に手をかけようとすると、ビリリリ！と大きな音を立てて警報機が鳴り出した。

「そこかああ！」

炎火のところに聞こえた声は、確かにヤイチ・ナハトのものだった。警報機を鳴らすのは目くらましのため沙藍にやらせたのだが、恐らくリイナがいるのはブルーウェイブが配置していた場所から沙藍のところに行くまでの途中の道だったのだろう。咄嗟に窓の中に滑り込み隠れると、ブルーウェイブはあっという間に通り過ぎてくれた。恐らく沙藍が目立つところに出て来てくれたのだ。

足音が消えるまで隠れていようと決めた炎火は、部屋の中の鏡越しに人影が映るのを見た。ここには外から見えてしまうのだと理解した炎火は場所を代えようとしたが、焦った顔をして慌てているシユンの姿を確認して、薄く微笑む。炎火はわざと沙藍に警報機を鳴らさせたのだが、シユンにはそれを伝えていなかったのだ。恐らく間違えて警報機を鳴らして、ブルーウェイブに捕まってしまうとでも考えたのだろうか。

シユンが、右手の人差し指と親指でLの形を作った。何やってんだ　　の合図だ。それに対して炎火は左手の小指と中指を立てると、口に含んだ。大丈夫　　の合図だ。炎火はそれをするとなりにあったベッドの脇へ潜り込み、シユンは炎火のいた部屋を調べていたフリをして仲間の元へ去って行った。紅の殺し屋には、これだけで充分だった。

今回スナーク・ナハトを殺しに行ったのは、輝愛一人だった。炎火達より一足先に行つて殺していたので、ブルーウェイブは既に用無しだ。この程度なのか、と炎火は考える。何か裏が無いのなら、弱すぎる、と。

そんな中、炎火は目的の人物を発見した。炎火が潜り込んだ部屋は、ヤイチの弟であるヨーラの寝室だった。彼はとても優しく大人しい性格だと有名だが、軍事学校では一位二位を争う成績だそうだ。彼が眠っているのを良いことに炎火は持っていた鞆から注射器を取り出してヨーラに麻酔を打った。麻酔が効いてきたのを確認すると、炎火は急いで彼を担いで正当な入り口である扉の方へ駆け出した。麻酔が効かないうちに運び出しては抵抗される可能性があるが、あまり時間をかけすぎると敵に見つかる可能性がある。

炎火が廊下へ続く扉を出ると、やはり炎火の不安は確信になった。扉の目の前には、ミノル・フォレストが待ち構えていたのだ。

「ちっ」

ミノルはすぐさま銃を構える。しかし炎火の目には、その銃は撃つ気が無いように見えた。ヨーラがいるのが分かったからだろうか、しかしそれにしても決断が早すぎる。ミノル・フォレストという人物は、もしかしたらそれだけ恐ろしい人物なのかもしれない。

「…来たか、ブルーウェイブ!」

炎火にそう言われて、ミノルはハツとしたように目を見開いた。心ここにあらず…考え事をしていた?この状況で…。頭を捻るが、気を取り直すように炎火に向けてもう一度銃を構えようとするミノルの行動に気付いた炎火は、他に方法は無いと踏んで、窓をぶち破つて外へ脱出しようと足を踏み込んだ。バリーン!という大きな音と共に屋敷の外へ出る。ヨーラをそつと抱きしめながら、炎火は外の庭へ着地した。

「ヨーラを返せ」

ふいに聞こえたのはヤイチの声だった。炎火が脱出した部屋の前には、陣を敷いたブルーウェイブの面々がる。ヤイチは怒りを露わ

にしなから、剣を抜いて炎火に突きつけた。

別に奪っちゃいけないけどね

ただの女性なら震え上がっている状況でも、炎火は冷静だった。

ここを潜り抜けられなくて、何が紅の殺し屋だ。炎火は、当初の予定 相手に情報を与える場合があるので、なるべく敵との会話を避けること を変更し、ヤイチを更に激怒させてやるうとニヤリと笑った。輝愛と沙藍は任務終了した時点でアジトに戻っている筈なので、後は炎火の独断で行動して良い筈だ。遊魔は初めから独断、麻衣は炎火の合図で動く後処理係^{スモーク}だった。

炎火はニヤニヤ笑いをやめないまま、顔を隠すため着ている特殊な服のためにくぐもった声で言った。

「僕ね…ブラコンで嫌いな。だから……」

そこまで言うと、炎火は地を蹴り一瞬でヤイチの目の前に移動した。追いきれなかった動きに、ヤイチが一瞬たじろぐ。そんな中、炎火はヤイチの耳元に唇を寄せると、怪しく呟いた。

「君にはちよつと困ってもらうよ……」

炎火はヤイチが驚いて対応できないうちに、腰に下げていた合図用のライトを点灯させた。その合図と共に、麻衣が術でスモークを発動させる。炎火はヨーラを連れてアジトへ戻った。

『おまえは、私たちと共に地獄へ落ちるのよ!!』

それが、この国の主を奪った対価であるということ、死んでも忘れてはいけない!』

ちちうえのくびがおちる

ゆうれいたちがたちさる

かのじよは

やいばにのみこまれる

かのじよのなは

炎火が立ち去ったスモークの中で、麻衣が遊魔の元に降り立った。彼の足元には、ミノルが倒れている。麻衣がそれを見つめているのを見ると、遊魔は「気絶させただけ」と説明した。

「殺しちゃ、ダメなんだろ」

「奈美様が言うのなら、ダメなんですよ」

麻衣が「先に行く」と言っただけを確認すると、遊魔は一人ごちた。

「ったく、竜亜にでも聞くかな…」

気に入らない。何故殺せるのに、殺してはいけないと奈美は言ったのか。しかも遊魔と麻衣にだけ伝えるように竜亜に言ったのか。

しかし遊魔は確信した。ブルーウェイブは弱い。このまま行けば、虫を叩く程度で終わると。

Fin .

第二章 ヨーラとリーナ

真夜中、家々の上空を人知れず走り飛ぶ影があった。竜亜は奈美（生成千羽の幼名、親しい人はこの名で呼ぶ）の護衛や日本国復興作業の指示を出す役割を持っているので、基本的に炎火達と共に行動することは少なかった。奈美の側を離れるのは、奈美の伝言を言葉で伝えなければならぬ時（奈美は日本国からでも術で伝言を送ることができる）や、炎火に呼ばれた時等だけなのだ。奈美はハンドレットから命を狙われる身、自分が離れてはいけないことは充分理解している。だから帰らなければ、すぐに…。

「彼等が心配ですね」

日本城の一室、中には二つの人影があった。一人は竜亜、もう一人はこの国の巫女である生成千羽。奈美だ。奈美は竜亜のその一言を聞くと、両手で持っていた湯飲を置いて、フフ、と笑った。

「そうですか？」

ひどく優しい瞳で、からかうように言う。その一言に竜亜はドキリと心拍音を上げた。

「な、何ですか？」

主の様子を伺うように顔を覗き込みながら言うと、奈美は一瞬、竜亜と瞳を合わせたかと思うと、ニコリと笑って腰を上げた。そのまま窓の方へ進み、遠くを見つめるような表情をする。その方向には、ハンドレット公国があるはずだ。

「そうですね、心配です。特にシユンは危なっかしいですから……」
「いえ、私は……！」

竜亜の心を見透かしたように奈美が言った。本当にこの人には、何でもわかってしまうようだ。竜亜がシユンに恋心を抱いているのを知っているのだ。誰も知らない其れを。

困惑するように竜亜が眉根を下げると、奈美が振り返った。その表情は真剣そのものだ。背後の窓から光が差し込み、明かりを点け

ていない薄暗い部屋からは後光が差すように見えた。竜亜はその姿に目を細めながら、奈美の言葉を聞きたため腰を上げた。

「行きたいですか？」

竜亜の心の中に、複雑な気持ちが渦を巻く。行かせてもらえるのか、と口を次いで出そうになった言葉は、しかし奈美は…と心の中に押し留まらせた。自分が行けば奈美の危険は増す。しかし自分が行かなくても、シユンは自分の身くらい自分で守れるだろう。少しでも恋する人の近くにいたいと思うのはこの状況では最悪の我侭だということ、竜亜は理解していた。

「私は…」

まとまりきらない心が意味の無い言葉を吐く。その様子を見ながら、奈美が言った。

「わかっているでしょう、私たちはここでやるべきことがあるのです」

「わかっています…」

咎めるような声色に、いつの間にか俯いていた顔を上げられない一瞬でも我侭なことを考えてしまった自分を不謹慎だと後悔しながら、竜亜は拳を握り締めた。大丈夫だ、誰も死んだりはしない、この戦いで。自分は奈美に与えられた、この国でやるべきことをするんだ。だからこの想いをどうにかして……。

僅かな沈黙の後、奈美が息を吐くように言った。

「……竜亜」

「……いえ、わかっているんです、私はただ」

想っていていけば、いいんです。

そう言おうとした竜亜は、奈美が自分の言葉を遮るように言った言葉に耳を疑った。まさか、奈美がそんなことを言うはずが無い。だって奈美は巫女の力で紅の殺し屋の役割を決めたのだから。今更自分が、前線に加わるなどありえないのだ。啞然としている竜亜の耳に、もう一度奈美が言った。

「任務です、ハンドレット公国へ行きなさい」

奈美の突然の言葉に、さっきまで上げられなかった顔が上がった。「は……」と無意識に言葉が漏れる。その瞳は、いたずらするような、からかうような表情に戻っていた。

一陣の風が吹く。竜亜は、目を赤らめた。奈美は行っても良いと言ったのだ、今。少しだけ行って様子を見て、すぐに戻って来いと言っているのだ。

「ミノル・フォレストを殺してはならないと、麻衣と遊魔に伝えなさい」

「え……？」

奈美の配慮に泣きそうになるほど嬉しくなっていると、またも奈美の信じ難い言葉が聞こえた。ミノル・フォレストとは敵のはずだ。何故、殺してはならない、と？対象者を殺すために邪魔な物は排除して良いと、奈美は言っていたはずなのに。

「行きなさい」

気付いた時には、奈美はまた窓の外を向いていた。斜め後ろから見えるその表情は、なんとなく切なそうな顔だった。竜亜はほとんど理解できなかったが、奈美の言葉に身体がかつてに動いていた。行かなければ、ハンドレット公園へ。

「竜亜」

背後に気配がしたので立ち止まると、そこには遊魔がいた。彼の表情からして、恐らく自分ですらわからない事を聞きたくて来たのだろうということは何える。先ほどの竜亜のように屋根の上を飛びながら彼女の元へ来ると、遊魔は言葉を整理するように押し黙った。見詰め合う二人の上には、星空が広がっていた。

「ヨーラ！」

ヤイチは粉々になった窓ガラスを踏みながら、懸命にスモークの中にヨーラを捜した。ヨーラの部屋の窓の前まで来たことを理解したヤイチは、割れたガラスで自分の手が傷付くことも気にせず弟の部屋に入った。

「ヨーラ！」

少しずつ晴れていく霧の中、必死にヨーラの姿を探すが、当たり前のようにそこに彼の姿は無かった。後ろにバファロとシユンが来て様子を見る中、ヤイチは膝をつき、ヨーラのベッドに拳を打ちつけた。一日で父親と弟を同時に失った彼は、悔しさに打ちひしがれた。わかつていたのに、助けられなかった。わかつていたのに……。

「ミノル」

バファロが、開け放たれた扉の向こうにミノルが倒れているのを見つけ、駆け寄った。そこには術の罫にかかったチーカもいた。ミノルは後頭部を強く打ったのか、起きる気配が無い。チーカは諦めたような無表情でバファロを見上げた。

「何で罫なんか引つかかかってるんだよ、らしくない」

はーッと溜息を吐いた後バファロはそう言っつて、シユンにチーカのかかった罫を解くように手で指示した。シユンは急いで駆け寄り、呪文を唱える。さすががこのような細かい術は慣れているのか、チーカの罫はすぐに外れた。

「やったの誰なの」

「知らない奴よ、男だったと思うけど」

パツパツと痛んだ部分を払いながら、チーカが答える。チーカはブルーウェイブのメンバーの中でも、特に隠密行動を得意としている。それは王直々に指名があったほど、上層部の一部の人間なら誰でも知っていることだった。そのチーカが、罫にかかったのだ。日本国が術の国だという事を彼等は改めて思い知らされたのだ、しかも一人の男によって、故意に。

「これは術軍を調べた方が良さそうかな」

「それは単純じゃない？」

単純さが勝機を生むことだってあるんだよ、とバファロが答える。深読みし過ぎて空周る前に一から調べるのだと、そういう事だそうだ。チーカは意味を理解して、ふう、と溜息を吐く。やはりフォーヌにはかなわない。

「運びますか」

チーカの罟を解いてからそれまでやる事もなく突っ立っていたシユンが言った。忘れていたが、ミノルがいるのだ。このままにしておくわけにはいかない。

「ああ」

「俺も手伝う」

背後からヤイチが声をかけた。もう復活したのか、とチーカは驚いたが、戦闘の場での彼はいつだってそうだった気がする。自分も手伝う、と二人の中に入ると、バファロが後ろで溜息を吐いたのがわかった。

「ミノルがやられるとはな」

深く眠りについたミノルは、軍に着くまで目を覚まさなかった。

きみはだれ

『貴方は死神なの』

おれのなは

『私を地獄へ連れて行くの』

ちがう、きみは

『、、、！』

きみは、

「どういうことなんだ」

長い沈黙の末、遊魔が発したのはそんな言葉だった。時間が経つにつれて深くなっていった眉間の皺は、今も苦しそうなくらい寄っている。問われた意味を問い返すような視線を竜亜が向けると、遊魔はもう一度目を彷徨わせてから竜亜を見据えた。

「俺は奈美様にも従うが、炎火に着いて来たんだ」

彼が、紅の殺し屋のトップである奈美よりも、リーダーの炎火に忠実なのは周知の事実だった。奈美もそれを認めて尚、彼を紅の殺し屋のメンバーにしたのだから。竜亜は言われたことを頭の中に多

くでも刻み込むよう努力しながら、こう言い返した。

「私は炎火にも従うけど、奈美様に着いて来たんだよ」

そう言われてしまえば、遊魔もすぐには言い返せない。竜亜が炎火を除く他のメンバーの誰よりも奈美を慕っているのも、皆が知っていることだったからだ。そしてそれは、遊魔の炎火に対しての思いと同じような理由 命の恩人 だからだった。

言い返せない遊魔に、竜亜は慎重になりきれしていない自分を見つけた。これでは、良からぬ方向に話が進んでしまうかもしれない。けれど竜亜の口からは、零れるように言葉が出ていた。

「私たちは同じでしょう。信じる者が信じている者が、自分じゃない」

竜亜の諦めたような口調に、遊魔はカツとなって言い返していた。「奈美様の正体も知らないくせに！」

「何！」

ハツとしたように、遊魔が口元に手を当てる。あ……、と呟いたところによると、遊魔も無意識に言ってしまっただけのようだ。気まずそうに「悪い」と謝ってきたので、竜亜も「良いよ」と返した。彼も必死なのだろう、何しろ奈美の一番近くにいる自分でさえ、あの「殺すな」という命令の意味がわからないのだから。ふいに、竜亜は言った。

「でもそれは、炎火だって知らないじゃない」

よっ、と口から漏らしながら、炎火は天窓から家に入った。正面から入ってヨーラに風景や場所を覚えられてはタチが悪いと思ったのだが、おそらくヨーラは上からでもだいたい位置は把握してしまふのだろう、と思い直した。ソファに座らせたヨーラが言う。

「シグメントのこんな真ん中に……」

肩をすくめて苦笑いすると、あっ、というようにヨーラが目を見開いた。

「サード……リーナ・ファイアセード……」

先ほどとは打って変わって、どうして、というように目が訴えかけている。表情がコロコロ変わる子だなあ、と思いながら、炎火はクスリと笑ってみせた。するとヨーラは、興奮していた自分に気付いたのか、落ち着けるように両手を膝の上に置いた。そして、ハーツと息を吐くと、まだ瞳を揺らめかせながら聞いてきた。

「リーナ・ファイアセ、サード殿ですよね？」

「ええ、そうよ」

即答すれば、面食らったような顔をした。恐らく何故、どうしてといった言葉が渦を巻いているのだろう、しかもっ面でうつむき加減になったヨーラは、そのまま黙り込んでしまった。ただの好奇心旺盛な子供や、恐怖心いっぱいの子供とはタチが違った。

「紅の殺し屋なんですか」

ボソリと、独り言のように呟く。炎火はゆっくりと瞳を閉じて、そうよ、と静かに言った。うつむいたままの顔は、動揺しているのがよくわかる。ヨーラはもう話さないだろうと踏んだ炎火は、慎重に言葉を選びながら言った。

「私は、紅の殺し屋。あなたのお父様を殺し、お兄さんとその仲間と敵対する者」

「兄さんと、その仲間…敵対…」

それだけ言えばヨーラには、兄ヤイチがブルーウェイブだという事は容易に判断できた。だから余計に訳がわからなくなったのだろう。リーナ・ファイアセと兄は、仲の良い友達だったのだから。戦でも背を預ける事ができるだろう、とリーナが言ったことがあるほど、互いに信頼し合っていたのだ。それなのに。

「何で…最初っから騙してたんですか」

「そうよ、最初っから」

「兄さんと仲良くなったのも、作戦だったんですか！」

声を荒げてヨーラが言う。立ち上がり拳を握り締め、涙を流している。ヨーラはリーナと実際に会った事は無かったが、ヤイチからいつも話を聞いていた。それに、学校の用事で軍に行く時に、ヤイ

チとリーナがよく一緒にいるのを見ていた。それはミノルやバファロと一緒にいるのと同じくらいの頻度で、だ。

わからない、理解ができない、兄さんはとても楽しそうにリーナの話をしていたのに。信じていたのに。

「ちがうよ」

きっとこれも嘘なんだ。紅の殺し屋は、非道で冷酷で目的の為に何でもやる人なんだ。ヤイチの、兄の敵なんだから間違いない。ヤイチはリーナを殺そうとして、リーナもヤイチを殺そうとしていたのだから。きっと初めから嘘だったんだ、全部。

頭の中で様々な思いを浮かばせては打ち消し、を繰り返しているヨーラを見ながら、リーナは苦笑しながら溜息を吐いた。ヨーラは子供だ。理解できなくても無理は無い、と。

「私は今でもヤイチを友達だと思ってるよ」

「嘘だよ！」

本当、だよ。悲しそうに呟く声に、ヨーラは先ほどの気持ちを思い出した。そして余計に涙が出てくる。

炎火が窓をぶち破り脱出した時、ヨーラは目を覚ましていた。自分が誘拐されようとしているのだと瞬時に気付いたが、何かがおかしいことにも気付いた。それは、炎火が自分をとても大事に抱いているという事だ。自分は人質になろうとしている、確かに人質は大切に扱うものだが、こんなにも…？着地した時もリーナは、ヨーラが怪我をしていないかと一瞬確かめるように腕を動かした。自分には本当に危害を加えるつもりが無いのだと、むしろ怪我ひとつ無く守ろうとしているように感じられた。

極悪非道の暗殺集団が。

「わから、ない…」

よろよるとソファに腰を下ろしながらそう言ったヨーラに、炎火はまた苦笑した。そして、「今日はもう寝なさい」と言っと、ヨーラを沙藍にたくして部屋を出て行った。

翌日ヨーラが起きると、側にはせわしく動き回るリーナの姿があった。既に軍服に着替え、昨夜紅の殺し屋の活動の際に結っていた髪は降りしている。いつものリーナ・フィアセサードだ。ヨーラが起き上がったのがわかると、リーナはこちらを向いてニコリと笑った。

「おはよう、起きたね」

「おはようございます…」

ゆるゆると頭を下げながら言うと、「そんなのは良いから」と言いながら、昨日脱いだ洋服を渡してきた。着替える、という意味なのだろうか。渡された洋服をギュツと抱きしめると、太陽の匂いがあった。昨日の今日でもう洗って乾かしてくれたのだ。

着替え終わったヨーラを、今度は紫の髪の女性が手招きした。櫛を持っていくところからすると、髪をセットしてくれるらしい。とうとうヨーラはわからなくなった。一体これから自分をどこへ連れて行ってくれるというのだ。

「お願いします…」

「はいはい、座って、座って」

背中を押され、鏡の前に座る。しかし、よく聞けば聞いたことのある声だな、と思って鏡越しに女性の顔を見ると、そこにはリーナと同じもう一人のサードがいた。突然の事に声も出せずに肩をビクリと跳ねさせると、ルアール・レイサードは「びっくりしたあ」などと呑気なことを言ってきた。

「ル、ルアール・レイ！…サード殿」

「ん、今気付いた？」

パチンツと効果音でも出そうな様子でウィンクすると、ルアールはヨーラの髪に櫛を通し始めた。よく眠れなかったのであまり乱れなかった髪の毛は、するすると櫛が通る。前髪に櫛がかかったので目を閉じたヨーラは、今日も良い天気だね、とでも言うように「私もね、紅の殺し屋なんだ」と言う声を耳にした。

「は………」

思わず目を開けそうになったが、固定するように額を押さえられてまだセツト中だということを出す。頭を抱えなくなるが、思えば当たり前のことだった。ここは紅の殺し屋のリーナが住む家なのだから、他の住人も紅の殺し屋のメンバーだと考えるのが妥当だ。つまり、昨日自分に部屋の使い方を教えてくれた女性も、紅の殺し屋だということだ。

「君のお父さんを殺したのは私」

ガタツと勢い余って椅子を倒してしまうほど、ヨーラは動揺して立ち上がった。父が、死んだ、だと。しかもさっきまで自分の髪を穏やかな顔で梳いていたこの女性が、陸軍のトップ、指令隊長であるルール・レイが、父を殺したと言ったか。

「私たちのような汚い集団に殺されるくらい価値のあることをしたから」

先ほどとは打って変わって、皮肉だとも言うように顔を歪めながらそう言うルールは、既に天下のハンドレット公国軍サードルール・レイの顔ではなかった。紅の殺し屋、その名の通り、血だらけの道を通ってきた殺し屋の顔。怖い。ヨーラは、素直にそう思った。

「…うそだ」

弱々しい声で、頭を振りながら否定する。全てのことを否定したい気分だった。全てのものに、嘘をつかれた気分だった。そんなヨーラの心を見透かしたように、ルールは「全て本当だよ」と言った。その顔は昨夜のリーナの顔に酷く似ていたのだが、今のヨーラには気付く余裕が無かった。

「私が紅の殺し屋だということも、君のお父さんが死んだのも、殺したのが私だということも、殺されるようなことをしたのも、全部」
彼女は何を言っているのか。何を言いたいのか。意味がわからない。ただ自分を動揺させようとしているだけなのか、それとも辛い事実を突きつけて苦しませたいのか、他に何かあるっていうのか。

二人が黙ったまま向き合っていると、部屋の中に昨夜の女性が入

つてきた。二人の様子を見ると、そろそろケンカはお終いにしなさい、とでも言う母親のような口調で、「ご飯だよ」と言って来た。ルールはそれに軽く答えると、ヨーラに着いてくるように振り返って見せた。

「嫌なら食べなくても良いよ。今うち家計が大変なことになってるから」

食べる、と言って着いて行くと、リビングのような部屋に通された。そこには、急がなくてはいけない用事があるように慌てて皿の中の物を口の中に放り込もうとしている男性と、ちょうど食べ終わったらしく皿を流し台に片付けている女性、そして先ほどの女性の姿があつた。男性はヨーラの姿を見て「うわっ」と言つとさらに慌てて、食べ物を取り込む通り越して流し込もうと皿を傾けた。

「バカ遊魔。いいよ、ヨーラは」

「んふあふあいつふあつふえ」

振り向けば、リーナの姿があつた。男性の名前は遊魔というらしい。遊魔は納得しきつていない顔をリーナに向けると、ヨーラの方にゆっくりと視線を移し、ハア、と溜息を吐いた。どうやら自分の姿をヨーラに見られなくなかつたようだ。というよりは、ヨーラに見られると厄介なことになる、と考えていたらしい。

「見られなくなかつたならもつと早く起きりゃ良かったのよ」

「ふるへー!!」

先ほどの女性が、水を差すように遊魔に言う。その様子に、斜め前にいるルールがほんわかと笑つた気がした。リーナといえば、彼女もルールと同じような雰囲気苦笑しているだけだつた。ヨーラが自分を見ている事に気付いたリーナは、軽く彼等の自己紹介をしてくれた。

「あのバカ男は遊魔。あの緑の髪のは沙藍。それから向ここの無口なのは麻衣。みんな良い人よ、あなたの敵であることに変わりはないけどね」

リーナはそれだけ言つと、ゆっくりと喉に物を通す遊魔のところ

に行った。「何だよバカって」「本当のことでしょ」と、まるで普通の家庭のような会話が繰り出される。彼等は、本当に普通の人間だった。

遊魔とリーナから視線を外すと、“緑の髪の沙藍”がいた。瞳は髪より薄い緑、珍しい色だと思った。しかし、どことなく雰囲気を知っている誰かに似ている気がする。記憶を巡らして様々な人間の顔を思い浮かべるが、誰と似ていると思ったのかわからなかった。しかし、別の人間の顔が浮かび、目を見開く。そしてもう一度“遊魔”のほうを見た。

「遊魔……ユーマ・ホルス…セカンド…！」

そう呟くように言うと、遊魔が食べ物を噴出すのが見えた。そしてリーナに「ほら言ったじゃねーか！」と抗議を始める。他の四人はすましたものだが、彼の反応で、彼がユーマ・ホルスだということとは容易に判断できた。ユーマ・ホルス、術軍の中でも特に術が得意だと言われているセカンドだ。彼までもが紅の殺し屋だということか。

「ふうん、観察力が良いのね。フォースくらいならなれそう」

それまで黙っていた麻衣が言った。フォースくらい、と聞き捨てなら無いことを言った気がしたが、麻衣はそのまま「行って来ます」と言っただけかへ行ってしまった。他の四人はほのぼのと「行ってらっしゃい」などと言っている。本当に、此処がどこだか忘れてしまいそうな雰囲気だった。

「食べ終わったら軍に行くから」

沙藍が出した食べ物を食べていると、向かいに座っていたリーナが言った。よく意味が理解できずにリーナの目を見ると、彼女は驚くようなことを言った。

「四人で軍に行くんだよ。私たちは仕事、あとあなたをヤイチに返すの」

四人とは、リーナ、ルアール、ユーマ、そしてヨーラのことを言っているらしい。沙藍は行かないのか、とチラリと見やると、「私

は軍とは関係ないし」と言われた。関係が無いことは無いと思うのだが、今はそんなことを話題にする場面じゃなかった。

「僕を帰すって……」

濁すように言うと、食べ終り流しで水を飲んでいたユーマが言った。

「俺たちはお前なんかには用は無いの。お前をさらったのは混乱を大きくするためってだけなんだから」

かってにさらっておいて、いらない、とはつきりと言われてしまえば、何も言うことはなかった。こちらとしては願ってもないことだ、兄の元に帰れるというのは。ヨーラがうきうきとしたのがわかったのか、リーナはクスリと笑った。子供のような笑い顔だった。

「んじゃ、早く食べて、ヤイチのところへ帰ろうじゃないの」

ヨーラが食べ終わると、四人は家の外へ出た。これからヤイチの元へ帰れる、と浮き足立つヨーラを抑えながら、リーナは意外と深刻な顔をしてこう言った。

「ヨーラ、約束する？」

「……何を、ですか？」

私たちが紅の殺し屋だつてことを誰にも言わないって。そう言つたリーナに、ヨーラはひどく動揺した。紅の殺し屋。そう、彼等は紅の殺し屋なのだ。これまで和んでいたのが嘘のように、空気が冷たく感じた。ヨーラが押し黙つたのを見たリーナは、あとの二人と顔を見合わせ、言った。

「いいよ、何でも。守らなくてもいいから」

「……！ヨーラ……！」

昨夜あれだけ衝撃的なことがありながらいつものように出勤してきたヤイチは、とうとう心を乱した。何しろ昨日のその衝撃的な事件でいなくなった愛する弟が、仲間うちでスパイだと言われている友と共に目の前に現れたのだ。思わず駆け出して抱きしめると、リ

リーナが驚いたような顔をした。今はその表情がうつとうしい。

「兄さん……」

「昨日の夜、うちの前に倒れてたんだよ」

平然とした顔でリーナが言う。ヤイチはカツとなつて、次の瞬間には彼女に銃口を向けていた。辺りの軍人がざわめく中、ヤイチとヨーラ、そしてリーナと後の二人の時間だけが止まったように動いていた。そんな中、「おまえの仲間がさらっていったんだろ」

そう口から出そうになったヤイチを止めるように、とても良いタイミングでミノルが現れた。

「ヨーラの目は嘘をついていない」

止まった時間を動かすようにミノルが発した声は、五人がいたホールに清々しい程に響き渡った。現れたミノルはリーナをじつと見つめると、目を伏せながらヤイチに「銃をしまえ」と言った。威圧的なそれに、ヤイチは逆らえなかった。

銃はしまったがヨーラを離さず、むしろ敵から守るようにギュウツと抱きしめなおすヤイチに、リーナはフツと表情を緩める。あなたを守ってもらいなさい、とでも言うようにヨーラを見つめた。

ルールとユーマが「仕事があるから」と言つて立ち去つたところに、吹き抜けになつている二階の廊下からチーカが飛び降りてきた。ホールの床に反射してキラキラと金色に光る髪は、リーナの血塗られた色の髪の毛とは正反対の輝きを持っていた。

「ナハトセカンドとストレフォーセフォースは会議講堂に集合です」
J8h947からの伝言です、と言つと、チーカはミノルの後ろに立った。仕事が入つたのか、とヤイチは言つと、眉間に皺を寄せながらヨーラに言った。

「北東の裏庭で待つてろ、わかるな」

「……うん」

ヨーラは少し不安そうにヤイチを見ると、リーナ、ミノル、チーカの順に視線を巡らしてから静かに立ち去つた。何か言いたそうな視線にリーナは頭を捻るが、他の三人は何とも思っていないようだ

った。

ヤイチが不満を露わにしながら立ち去ると、タイミング良く電話が鳴った。リーナの電話だ。出ながらホール中に視界を広げると、左側のガラスに麻衣が写っている。彼女はリーナの指示で、今の会話を録音していたのだ。麻衣はもしもの場合に備えて構えていた銃をしまいながら言った。

『ポイント74qh82q3』

「わかった」

リーナはそれだけ言って電話を切ると、「あたしも仕事」と言って立ち去った。残った二人、ミノルとチーカは、しばらくその方向を見ながら黙っていた。何分か経ちリーナが完全に見えなくなると、チーカが静かに口を開いた。

「何故ヤイチセカンドに本当のことを言わなかったのですか？」

ミノルとチーカにはわかっていたのだ、ヨーラは嘘を吐いていたということ。ミノルは先ほどの威圧的な雰囲気をもう一度ゆるく醸し出しながら言った。

「嘘は吐いていたが、それを業なりにしているわけでも無いのに冷静だった。それに、リーナ・フィアセを信じていた」

つまり、ヨーラは脅されているわけでは無い。そう言つと、ミノルはまた黙り込んだ。

ミノルには違和感があった。リーナの紅い髪の毛を見たとき、何かを忘れていた気がした。特に昨夜出会った時は、スパイの資料として写真を見た時よりも確実に、この女と出会ったことがあると強く思った。しかし今、リーナ・フィアセとしての彼女を見た時、何も感じなかった。この想いの正体は何なのか…。

ミノルはガラスに写った怪しげな人影が立ち去るのを見ながら、かつて別れた妹の顔を思い出した。

フェルメイイ……。

「ミノルフォース？」

チーカの呼びかけにハッとすると、ミノルは「行くぞ」と言つて

会議講堂に向かって歩き出した。慌てて着いて行くチーカに、フツと顔を歪めると、軽く冗談を言う。
「呼び出した本人が遅れてちゃ怒られちまうな」

F i n

第三章 別れ、そして出会い

ポイント74qh82q3。南端から時計回りに数えて三つ目の裏庭に集まった、リーナ、麻衣、沙藍の三人は場所を変え、予め借りておいた宿屋の一室にいた。先ほど麻衣が撮った動画を三人で検証しているのだ。

沙藍はフーツと溜息を吐くと、言った。

「ばれてるね。リーナ、それから麻衣も」

リーナは頷いただけだったが、麻衣は驚いた。リーナ、ルアール、ユーマの三人がばれるのならわかるが、自分が見つかるとは思ってもいなかったのだ。リーナにしてみればたいした事は無いのだが、麻衣にとってはやはりミノル・フォレストフォースは恐ろしい人間だった。

「沙藍はどうしたらいいと思う」

冷静にリーナが問うた。はっきり言って正体がばれる云々は、リーナにとってはどうでも良かった。自分達の目的は対象者を殺すことで、それに有利になるかと思軍に潜り込んだだけのことだ。ばれてしまったらばれてしまったで、リーナ・フィアセという人物がこの世から消えるだけだった。

しばらく考え込んだあと、沙藍が言った。

「知らないふりかな」

沙藍は、どうせばれた事はこっちに知られるだろうとあちらの間も思っているだろうから、どうせなら知らないふりをした方が良く、と言うのだ。リーナも麻衣も、その意見に賛同した。軍にいられる期間が長いだけこちらに有利になるのは、ブルーウェイブだっ てわかってはいるはずなのだ。あちらの動きを見るのが先決だった。

ブルーウェイブ。リーナはミノルの顔を思い出した。おそらく彼がリーダーだろうから、自分が対戦することになるのはあの男であることが多くなりそうだ。ミノル・フォレストは、入隊して一年で

フォーヌまで上り詰めた危険人物だ。それはバファロ・ストレフォ
ーセも同じことだが、どちらかといえばバファロはミノルに着いて
行ったらフォーヌになっていた、という感じだ。彼等の強さは互角
なのだろうが、ミノルの方が気持ちに芯が通っている気がした。そ
れに彼には、決められた未来がある。

そこまで考えたリーナは、ふ、と考えるのをやめた。何かが迫っ
てくる感覚があったのだ。フラッシュバック、そう、これはフラッ
シュバックだ。リーナは闇に飲み込まれた。

困惑したミノルの表情

だれ

「おまえがせつない」

だれ

「いきろよ」

だれ

キス……。

視界が血まみれに染まる。魂が生死の境を行き来する。暖かな光。
ミノル。

ガタンツという音と共に、リーナは椅子ごと床に倒れ込んだ。驚
いて立ち上がった沙藍と麻衣が駆け寄ると、とうの本人も驚いたよ
うに目をしばたかせながら上半身を起こした。

「大丈夫？」

リーナは慌てて両腕を開き怪我は無いことを伝えると、ゆっくり
と立ち上がった。麻衣が気遣うように椅子を直す。リーナはテーブ
ルに手をつけてまたしばらくボーツとすると、おぼつかない足取り
で出口のほうへ歩き出した。どうしたものかと話し出せずにいる後
ろの二人を振り返らないまま、リーナは言った。

「風に当たってくる」

家を出てとぼとぼと歩きながら、リーナはひたすら思い出していた。二年前だ、彼女が大切な人を失ったのは。その時の“ある事件”から、リーナは右手を魔物に犯されていた。その右手は今でも、怒りが心を支配すると本来の姿を現してしまう。今となっては少し制御ができるようになったが、失ってしまった大切な人がいた穴を埋めるように奈美が現れてくれなければ、当時は制御する方法もわからなかった。奈美が現れ、遊魔や輝愛と共に強くなり、仲間を集め、紅の殺し屋を作った。復讐のため、大切な人を奪った人々への復讐のため。

頭の中にミノルの顔が、残像のように浮かんでくる。銃を構えて呆然と立ち尽くす彼の顔、あの顔は。

「あ……」

気付いた時には、軍に戻って来ていた。ミノルのことを考えていたら彼のいる場所へ足が向かってしまうなど皮肉だな、と思いつながらも、リーナは軍の中へ入って行った。数ある中庭の中で気に入っている場所へ足を向けると、人影が目に入る。ミノルだった。

それまで眠っていたのか日向ぼっこでもしていたのか、仰向けになつて膝を立てた状態から、ミノルは上半身を起こした。そうするとリーナに気付いたのか、しばらくポカンとした表情で座ったままこちらを見ていた。リーナも相当ポカンとした顔をしていたのだが、彼女が気付くことはなかった。

「フォーヌ殿」

しばらくしてミノルが立ち上がり近付いてきたので、慌てて頭を下げた。彼は一応上官なのだ、リーナ・フィアセの。ミノルはそれに顔をしかめると、「やめろ」と言つてリーナの腕を掴んだ。

「敬語は礼儀です」

何を“やめろ”と言われたのが理解しかねたが、とりあえずそう答える。すると案の定ミノルは更に顔をしかめた。怒っているとい

うよりは、切ない顔だった。リーナはなるべくその顔を見ないようにしながら、黙り込んでミノルの言葉を待った。

「違う……人殺しなんてやめろよ」

ドクン、と心臓が鳴る。ミノルとリーナどちらの物が互いにわからなかったが、どちらも平常心では無いのは確かだった。同じ状態の中ただ、熱を持ったミノルの手が掴んでいるのが、ひんやりと冷えたリーナの左腕だということが、二人の違いだった。二人の身体には、悲しいほどに温度差があった。

しばらく押し黙っていたリーナが口を開いた。

「……軍にいながら人殺しをしないなんて、そんな馬鹿な話はありません」

「違う！」

次の瞬間、リーナはミノルの腕の中にいた。目を見開いたリーナの口唇は、ミノルのそれに塞がれている。ひたすら押し付けるだけの口付けのように思えた長い時間を打ち消すように、しばらくしてミノルはリーナの口内に舌を挿入してきた。

「はっ、んう……！」

驚いたリーナは必死に抵抗するが、これがフォースとサードの差かと思わせられるほどミノルの力は強かった。頭と腰を固定されては、リーナもどうすることもできなかった。抵抗を諦めミノルの服をギョツと掴むと、ミノルはやつと彼女を離れた。温もりが離れていくのを感じながら、リーナは自分の目頭が熱くなつていくのがわかった。

「……いらない、こんなキスは」

離れても尚リーナが自分の服を掴んでいるのに気付いたミノルは、もう一度リーナを抱きしめた。頭を撫でると、耳元ですすり泣くような声が聞こえる。

「私は、やめない。貴方に、なら、わかるはず……私には、守ら、なければ、ならないものがある……！」

もう互いに知らないふりなど無駄な努力だった。つつかえつつか

え言いながらひたすら声を出さずに泣くリーナに、ミノルはどうしようもなくなつてリーナを離れた。その顔は切なさが増していて、互いに後悔の色を滲み出していた。これは互いの組織に対しての裏切り行為だ。そう思いながらも、ミノルは言つてはならないことを口に出そうとしていた。

「違う、あいつは……！」

誰かの気配がして瞬間的に我に返つたミノルは、次の言葉を引つ込める。何か言いかけたミノルを気にする余裕もないまま、リーナは泣いていた。ミノルは苦い顔をしながら、その場を立ち去つた。

リーナは、久し振りに泣いた気がしたな、などと自分でも呑気だと思つことを考えながら、そのまましばらく泣いていた。

「はあ……」

ルアルは陸軍のファースト達の訓練を指導しながら、溜息を吐いた。両手を開いたり握り締めたりしながら、昨夜のことを思い出す。彼女は昨日、初めて人を殺した。

スナーク・ナハトは技術開発局長だったので、サードであるルアルは会うことが多かった。マキシホワイトは指令を出すだけ、フォースはいろんなところに飛ぶのであまり頼りにならない、技術開発局が開発した物に意見を求めるのは、一番良く働くファーストやセカンドをまとめるサードの四人だった。彼はさして高くもないが低くもない階級のルアル達を、ひどく丁寧に扱ってくれた。陽気な人で、悪人とは思えなかった。そもそもヤイチやヨーラがあんな素直に育つたのだ、父親が悪い人間な筈がない。スナーク・ナハトの奥方は、六年前始まつたばかりだった、後に“名誉ある戦”と言われる日本国との戦争にサードとして参戦して、命を落としていたのだから。

落ち着かない手の平を広げ、太陽にかざす。この手で昨日、あれだけ自分達を可愛がつてくれたスナーク・ナハトを殺したのだ。今まで魔物を殺したことは何度かあったが、人間を殺したのはこれが

初めてだった。しかも、あんなに良い人を、故意に、殺意を以つてだ。

「レイサード」

振り返れば、彼女の愛するリヨがいた。その顔はあからさまに「どうかしたのか」と問うてくる。案の定リヨはそれを言葉で伝えて来たので、ルアールはかざしていた手をキュツと握って「大丈夫」と言った。

「……」

即答されたりヨは、考え込むように眉根を寄せる。顎に手を寄せて俯きながら唸っていたと思えば、嬉々とした表情でパツと顔を上げた。しかしその直後、何かに気付いたように落胆した顔をしてまとも俯いた。ルアールが彼の百面相を無表情で見つめていると、リヨは怒られた犬のように恐縮しながら小指を差し出した。ルアールが「何？」と言うと、ただでさえ頼りない表情をさらに歪めて言った。

「あの、さ……二週間後なんだけど、非番重なるだろ？だから……公園に行こうよ」

半月後の約束。リヨは、ルアールを元気付けようとしてくれているのだ。先ほどの百面相はこれだったのか、とルアールはクスリと笑う。彼と同じように小指を出しかけて、ハツと思い出し止めた。この手は、人殺しの手だ。視界が真っ赤に染まる。けれど視線をリヨに戻せば、ニコリと笑った彼がいた。皮肉、嘲笑、切ない。様々な思いが駆け巡る。ルアールは出しかけていた指をリヨのそこまで進めた。

「うん」

小指の先から、暖かな体温が伝わってくる。生きている人間の体温だ。これが、ルアールの愛する人の体温なのだ。互いに静かに笑いあっていると、遠くから訓練隊長のキルエがリヨを呼んだ。仮にも今は訓練中だ。リヨは「今行く！」と言うと、ルアールから小指を離して振り返った。

「あ……」

名残惜しげに手が伸びる。ハツと気付いて引っ込めると、リヨが振り向いて優しく笑った。つられてルアールも、幸せそうに笑った。すぐに前を向きなおし走り去るリヨを見つめながら、ルアールは胸に手を当てた。

迷ってはいけない。炎火について行くと決めた。例え普段どんなに優しい人間であっても、スナーク・ナハトは日本国民にとって死より恐ろしく悲しい事やっつてのけた人物に加担していたのだ。握り締めた拳に、汗が伝う。でも…、とルアールは考える。でも、彼はヤイチャヨーラにとってたった一人の父だったのだ。でも、それでも。

私たちが失ったのは。

「……。」

これは仇討ち。考えてはいけない。これは平和を求める戦争よりも汚れた行為。考えてはいけない。わかっていて始めたことなのだから。考えてはいけない。これは仇討ち。私たちから、大切なものを奪った仇。

日本国城で、奈美は微笑んだ。その表情には、悔しさ、切なさ、苦しみ、悲しみ、そして、未来への希望が滲み出ている。彼女は搾り出すように呟いた。

「仇討ちも、裏切りも、争いも、平和も。全て貴女の下に行われています」

奈美は、かつてこの国にいた主の名前を呟いた。

「貴女一人を愛するたくさんの人々を軸に、様々な方向へと散らばっていった……」

いつか彼等がそれは自分の意志だと気付き、平和を求めるようになったら、いったいどうするのだろう。彼等は子供。小さな、小さな子供なのだ。

「…私も子供です。何かを糧にしないと自分の意志を通せない。も

う大丈夫だと、誰かが言ってくれないと、止まることはできないのです」

「さあ、貴女ならどうしますか？」

「雨が降っていた。」

「雨ひどくなってきたな」

同じ軍のセカンド仲間であるノマイルにそう言われて、ユーマは胡散臭そうに彼を見つめた。そんなユーマに気付かず、ノマイルは呑気に「そろそろ訓練、中止にするか」などと言っている。ユーマは溜息を吐くと、彼の頭を軽くはたいた。

「ばっか。俺たち術軍だぞ、屋根ぐらい作れ、屋根ぐらい」

片手を腰に当ててノマイルを小突く。そうするとノマイルはいかにも哀れな者を見るような目でユーマを見ながら言った。

「今日は一番広い訓練場使ってるんだぞ。そうとう体力いるぜ、大丈夫か？」

ノマイルの後ろでは、その会話を聞いていた何人かの軍人が彼と同じような視線をユーマに向けている。何故か人事のような表情をしている彼等を睨みながら、ユーマも言い返した。

「お前等まさか俺一人にやらす気かよ」

「他に誰がいるんだよ」

即答されて、ユーマはうなだれた。今週の第一から第五戦闘部隊合同訓練の訓練隊長は自分の筈だが、何故このようなことになったのか。こういう事は階級社会であるハンドレット公国では下っ端がやるものではないのか。そういう意味ではこいつらはハンドレット人らしくないな、と思いつながらユーマは重い口を開いた。

「みんなでやりゃいいだろうが」

「やだ」

「またも、即答。後ろでは他のセカンドやファーストたちが、「ユーマさんは疲れてないから」だの「俺たちは訓練で体力使ったんだ」だの「このスパルタ女王の手下め！」などとざわついている。ユー

マは下位の軍人達を目で黙らせた。しかし口が黙ったところで、彼等の視線からは逃れられなかった。

「わかったよ…やるよ」

そう言った瞬間、弾けたように騒ぎ出す彼等。疲れてるんじゃないのか…と思いつつ、ユーマは得意の術を詠唱し始めた。簡単な印を結び、空気に請う。彼が半分ほど詠唱し終わった時、頭上に薄い膜が張られた。ユーマが使おうとしていた術を、誰かが使ったのだ。

「全員着替えて、模擬戦やるから好きな武器持つてきなさい」

その声は、リーナのものであった。指令隊長の登場に空気が引き締まるが、彼女が言った言葉を理解した軍人達はすぐに雄叫びながら更衣室へと走って行った。誰の影響かは知らないが、術軍の面々はリーナの模擬戦訓練が大好きなのだ。

そんな彼等の様子を見ながら軽く微笑んでいたリーナの少しの異変に、ユーマは気付いた。何かいつもと違う、何が、と聞かれればわからないのだが…。ユーマはリーナに近付くと、「なんか、どうした」と曖昧な質問をした。

「あんだこそ、今朝は聞けなかったけど、何で昨日帰り遅かったの…」
「…竜亜としゃべってた」

様子はおかしいが痛いところを突いてくるのはいつもと同じだ。リーナに嘘を吐いても通じないのはいつものことなので、ユーマは素直に事実を話した。しかし、はぐらかさなければならぬところは、はぐらかさなければならぬ。

「来てたんだ」

目を伏せてそう言うリーナは、おそらく竜亜のことより奈美のことを思い出しているのだろう。もちろん竜亜も大切な仲間なのだが、“あんな事件”があったのだ。彼女が竜亜より奈美を優先させようとするのは当たり前だ。

ユーマは奈美のことと同時に昨夜の伝言を思い出すと、思い切った。切った。

「知ってるだろ。隠してるつもりだけど、あいつシユンを…」

そこまで言って、リーナの顔があからさまに嫌そうになったのがわかった。これはバレたな、などと呑気に思いながら続きを言おうとすれば、リーナは片手を降ってそれを止めさせた。

「ああ、もう良い。どうせ私に言えない伝言か何かでしょ」

「何でわかったの」

おどけて言えば、うざったそうに「わかるわ、馬鹿」と言われた。何だかんだ言ってリーナは竜亜を認めているらしい。竜亜がそんな不埒な理由で奈美の側を離れるわけが無いことをわかつているのだ。そういえば二人は幼馴染だとかそうじゃないとか言っていたな…、とそんなことを考えながら視線をリーナに戻せば、やはり少し赤い臉が気になった。

「それより…目、赤いよな」

「ああ、泣いたから」

さつきから理解の及ばないことを即答されている気がする。術軍の連中は皆そうなのか、と考えて、もう一度リーナに考えを戻した。脱線癖があるのは自分も同じらしい。ベタだな、と思いながらも「何で」と聞けば、全く以って興味無さそうに「何ででも」と言われた。

理由を説明しろと抗議しようとするれば、かなり悪いタイミングでノマイルの邪魔が入った。

「隊長！全員着替えたよ」

「はいはい。ユーマ、紅白はあんたが決めなさい」

パツと振り返っていつものように笑うが、やはり泣いた理由とやらは気になる。彼女はめったなことでは泣かない女だ。ユーマが黙っている、リーナが咎めるように名を呼んだ。

「……わかったよ。言えたら言えよ」

それだけ言っているとユーマは、話の流れがわかっていないノマイルを連れて軍人達が集まっているところへ歩いて行った。それを見送りながらリーナは、一人呟く。

「言わないよ、言わないから」
だって私は紅の殺し屋だから。

「リーナ」

カサ…、という葉擦れの音と共に、背後から聞きなれた声が聞こえ、リーナは振り返った。そこには、ここにいるはずのない沙藍の姿があった。風に当たってくる、と言つて会議を抜けてから、軍に来てそのまま訓練に入ることにしたのは電話で連絡してあつたはずだが。

「沙藍」

「潜入時はサラ・トレーサンドファースト」

しっ、と唇に人差し指を当てながらサラが言う。リーナはそれに頷いて、軍に来た目的を問うた。沙藍や麻衣が軍人として潜入するのは極めて状況が切迫した時だけだ。よっぽどの用があつたのかと思ひ続きをせかすと、サラは一言「聞きにきたの」と言つた。

「何を？」

「さっきミノルといたでしょ」

ドクン、と心臓が高鳴る。見られていたのか、あれを。リーナの不安を肯定するように、サラが殺意を込めて「裏切つたの」と言つた。

「違うよ。無理矢理だつてわかつたでしょ、見てたなら……」

「わからなかつた」

以外と冷静に受け答えをしているな、と思ひながら言つた言葉も、サラによつて打ち消される。右手の疼きを抑えながらリーナも、容赦はしないというように声色を変えて「サラ！！」と叫んだ。サラはそれでも冷静に、リーナにぎらぎらとした目を向けた。

「取らないで」

震える声に、リーナは一瞬耳を疑う。今何と言つたか、サラは。リーナが呆然としてみると、更にサラは「私のミノルだから」と不可解な言葉を発した。リーナはもう訳が分からなくなっている自分を感じながら、何か言い返そうと思ひながら口を開いた。

「私だけのミノルだから」

リーナの努力、それさえもかき消すように言うサラ。この目は、何だ。悲しそうな、今にも泣き出しそうな瞳。そんなところは飛び越えて、もう独占欲云々の域に入っている。何だ、何なんだ。サラにとつてのミノルは、一体何なんだ。

「リーナ、奈美様にそう伝えて」

サラがその名を出した途端、リーナは全ての考えを打ち消してサラの右頬を平手打ちした。ここは敵国の軍。そこで、奈美の名前を出す事は許されることではない。サラの頬を打った手をそのまま右腕に持つて行き、今にも飛び出しそうな悪魔を抑える。顔を歪ませながら睨むが、それでもサラの気迫は治まっていなかった。

「……！」

これと言うことは終わりだとも言うように、サラはそのまま立ち去った。向けられた背中を切りつけそうになるのを必死で抑える。沙藍は仲間だ、先に裏切ったのは私なんだ。リーナは一人、大きく呼吸をしながら右腕に宿った兵器の怒りを静めていった。

しばらくしてリーナが落ち着き始めた時、側にあつた軍の周りを囲む大木のうちの一本の上から声が聞こえた。

「さっきの誰だよ」

唾を吞んで頭上を見上げれば、少し高めの枝の上にヤイチが座っていた。彼を通り越した遙か上の空では、雲が切れ始めている。だんだんと見えてくる太陽の姿を捉えながら、リーナは三度ほど瞬きしてからヤイチのところへ飛び上がった。

揺れる枝の上で重心を取りながら、安定するところで着地する。椅子に座るように太い枝に腰を下ろして、「いたんだ」と何気ないことを言う。

「今朝は、ごめん」

リーナの問いに答えてからしばらくの沈黙の後、ヤイチがそう言った。苦々しいその顔を横目で見ながら、リーナは静かに言った。

「何が」

「お前のこと殺そうとした」

言われなくともわかりきっている。「いいよ、別に」と言いながら、リーナは自分までも気ままずくなっていくのがわかった。沙藍の言った通り、ばれていることは互いにわかっているのだ。ばれていることがわかっていっているということも、二人はちゃんと理解している。しかし二人は、友人だった。

リーナは、紅の殺し屋は、ブルーウェイブを殺したいわけではない。紅の殺し屋の目的は対象者を殺す事であって、邪魔者は殺していいという指示が降りてはいるもの、そこに殺意は無いのだ。しかし、紅の殺し屋はスナーク・ナハトを殺した。ヤイチの父親を殺したのだ。

ヤイチはヤイチで、今までのリーナ・フィアセという人物と、紅の殺し屋のスパイであるリーナとの違いを考え混乱していた。

二人は本当に良い友達だった。リーナは相手に殺意を芽生えさせるようなことをよく言う人物であり、ヤイチもまた相手の言葉にすぐ殺意を覚える人間だった。そんな二人が未だかつて、短い期間ではあるが一緒にいたこの半年、一度も喧嘩をした事が無いというのだから。

「なあ…俺たちいつまで友達かな」

ぼつりと、ヤイチが呟いた。それにリーナは笑いながら答える。

「死ぬまでかな」

その様子に、ヤイチも軽く笑い、「そうだな」と相槌を打つ。そしてまた、リーナも少し笑った。

雲が晴れてきている。雲の隙間から吹きつけるように、二人の間を風が通った。

友達。リーナはかつての友たちを思い出した。別れた友。ハンドレットに来てこの半年、新しい友がたくさんできた。この環境に甘えたくなかったことや、幸せだと思ったことが何度もあった。しかしその反面、あの頃と比べ、あの頃に戻れたら、と思っっている自分がある。あの頃。“あの事件”より前の友たち。戻りたい、戻りたい

のだ。自分は戻りたがっているのだ、あの頃に。今の友たちを踏み台にして。

あの頃……。リーナはミノルと沙藍を思い出した。彼等は似ているかもしれない。迷いの無い、目が。

「……炎だな」

考え込むリーナに聞こえないように、ヤイチは呟いた。リーナの心は、まるで炎のようだ。見れば、わかる。炎が燃えているようにそこにある確かな心。けれどその炎は決して真っ直ぐ上にはかり伸びるわけではない。彼女は何に迷い、何に揺れているのか。何を思い、進んでいるのか。何処へ向かい歩いているのだろうか。

「俺たちはどこへ向かってるんだろうな」

今度はリーナにも聞こえるように、ヤイチが言った。それにリーナは、当たり前だとも言ってしまうように言った。そしてそれは、先ほどの考えを纏め上げた最高の言葉だった。

「破滅へ……、かな」

「おま……！」

ヤイチは目を見開いた。破滅へ向かっている。それを理解した上で、そこへ向かっている。何故、何故そのようなことを？

リーナは一度目を瞑ると、もう一度開いてから一気に樹のてっぺんまで飛び上がった。

「おい！」

突然のことに驚いたヤイチは、リーナの行動について行けずその場で彼女を見上げた。リーナはバランスを取るように両手を広げ、風を受けている。目を閉じながら薄く笑いを浮かべると、リーナは大声で言った。

「ねえヤイチ！私はね、みんなの幸せなんか考えてないの！だから……」

何か言っているが完全には聞こえない。じれったくなったヤイチは、まだしゃべっている途中のリーナの声をなるべくたくさん聞くために、彼女と同じ高さまで飛び上がった。隣の樹のてっぺ

んまで到達すると、リーナがくるりと振り返る。

「迷わず殺していいんだよ」

その顔は、鮮やかだった。

抑えた心。殺すか殺されるか、迷いはない。迷いは、ない。愛しい全てのモノは捨てる。奈美だけでいい。だから。

全てを決心して、それでも尚、向かう。破滅へ。

ヤイチは久し振りに、彼女の名前を呼んだ。

「リーナ……」

「ヤイチ大好き。ヤイチが友達で良かった。だから、けじめをつけよう、ね」

約束、と言いながら、小指を出す。その手は互いに届かないことをわかっていたが、ヤイチも小指を差し出した。その顔には、涙が零れていた。

「ああ、約束」

二人は静かに、届かない約束をした。

泣いている。心が泣いている。だって、私はどうしたらいいの。

いない、いない、いない。私の大切な、一番大切な人がいない。私のたった一人、大切な人がいないの。あいつのせいで。だから。

「……っ」

リーナとヤイチ、二人の思いが渦を巻く。既に完全に姿を現した太陽の下、混乱を呼んでいる。

ああ、お前の仲間なんかじゃない。お前が、お前が殺したんだな。父さんを。お前はスパイなんかじゃない。お前が、殺しをやっているんだな。

なあ、お前は何に泣いている。何を泣いている。お前は、破壊者じゃないんだろう。救いを求めているのか、誰かに。リーナ。ごめんな、救えなくて。

さよならだ。

「おーい！何やってんだよ！」

見詰め合う二人に聞こえるように、遠くからユーマが大声を上げ

た。リーナは手を振りながら「今行く！」と言うと、ヤイチの方を振り返りもせず走り去って行った。ヤイチはリーナがもう振り向かないことを理解すると、遙か前方を見据えながら、静かに風を受けていた。

「お帰り、兄さん」

ヤイチが自宅に戻ると、会議の後すぐに一緒に帰って家に置いてきたヨーラが彼を迎えた。ヨーラは兄が少しよろついていることに気付くとすぐに「どうしたの」と言いながら支えに走った。

「いや、ちよつとな……」

少し汗をかいている。ヨーラは怪奇そうに兄を見上げると、ヤイチは静かに笑った。ヨーラに支えてもらいながら、玄関に座り込む。それでも尚寄り添うヨーラに優しく微笑みながら、ヤイチは言った。

「別れたんだ、友達と」

「…なんで？」

座った床を見つめながら、うつろな瞳のままヤイチは言う。

「互いの、約束のために」

「兄さん」

ヨーラが何か言おうとすると、ヤイチはゆっくりと立ち上がった。そのまま弟の頭をぼん、とひとつ叩くと、洗面所に向かって立ち去った。兄が歩くことによって動いた空気にリーナの気配を感じたヨーラは、自分は紅の殺し屋だと名乗った彼女を思い出して目を伏せた。

二週間後。

自室にいたミノルは、誰かの気配にハツとして身を縮めた。誰かが来る。この大きな建物の屋根の、どこかを走っている。そしてそれは明らかに彼のもとに向かって来ていた。警戒するミノルの真上で、一際大きな音がした。危険を感じてさっとその場から退くと、天井の板がはずれ、日本国特有の着物を纏った女が舞い降りてきた。

リーナ・ファイアセ、彼女だ。

リーナは無言のままミノルを見据え、ひとつのカードを投げた。それは彼の背後の壁に突き刺さり、揺れもせずそこに納まった。リーナはそれを確認すると、横の窓を開け四階の高さから飛び降りた。急いで窓に近寄ったミノルが見ることができたのは、地面に着地するリーナを一瞬だけだった。

「……！」

見えなくなつたリーナを追うことは早々に諦め、すぐさま投げられたカードを抜き取り内容を見る。そこには、宇宙の写真があつた。何かの星座のようだ。自分の知識を最大限に引き出してその正座を思い出そうとすると、ひとつの星座が思い出された。

「ペルセウス……！」

しかしそれだけでは何もわからない。この写真は何かの暗号のはずだ。ふと、右上の一際明るい星に視線がいく。この星の名は、確か……ミルフアク。ミルフアク・アルゲニブ。海軍大臣、ミルフアク・アルゲニブ。

やばい。

「ミノル・フォレストフォースがブルーウェイブ各員に伝える。殺し屋だ……！」

「くっ！」

対象者N0.5ミルフアク・アルゲニブ海軍大臣。彼の大邸宅は、首都シグムントの隣町フランドルにある。それもシグムントから一番遠いところにある森を抜けたところだ。その森を抜ける中、後から合流する予定だった炎火が合流してしばらく経った頃、ブルーウェイブが現れた。

最初の攻撃を受けた麻衣は、かろうじて避けたが転倒した。空からの敵は、チーカ・ツスタだ。

「ふっ、はっ！」

流星は空軍と言ったところか。たて続けに術を繰り出され、麻衣

は短刀を抜き取って必死に防御していた。

その間に、紅の殺し屋の前にブルーウェイブが立ちはだかる。最初の一人、バファロが地面に足をつけるのと同時に、輝愛は彼の咽下に刀を突きつけた。それに気付いたチーカが麻衣への攻撃を止め、標的を輝愛へと移す。

互いに苦しい戦いだった。動き始めた双方は、各方面に散らばっていく。自分への攻撃が止んだことを理解した麻衣はいち早く、動けない輝愛をかばうために走り出し、そのまま飛び上がってチーカとの交戦を始めた。バファロは自らの剣を抜きながら、突きつけられた刀を振り払い、輝愛に切りかかった。シユンとは遊魔が戦っている。沙藍は今回、暗殺をする係だった。

そして、ミノルが一足遅く地面に降り立つのと同時に、炎火が彼の前に降り立った。その様子に、ミノルは一瞬ドキリとする。先ほどの暗い自室とは違い、ここは月光によって相手がよく見える。顔を隠す黒い布、白い着物、その中に見える紅い鎧、結い上げた髪。それは正に、紅の殺し屋だった。

誘うように背中を向け、炎火はそのまま森の中へ消える。追いかけるながらミノルは思った。これは、俺を陥れる罠なのだろうか、と。「剣を抜け」

しばらく行つたところで、炎火が言った。だいぶ登った気がする。ここは森から広がる山のふもとなのだろう。昼間降った雨のせいで、地面はだいぶぬかるんでいた。

ミノルは炎火に言われた通りに剣を抜くと、炎火も持っていた刀を構える。二人はしばらく見つめ合い、同時に武器を振りかざした。

「やああああああ　　！！！！」

炎火の刀がミノルの剣を滑り、彼の右肩に傷をつける。ミノルは落ち着いた様子で瞬時に身をかがめ、無事な左手で彼女の足を払った。転びかけた炎火はそのまま転がりながら体制を立て直す。そのうちに目の前に来ていたミノルの剣を刀で受けると、片手で印を結び炎の矢を降らせた。

咄嗟に離れたミノルを追うように、距離を縮めずなお詠唱を続ける。彼の懐に入ったままの炎火は自らの刀に炎と水の力を込め爆発を起こすと、ミノルの腰を切りにかかった。その瞬間だ。

「！！！」

カラツ、と小さい何かが落ちて来たかと思えば、彼等の横に壁のようにある岩が崩れ落ちてきた。雨のせいで地盤がゆるくなっていたのだ。ミノルは防御壁を作ろうとするが、炎火が起こした爆発と斬りつけを防御しようとしていた術をもう一度別の場所に行うのは、時間がかかる。……間に合わない。

炎火は身を引いて自分だけでも逃げようとしたが、その瞬間、何かが頭に響いた。

「……にう……え……！！！」

奈美　！

「くそっ……たかが暗殺者が！」

「それでも正規の軍人なのよ！貴方達が日本を滅ぼしたから、こんなおかしな軍になっちゃったんだけどね……！」

自覚が無いって素敵なことよね！と叫びながら、輝愛はバファロを斬りつけた。彼の頬から、血がほとばしる。その様子を横目で見ながら、遊魔はシユンに術を放っていた。ワイヤーを使ってそれに応戦するシユンは、そのワイヤーで特殊な技術を使って遊魔と会話をしていた。

「リーナが、やばい」

「何だ……」

「あの山は一度調査に行ったことがある。元から地盤が悪い上に、今日は雨だ。それに術に影響されやすい大気だから、あそこでリーナがちよつとでも術使えば簡単に山は崩れる」

二人は互いに目くばせすると、遊魔がシユンにもう一度術を放ち、シユンはそのまま気を失った。簡単な麻酔術だ。遊魔はそのまま倒れるシユンを見ながら、炎火がいるであろう場所へ走った。そのさ

なか前方から、大きな爆発音と共に何か崩れる音が聞こえる。地響きもだ。

遊魔は全速力で走った。しかし次の瞬間、何か大きな力に打ちのめされてその場に膝をついた。

「……！！」

な……に……？

聞こえたのは奈美の声だった。しかも、あれは。あの、言葉は……。遊魔が混乱しながら立ち上がったとき、向かっていた場所から誰かの叫び声が聞こえた。この低い声は、ミノルだ。すると炎火は負けたのか……。不安が募ってまたも走り出すと、そこには倒れた炎火と困惑した表情のミノルがいた。

「……リーナ……！！」

ミノルは一瞬、何が起こったのかわからなかった。落ちてきた岩を防御しようとしたが間に合わず、それを察したリーナは逃げようとしたはずだった。しかし次の瞬間、一瞬、本当に一瞬動きを止めたかと思うと、ものすごい勢いで防御壁を張ったのだ。しかも、自分のところではなく、ミノルのところだけに。

「おいつ、なんで……。何で……！！」

気を失い倒れた彼女を揺さぶりながら、ミノルが叫ぶ。そこに、一人の男が現れた。ユーマ・ホルスだ。チーカが言っていた、彼女を畏にはめた人物はおそらく彼だろう。その男は迷わずリーナを抱き上げると、そのまま煙の中に消えていった。

しばらくすると、ブルーウェイブの面々が急いだ様子で走ってくる。ミノルが無事だということがわかると、あからさまに安心したように溜息を吐いた。その様子にミノルが顔をしかめる。すると、影で待機していたはずのヤイチが言った。

「最初にシユンがやられて、男が一人こっちに向かった。それから殺し屋たちの動きが突然止まったと思ったら、全員その男を追いかけてここに向かったんだ。何が起こったのか全くわからなくて、俺

「たちは追いかけてきたんだよ」

その道案内を、待機していて男が向かった方向を正確に覚えていた自分がしたのだと、ヤイチは言った。ミノルは「ありがとう」と言ってから、ゆっくりと立ち上がった。

「アルゲニブ大臣のところへ行くぞ」

彼の顔は未だ、先ほどのリーナの行いに理解が及んでいないことを示していた。

Fin .

第四章 残しておきたい記憶（あかし）

ミノルは一人、中庭にいた。一晩眠って落ち着いたはずだったが、未だに彼の頭は混乱していた。

昨夜、あれからブルーウェイブはミルフアク・アルゲニブ海軍大臣の邸宅へ向かったが、やはり彼は既に殺されていた。大臣の胸に残された武器は、赤い手裏剣。それは紅の殺し屋が当初から殺人に使っている武器だ。手裏剣には白い布がくりつけられていて、そこには赤い文字で数字がかかっている。五人目、という意味なのだろうか。昨夜の被害者には伍の数字が書かれていた。

昨夜いた殺し屋の人数は四人。最初にチーカが標的として決めた女が一人、あのバファロを追い詰めた女が一人、シユンを気絶させた術使いの男が一人、そしてリーナ。

最初に現れた殺し屋の人数は全部で五人だった。昨夜いなかった最後の一人は、アルゲニブ大臣を殺しに行った者だろう。詰まり、あの中になかった彼のよく知る人物。サラが、大臣を殺したということなのだろうか。

サラは何を考えているのか。スパイだからと言って、そこまでする必要があるのであるのか。

「……………」
妹にスパイをやらせている自分が言えたことではないか。そう思い直し、ミノルは起こしかけていた身体をもう一度、草むらに寝かせた。

「フェルメイ」

ぼつりと、呟く。彼女も、何を考えているのだろうか。何故リーナを自分の前に現させたのだろう。そして何故リーナは、自分を助けたのか。

ミノルは亡き父に思いを馳せ、目を閉じた。

『いらなんだよ、敵国の妻子なんてな』
俺にはな、何もかもあるんだから。

「……………」

『……………!!』

貴方にはいらなくても、私には必要だったのに

紅の殺し屋達の家の一室で、リーナは目を覚ました。目を開けると、そこには沙藍の姿があった。

ぼんやりとした頭で、何が起こったのか考える。今は、朝。昨夜、自分達は第五の対象者を殺しに行ったはずだ。なぜ自分はこんなところで、のんびりと自室で寝ているのだろうか。

「大丈夫？」

目を開けて自分を見つめたまま固まって動かないリーナに、沙藍が言った。

その声を聞いて、やっと自分の身に何が起こったのか理解したりリーナは、ひとつ頷くと上半身を起き上がらせた。自分は昨夜ミノルと対峙し、そして負けたのだ。彼を、守って。

「ルアとユーマは軍に行つたよ。麻衣も仕事」

「そう……………」

沙藍が用意してくれた食事を食べながら、リーナは適当に相槌を打った。その様子に全く自分の言葉を聞いていないと判断した沙藍は、ひとつ溜息を吐いてから困つたようにリーナを見た。

「私もこれから買い物行くけど、リーナは？」

そう聞かれ、リーナは食事の手を止める。見やった時計は、もう昼を過ぎている。身体の節々の痛みから想像するに、昨夜の戦い、というよりはむしろ無理な術で傷んだ身体は相当弱っているのだろう。この状態で軍に行けば、怪しまれるのが関の山だ。

「軍は休む。適当にやるから、行っていいよ」

そう言ったリーナに理解したということ伝えると、そのまま沙藍は部屋から出て行った。暗い視線をひとつ彼女に向けてから、だが。

「なみ……」

リーナは食事の手を止めたまま、昨夜のことを思い出していた。数で劣る自分達が、勝つ方法。それは、ミノルやバファロと言った抜きん出た力を持つ者達を、一対一の戦いに持ち込むことだった。そこで選んだのが、ミノルは炎火が、バファロは輝愛が対処する、という方法だ。特にミノルを戦いから引き離すのは、重要なことだった。それが、ひょんなことから彼を助けることになってしまった。奈美の声が聞こえた気がしたのだ。気のせいだったのか、本当だったのか。本当だとして、奈美は何と言っていたのだろうか。そしてあれは、誰に向けて言われた言葉だったのだろうか。そして思わずミノルを庇ってしまったが、それが正しかったとは到底思えない。

「ミノル……」

彼は何を思っただろうか。

ミノルの残像を頭から振り払い、てきぱきと食事を済ませたリーナは、気分転換に散歩に出かけることにした。久し振りの休暇だ、と言っても自主的な物だが。普段、軍の中で動き回っている彼女だが、そんなリーナにもハンドレット公国にお気に入りの場所というものもあるのだ。

「よしっ」

まだ少しくらくらする頭を振って気合を入れると、リーナは家を出た。

「炎火は」

暗い部屋の扉が開いて入って来たのは、倒れた炎火を任せた沙藍だった。薄い光が差し込む扉を急いで閉めると、大丈夫だ、という

ように彼女は頷いた。ほつと溜息を吐くのは、炎火と輝愛を抜いた紅の殺し屋の面々だった。

「昨日のことは…何だったのか。竜亜に聞いたが、それどころじゃないという返答しか返って来ない」

何度も同じ術を使って疲れたのか、遊魔はぐったりと椅子にもたれかかった。そんな様子の遊魔と遅れて来た沙藍に、麻衣がお茶を出す。彼らには母国に馴染みの茶だったが、そんなことに浸っていられるほどゆったりとした雰囲気ではなかった。

「何かあったのか」

奈美様が、もしくは国に。全ては言わない麻衣だが、皆にはその短い言葉の意味がよくわかった。だが国に何かあったのなら、すぐに自分達を呼ぶのが先決だ。それが無いということは、奈美に何かあったと考えるのが妥当だろう。

「それか、何か隠したいことがあるのか」

「沙藍!!!」

椅子が倒れるのもかまわず、遊魔が勢い良く立ち上がった。沙藍を睨みつけるが、その瞳には覇気が無い。沙藍は目を伏せると、有り得ない話ではない、というように「そうでしょ」と付け加えた。

だが遊魔にも、信じられる話ではない。炎火に着いて来た彼は、人一倍、奈美を良く思ってきた。炎火があれ程までにも守ろうとする存在、国の主である彼女が、彼女が。

「有り得ない!!!」

奈美様が、裏切り者だなんて。

疲れきった身体を支えられなくなったのか、椅子に座り込んだ遊魔に、沙藍は悲しそうに瞳を伏せる。

「兄上と、言った。みんな、そう聞いたって、確認し合ったじゃない」

「だけど…」

総隊長のいない今、云わばハンドレット公国軍の最高権力者であるミノルの、彼のことを、兄上と。それは明白な裏切りだった。少

なくともその事実を知らなかった彼らにとって、騙されていたと認識されてもおかしくはないことだ。

「輝愛は」

黙り込んだ二人を見かねてか、麻衣が口を開いた。問われた相手の遊魔といえ、もう何も話したくは無い、とでも言うように首を振った。しかし言わねばならない責任を思い出し、重々しく言った。「炎火には言わないように、って」

「まあ、無難ね」

サードが二人も休んでは困ると、輝愛はこの会議に参加しなかった。その代わり自分の考えを遊魔に伝えておいたのだ。

輝愛は、炎火には絶対に言わない方が良く、悲痛な顔をしていた。自分達でさえこんなに混乱しているのに、その上隊長まで混乱させては埒が明かない。知らなければ炎火は、このまま突き進むだろうから。奈美と炎火の間に何かあれば、それは別の話だが。

遊魔は輝愛の思いを伝えると、出来る限りの力でテーブルに拳を叩きつけ、叫ぶように言った。

「とにかく、この事はおしまいだ。竜亜と連絡が取れない限り、俺たちはこのことを忘れよう」

二人は仕方ないというように頷いた。

蒼い空。

リーナは、近所の雑貨屋を出た。あそこは彼女の好きな色のナプキンを売っていて、軍の帰りに立ち寄ることがよくあるのだ。背の低いアルバイトの店員とも仲良くなった。今回もミニタオルのタイプのナプキンをひとつ買って、リーナは店を出た。

だいたいの場所に行ったので、あとは鍛冶屋に行くだけだ。また沙藍に怒られるかもしれないが、前々から欲しい形の剣があったのだ。

「あれ……」

鍛冶屋に入ると、奥の方からカン…カン…と金槌の音が聞こえて

くる。そこらに無造作に並んでいる剣は出来上がった品物で、リーナはその中のある場所にずっと放置されるように置いてあった剣を狙っていた。たいして高い訳でもないのだが、何しろ収入はほとんど一度沙藍を通してからでないと使用してはいけなないと決められているので、今までなかなかその機会が伺えなかったのだ。

「おじさん、ねえ、おじさん！」

火の前に見慣れた顔がある。リーナは急いで側に駆け寄ると、大声で呼んだ。鍛冶屋は一度カン！と大きい音を立てて剣を叩くと、ゆっくりと顔を上げた。

「おや、リーナサード。何しに？」

この鍛冶屋は毛むくじやらの顎鬚や堀の深い顔とは比例して、穏やかな性格だという事は既に理解っていた。危ない仕事をしているというのに焦りで先走ってしまったリーナに、鍛冶屋は静かにそう言っただけだった。

「あの、あの剣、売れちゃいました？」

その焦りの原因というのが、これだ。つい先日まであった剣が無くなっているではないか。安くて良い剣だと思っていたのに。

「ああ、サードがよく眺めていた剣ですね」

ついさっきですよ、と鍛冶屋は言った。何でもリーナと入れ違いで出て行ってしまった者が、その剣を買っていったのだという。その人物もリーナと同じように、その剣をよく眺めていたのだそうだ。軍服を着ていたので知り合いかもしれませんね、と鍛冶屋は笑った。その時リーナの脳裏に何故か、長い金髪の女性の顔がよぎった。

あれは、ヤイチの隊のファースト、そして我等が紅の殺し屋の敵ブルウエイブの女だ。

「おじさん、その人ってどんな人でした？」

鍛冶屋は「そうですね…」と一拍置いてから言った。

「線はありませんでしたから、ファーストだったんでしょうね。女性で、強い目をした方でした」

髪の毛は、やはり金色。リーナは鍛冶屋に一言礼を言うと、もの

すごい勢いで鍛冶屋を飛び出した。

近くにチーカがいるのだ。ブルーウェイブのチーカ、ヤイチの部下のチーカ、同じ日本人のチーカ。彼女が近くに。

リーナは片手で探索の術を使いながら、ろくに前も見ずに全力疾走した。

「……っ！」

角を曲がったところで、リーナは胸に衝撃を感じた。相手が人間だとわかると、すぐに礼を言う。倒れた人物に手を差し伸べると、それは幼い少年……ヨーラだった。

「あ……」

「君……」

ヨーラは学校の友達と一緒にだったようで、同じ制服を着た同年くらの男女に助け起こされる。二人はそれからやつとリーナの階級に気付いたのか、軍人らしいきびきびとした動きで敬礼してきた。どうやら彼らは、軍の付属施設に通っているようだ。

リーナが敬礼を返すと、ヨーラは二人の友に先に行くよう施した。「ごめん、大丈夫だった？」

二人が見えなくなったところで、リーナが言った。互いに、馴れ馴れしくするところを他人に見られてはいけないことを理解していた。

「うん、僕もごめんなさい」

気まずそうにそう返すヨーラは、明らかに以前会った時とは違っていた。どこか大人びたような、そう、年齢にしては様々なことを経験したような顔立ちだ。そして、何か迷っている。

「……チーカを、見なかった」

ふと、リーナはそんな事を言っていた。ヨーラが知っているような目をしていて、といえば嘘になるが、何かを感じたのは否定できない。少し紅潮した顔が、さらにリーナの不審を募らせた。

「殺すの」

やたらと真剣な瞳で、ヨーラが言った。やはり何か困惑したよう

な表情だが、しかしリーナの瞳をしつかりと見据えていた。

この子は、どこまで真実を知っているのだろう…。いや、知っているはずがない。何も知らない事に変わりはない、しかし。何かを考え、悩み、また考えた。そしてその結果が、「殺すの」という疑問になったのではないか？

人間は愚かな生き物だが、それを知っている人間は、時に優しくなれる。ヨーラはまだそれを知らないようだが、そこに行き着くだけの素質があるのは確かだった。この子は、優しくなれる子かもしれない。

もしそうなら、もし、そうなら…。

「ちがうよ」

長い沈黙を経て、リーナが言った。そう、殺したい訳ではない。

もし、そうなら。ヨーラが本当の意味で優しい人間になれたなら、リーナが言ったことの意味がわかるかもしれない。

「じゃあ、何で」

「何でだろ…」

そう、リーナが今一番疑問に思っている事が、それだった。何故自分は、チーカを追っているのだろう。

紅の殺し屋、ブルーウェイブ。そんな物を考えての行動？いや、ほとんど衝動的に行動したとしかいえない自分が、頭の中で理由を整理したとは思えない。ではどうして、チーカを追っているのか。

リーナはチーカを追うという熱が一気に冷めた気がして、俯いた。

「…知らないなら、いい」

そう一言呟いて、リーナはヨーラの横を通り過ぎた。何故、チーカを追うことに対して、こんなに懸命になったんだろう。むずがゆい気持ちを持って余しながら、胸にそっと手を置く。

そんなリーナのとほとぼと遠ざかっていく背中を感じながら、ヨーラは立ち止まっていた。緊張したような、それでいて興奮したような顔を先程のリーナのように俯かせながら、唇を震わせている。落ち着かない様子で手を握ったり広げたりしながら、ヨーラはその

顔を一気に上げ振り向いた。

「ねえ！」

立ち止まったりリーナがゆっくりと振り向くと、そこには行動の割に頼りない表情をしたヨーラがいた。

「教えて、…なんで、殺すの」

ハンドレット公国軍本部の西端には、陸軍専用の小訓練室がある。リヨはそこで、簡単な射撃訓練をしていた。今日リヨの所属する第八戦闘部隊は丸一日訓練がない。何週間に一度かある特別な休日だ。それでも隊長、副隊長となれば自主訓練や会議を行うのが普通で、リヨも例外ではなく、訓練をしていたという訳だ。

しかし今日はこれから、ルールと会う約束をしている。そう、二週間前にした約束の日がやっと訪れたのだ。この二週間ルールの表情に変化が無かった訳ではないが、やはりどこか沈んでいるように見える。サードとなれば階級としての負担は大きい物なのだろうか。それとも家族や友人に何かあったのか。いろいろ考えてみたが、やはりリヨにはわからなかった。

「ふう」

被っていたヘルメットを外し、正面に備え付けられた時計を見やる。横に流している長めの前髪を頭を振って振り払うと、もうそろそろ約束の時間になるのがわかった。リヨは急いで片付けをすると、訓練室を出た。

「あ……」

着替える時間も惜しんで、リヨは小走りで軍を後にしていた。しかし軍の正門を出てしばらく歩いたところで、見知った顔を見つけて静かに立ち止まった。近くの宿屋からユーマが出てきたのだ。二人の女性と共に。

リヨは咄嗟に物陰に隠れた。何だかとても陰鬱な雰囲気だったのだ。ユーマはいつもルールと一緒にいる人間のうちの一人だが、その時とは別人のような暗い表情をしている。女性達も何やら真剣

な面持ちで、修羅場か、とりヨは舌打ちをした。このまま立ち去ってもいいのだが、というか立ち去るべきなのだろうが、一度知り合いを見てしまつて声もかけずに立ち去るのはリヨの中ではすごく胃がむかむかする事だった。

「今から行くの？」

片方の釣り目がちな女性が言う。ユーマはその問いに黙って頷くと、何か言いたそうに唇を動かした。一度視線を彷徨わせ、先程言葉を発したのとは違う女性を睨みつけるように見据えた。

「お前、とにかく黙ってるよ」

「何を今更……」

「お前がこの前、軍に行った事は知ってる。あいつ、すごく動揺してた」

修羅場……？本当にこれは修羅場だろうか。ユーマが女癖が悪いという噂は聞いた事がなかったが、　　というかむしる彼は、リーナ・フィアセサードの恋人だという噂が大半を占めていたはずだ。しかし彼女ではない女性二人を引き連れて、この場。一目見ただけで修羅場だと思つてしまつたが、これは本当に修羅場なのだろうか。

「何を……」

「本当に、今更。私が何か言つただけで動揺するような人じゃないよ」

わかつてるでしょ？というように、ユーマに睨みつけられた濃緑の髪の女性が言う。しかし「あいつ」に何かを言つたことは否定しないように、濃緑の髪の女性はふうと溜息を吐いた。それに釣り目がちな女性が少し眉を動かす。

「確かに」

「じゃああいつは一体、何に動揺してたつてんだよ」

悔しそつに拳を握り締めるユーマの姿は、今までに見たことのないものだった。と言つてもリヨは、ユーマの姿をそんなにたくさん見た事がある訳ではないのだが。リヨは這い蹲るように、隠れた壁に寄りかかった。もつときちんと、彼らの言葉が聞きたかった。

「大方、ブルーウェイブと接触でもしたんじゃない？」

「沙藍……！」

ブルーウェイブ……？つい先日結成されたという、対紅の殺し屋の特別組織だ。……これは修羅場じゃない。彼等はいったい何の話をしているのだ？接触というのは何だ。恐らく現段階でのハンドレット公国最重要機密であるブルーウェイブのメンバーを彼等は知っているということだろうか。

「やめて」

リヨが考え込んでいるうちに喧嘩になろうとしていた二人を止め、釣り目の女性が割って入った。その一言に一気に混乱が冷めたリヨは、また隠れる事に専念する。そういえば先程ブルーウェイブという発言で驚いたが、ユーマは濃緑の女性のことを「沙藍」と呼んでいた。彼女の名は沙藍というらしい。

「……すまん。仲間割れはよくないよな……、ああ、輝愛と炎火の怒る声が聞こえる」

「……馬鹿、聞こえないよ。……ごめん」

輝愛、炎火。日本人の名前だ。ユーマはルアールと同じく、昔日本国に住んでいたという話を聞いたことがある。友人の名だろうか？二人の女性もその名を知っているようだが、二人も日本国に關係のある人間なのか。そういえば「沙藍」という名前も日本人の名だ。「とにかく俺は軍に行くよ。一応伝えておくけど、随時連絡取って真相を明らかにする」

「わかった。私も仲間割れは嫌だからね。……命をかけた戦いで」

いのちをかけた、戦い。何のことを言っているのか。彼等は、もしかして……？

「麻衣は仕事？」

沙藍に問われた釣り目の女性はひとつ頷くと、颯爽とその場から立ち去った。自分が隠れている方向に來なくて良かった、などと考える余裕もなく、リヨはただひたすら残った二人が何か言わないかと耳を傾けていた。

「さて、それじゃ私も本当に買物に行くかね」

ユーマは沙藍の言葉に「頼んだ」と言うと、沙藍もユーマに同じような事を言った。それを聞いてユーマはニヤリと意地悪そうに笑い、それを受けた沙藍はまた同じような顔をしてその場から立ち去った。喧嘩するのは仲が良いから、そういう事だろうか。

リヨが呑気にそんな事を考えていると、ユーマは一人ぽつりと呟いた。

「…別にな、お前が良いと思ってほめかすようなこと言ったんだつたら、俺だつて別に良いんだよ」

そうだろ？

その最後の言葉が自分に対してのものだと瞬時に気付いたリヨは、後ろも振り向かずそこから走り去った。

「真実を知る人物は、多い方がいいんだ」

蒼い空。

小さな丘がいくつも連なり出来た神聖なその場所に、ひとつの人影があつた。生きてそこにいるかのように真つ直ぐと立って動かない数々の、墓。綺麗に磨かれた大石で作られた無機質なそれをひと撫ですると、チーカは片手に持っていた花束をそこに置いた。そして腰に挿していたふたつの剣のうち片方を抜き取ると、いつもそうするようにそこに座つて、膝の上にそれを置いた。

腰に馴染んだ使い慣れた剣とは違い、一切の装飾が無いシンプルな柄。チーカの剣もなかなかシンプルだが、膝に置いた剣はそれは自分の物とは程遠い、本当にただの剣だつた。しかしその秘めた力は膨大な物で、かつて父が腰に下げていた頃は本当に光り輝いていたものだ。そう、これは楽師であつたチーカの養父、アルナイル・ツスタの剣なのである。

父アルナイル・ツスタは、かつてハンドレット公国王付きの楽師団長をしていた。音楽好きの王はいつも彼を側に置き、またアルナイルも喜んで王の為に得意の豎琴を弾いていた。楽師でありながら

軍の中称という役割を担っていたアルナイルは、日本国との戦いで死に、骸をあさられ剣を奪われた。

その剣は高額で取引されいろいろなところに飛んだらしいが、最近あの店で安値に戻って売られているのがわかったのだ。あの店主は、拾った物だし錆びがなかなか取れないので安くしたのだと言っていた。

「……」

脳裏に浮かぶ父の笑顔を一度振り払うと、チーカは片膝を立て、そこに置いていた剣を今度は墓に突き刺すように構えた。唇を小さく動かし、ふつと吐息を吐く。そして彼女は、小さな小さな声で日本術の呪文を唱え始めた。

「我 此処 誓 一」

震える事すら忘れたように、静かに呟くように詠唱するチーカ。身動きをしないその身体からは、しかし狂おしいほどの悲壮感が漂っていた。

「死者 一切 忘為 弧遺物 心託」

チーカも、この呪文の意味を知らなかった。日本人や、そこに行つた事のある者なら理解する事ができるというが、チーカにはそんな気は一切なかった。ただ、本当にこの呪文を唱える事で日本の伝統とやらの通りになるのなら、賭けてみたかったのだ。

「一 御仏 彼等 守護」

自分に、術を使う素質が無いことぐらいわかっている。きっと、だからチーカの両親は、チーカを捨てたのだ。術に長けた国、日本。きっとそこでは、術の力が弱い者は軽蔑されているだろう。だから、自分を、母は、自分を……。

ずしり。手の中にある剣の、そんな重みが悲しい。

おとうさん。

ぼつんと、ひとつだけ墓石のある丘に、リーナとヨーラは来ていた。海の波音と潮風が柔らかく吹くそこは、リーナは何度か来たこ

とのある場所だが、ヨーラも知っていたのだろうか。穴場とも呼べるこの人影の無さ。物騒な話を始めようとしている二人にはうつつけの場所だった。

「おびき出せって言われたの？」

背後に人の気配を感じたので、ためしにリーナはそう言ってみた。ヨーラは気付いていないような顔をしているが、あなどれないのがこの少年の怖いところだった。と言っても、リーナは誰かを怖いなどと思ったことはないのだが。

「ちがうよ！」

間髪入れずそう言ったヨーラに、リーナはクスリと笑う。そんな事は重々承知している。何しろリーナには、その気配の正体がわかつているのだから。ニヤリと口元を歪めながら「ガキ」と言うと、ヨーラはあからさまに嫌そうな顔をした。

「冗談だよ。君は信じることのできる人間だ」

面食らったような表情で立ちすくんでいる彼は、どこから見ても抜けているように見える。こんな善良の塊みたなものが、こんな物騒な国をほっつき歩いてよく誘拐されないな、とそんな事を一瞬考えるが、しかしこの国を物騒にしているのも、確か誘拐したのも自分だったと自嘲気味に微笑んだ。

何やら思案顔で考え込んで、しかし口元の微笑みを取らないリーナに、ヨーラは内心不安でいっぱいだった。いつ正体を現すのだろう。この悪者は、と。そう思いながらも、実はリーナ達のことを悪者と思いついていないからここまで来たのだと、ヨーラは理解していないのだが。

「……。」

疑うような目つきをリーナに向けたまま黙りこんだヨーラに、リーナは顔とは反対に少し真剣な声色で言った。

「…人殺しに信じられても？」

でも君の兄さんだって人殺しじゃないか。そう呟くように言ったリーナを睨みつけると、ヨーラはゆっくりと言り返した。違つよ、

と。

「兄さんは軍人だもの。国の為ならいいんだ」

国の、ため。確かに、ヤイチはハンドレット公国を守る為、セカンドとして戦っている。規律正しい軍人として。しかし、君は知らないのか？ヤイチが戦っているのは、ハンドレット公国の為ではないということに。戦うことの意味、それは、誰だって、いつだって、大切な人を守りたいからなのに。

「私だって、国の為さ」

だから、これは嘘かもしれない。だって自分にはもう、守りたい人なんていないのだから。

「欲望だらけの国じゃない」

そう言われて、成程と思ってしまう自分の心が冷めていくのを、リーナは感じた。事実そうなのだ。奈美を守りたいなんて言葉を掲げているだけで、本当はただ、復讐することで自分を満たしたいだけ。だって、失くしてしまった物があるんだ。守りたかったのに、守れなかった者があるんだ。

「何も知らないな、君は」

「じゃあ、ちゃんとした理由があるっていつの!？」

自嘲のつもりで吐いた溜息を、自分が嘲笑されていると取ったらしいヨーラは、カツとなってそう言ってきた。それに比例してリーナはやけに冷静に、こう言った。

「あるよ」

何の話だ。

リーナの言葉を最後に沈黙している二人を確認しながら、リヨはそう思った。ユーマのところから逃げて全力疾走でルアールとの待ち合わせ場所に来たと思えば、そこにはリーナと見知らぬ少年がいた。リーナを見てまたユーマの言葉を鮮明に思い出してしまい、咄嗟に隠れてしまったのだ。

しかし、またあの疑惑がリヨの脳裏に浮上する。もしかして彼等は…。

自分の予想通りだったら、これは危険な事だ。何故誰も気付かないのだろう？自分が気付いてしまうような事なのに。

これが、本当だったら。ルアーはその事を知っているのだろうか？入軍当初からリーナやユーマと仲の良かったルアー。その友人二人が、”それ”だなんて。知っている筈が無い…知っていて、未だに軍に居られることなんて、あの優しいルアーには有り得ない。だとしたら二人は、この半年ずっとルアーを騙し続けてきたという訳か…？

だが、まだ真実はわからない。自分とて二人には良くしてもらっているのだ。信じなければ、彼等を。そう思うのに。何故かリヨは、疑いを拭い切れない自分に苛立っていた。

長い沈黙の末。

「…なんで私の正体をばらさないの？」

少しからかうような口調で、リーナが言った。しかしその瞳はどこまでも真剣で、ヨーラはきちんと答えなければ、と思った。しかし…その問いに答えるまでに、まだヨーラは至っていないかった。

「約束、したから」

詰まってしまう言葉に、自分で動揺する。そんなヨーラをリーナが気付かない筈もなく、苦い顔をしながら畳み掛けるように言った。
「違うな」

どくん、と脈打つ心臓。確かに、違う。ヨーラが不安を無理矢理にでも掻き消してまでリーナと二人きりになったのは、そんな”約束”の為ではなかった。そもそもそれだけなら、わざわざこんな危険を冒すことはなかったのだから。

ヨーラの心を知ってか知らずか、リーナは言う。

「知りたいことがあるからでしょう」

「……でも約束もしたじゃない」

本当の事を言い当てられ、思わずそう言い返す。そう、ヨーラには知りたい事があった。こんな場所で二人、自分の知っている事を素直に言ってしまうばいいのに、それなのに言わずに二人きりにな

った。それは、先日やけに落ち込んだ様子で家に戻ってきた兄の事を思つての行動でもあつたが、それよりも。

それより何より、自分が、気になつたのだ。

「知りたいことは、何」

最終通告のように言い渡される、それ。ヨーラはリーナに対し恐れを抱いたまま、震える唇をきゅつと引き結び言った。

「あなたはだれ」

先程から、徐々に、徐々に、リーナの背後に見える何かが、どんどん膨らんでいくのがわかる。それは、ヨーラに対する何かなのか。それとも他に対するもの、もしくは自分に？だが確かにヨーラには、それは哀しみに見えたのだ。哀しみ、憎み、愛。彼女の中に膨らむ気持ち。

リーナは感情が身体の内から外へと流れ出ているのを感じながら、笑つた。その顔はまさに、凶器だつた。

「言つたとおりよ。」

私は、元日本国軍一番隊隊長、現紅の殺し屋隊長、紫苑炎火」

向かい合つた二人。海と太陽を背にしているリーナと、シグムントの街並みを背にしているヨーラの間を、びゅつと風が吹き抜けた。更に、その二人を背にしてリヨが、一目散に逃げ出した。

気配は、リヨだと。そんな事ははなからわかつていたリーナは、ひとつ溜息を吐く。リヨならば、平気だろう。彼はハンドレット公国に多大な影響を及ぼすような人物ではない。もしそうであっても、彼ならばこんな話を聞かれようが聞かれまいが、リーナには、そして紅の殺し屋にはどうでも良いことだつた。ルアールにとつてもそうだと、思っている人間のほうが少なかったが。

「私は殺す。死んでいった仲間のため、信じるもののため、私を生かした人のため。復讐のため、邪魔な者は殺す」

それが、私の決意。元より、国を守る為に作られた軍。それが殺す為になつたのは、国が崩壊し、主君がいなくなつたから？いや、そうではない。これは、リーナ達の意志だつた。これが、自分達の

意志。日本国に住む民の意志。

強い瞳に、負けそうになる。ヨーラは悲しそうに眉を下げると、静かに俯いた。

「さあ教えて。チーカはどこに行ったの」

貴方が知っていることぐらい、見ればわかるわ。

墓場。チーカは手の中にある剣をぎゅっと抱きしめると、その場に座り込んだ。そして、過去を思い出す。

チーカは幼い頃に両親に捨てられた為、日本国について何も知らなかった。ただある日突然親がいなくなつたと、それしか理解できないような幼い頃に捨てられたのだ。そんなチーカを不憫に思つたのか、養父アルナイルは日本国の大まかな風習などを知人に聞いて調べてくれていた。とても、優しい父だつた。

楽師の父は王のために音楽を演奏する人間。そんな父が戦争に借り出されたのは、六年前から三年前まで続いた”名譽ある戦”といわれる日本国との戦争の時だけだつたが、戦の腕は相当だつた。そもそも何故楽師が戦争に行くのか、それは今とは違うハンドレット公国軍のあり方にある。

ここ数年でずいぶん変わってしまったハンドレット公国軍。父が生きていた頃の公国軍は、今のような無理矢理な階級付けでは無かつた。今となつては四つしか階級のない軍だが、当時は尉官、佐官、将官とあつて、尉官の下には一般兵が、将官の上には総司令官がきちんといた。

総司令官は言わずもがな国王。そしてそれを支える将官は今ほフォースのようなもの。しかしそのあり方は随分と変わってしまった。当時の将官は前線に出て行く事など滅多に無かつたのだが、フォースは存知の通りどこでも出向く特別な人間と認識されている。それなので当時中将だつたアルナイルは名譽ある戦の最後になるまで前線には赴かなかつたのだが、その代わり将官には他の役割、つまりアルナイルの場合は楽師団長といった、それぞれ特別な役割につい

ていたのだ。

そういう訳で、アルナイルの楽師団長という役割は、つまるところ軍人の仕事だったのだ。

『日本は良いところだと聞いている』

敵だというのに。まだ父がチーカの側にいた頃の、優しげな声が聞こえてくる。

『この戦争が早く終わって、いつか日本に行けたらいいな』

『私は、私を捨てた日本が好きじゃない、です……』

そう、自分はこんなそっけない言葉を返したのだ。父だというのに、いつまでも慣れない言葉遣い。幼い頃から自分を育ててくれた相手だというのに、何故かチーカの中では、他人という言葉を拭い切れなかった。幼いながら、義理の家族だと、そんなことが頭の隅にいつもあったのだ。

『行けば何か変わるかもしれんよ。お前の母親も何か理由があったのかもかもしれん』

少し困ったような顔をした父。蒼く美しい髪の毛は、自分の派手すぎる金髪とは違い、優しさが滲み出ていた。太い眉毛も同じような色をしていて、チーカはその柔らかい色に包まれた父に抱きしめられるのが好きだった。

その時も、困った顔をしながらも手を差し伸べてくれた父。首元にぎゅう、と顔を埋めて、チーカは小さな声で答えた。

『違います……、国が悪いんです。もし理由があったとしたって、きっとその理由は国のせいなんです。それに』

思い出の残像が暗くなっていく。涙声の自分は、それを悟られまいと必死に父に抱きついていて。ぼやけて見えなくなっていく二人暗闇の中に、幼い自分の声が響いた。

『それに、お父さんを殺そうとする国なんて嫌いです』
戦の声。

血だらけの父。

その日は、王城で王の誕生式典が行われた。その後、王に近い

人のみで行われたパーティーに招待されたチーカは、すっかり疲れ果てていた。普段アルナイルはあまり公や仕事の場にチーカを連れて行かないので、すっかりへばってしまったのだ。

父はこれから仕事だということで、用意された王城の一室で寝入ってしまったっていたチーカ。しかししばらくして起きた時、異様な何かを察知した。不安になって城のあちこちを歩き回るが、父の姿はどこにも見当たらない。仕事に行くと言っていたのだから、どこかへ出かけたのかもしれない。だけど、この不安は何…？

置いて行かれてしまったような気持ち。

『チーカ様、どうかいたしましたか？』

ふいに声をかけてきたのは、楽師団に所属しているアルナイルの弟子だった。楽師団で最年少の彼とは、チーカも顔を覚えるほどには会っていた。二人の知らない人物と共にいたが、同じような服装をしているのでおそらく彼同様アルナイルの弟子なのだろう。

チーカは不安を押し殺しながら、小さく問うた。

『お父さんは…？』

三人は不思議そうに顔を見合わせると、最初の彼が知っているでしょう、とでも言うように当たり前な口調で言った。

『戦に出ましたよ』

『！！！！』

さつきからの不安はこれだったんだ。チーカはそれを聞いた途端何も言わずに振り返り駆け出した。追いかけるならば、お父さん。何故だかわからないが、そう思った。

突然のことに驚いた三人は事態を把握するのに時間がかかったが、最初の男性がすぐに理解するとチーカを追いかけた。行ってはいけない、とチーカを追いかけながらひたすら叫ぶ。すぐに追いついた男性は、腕を取ってももがきながら前に進もうとするチーカの首をとんと叩いた。

『やっ』

小さく鳴くと、チーカはそのまま意識を失った。後から追いつい

た二人に部屋に運ぶよう頼むと、その男性はどこかへ消えた。

どこへ行くの。

遠ざかる足音を聞きながら思う。

その足音は、誰？

この戦争が終わったら、日本へ行こう。

いかないで。

行かないで、行かないで！！！！

私を置いて行かないで。

ぱちりと、チーカはその大きな両目を開いた。飛び起きようとしたが、近くに人の気配がするのを感じ無理矢理身体を抑えつける。

先程の弟子達のように、ひとつしかない扉を挟んだ向こう側で話し込んでいるようだ。ぶつぶつと何かしゃべっている声が聞こえる。

自分が今どのような状況にあるのか、チーカはもう理解していた。そして今何が起こっていて、自分が何をしたいのかも。ゆっくりと頭を動かして窓の外を見ると、先ほど起きた時よりもだいぶ月が傾いていた。夢の内容とは裏腹に、だいぶ時間が経ってしまったようだ。

チーカはゆっくりと起き上がると、音を立てないようにしながら静かに窓を開けた。自分がいる場所はだいぶ高いところのようで、下を向くとぞつとする程だ。しかしチーカは歯を食いしばると、足場がある事を確認してそろそろとそこに足をかけた。

満月を背にして、静かに窓を閉める。チーカは咄嗟に思いついて自分の髪の毛を一本抜くと、窓の隙間からそれを入れて鍵を閉めた。上手く閉められた事を確認すると、するりと毛を自分の洋服のポケ

ツトに忍び込ませる。そのままチーカは、簡単に人が立っていられるような場所ではない細い足場を伝いながら、なんとか人気の無い場所へと自身の身体を潜り込ませることができた。

近くにあった大木に静かに飛び乗り、枝を伝って地面に降りる。

運がいいのか悪いのか、そこが王室の目の前だということとはチーカでさえもすぐにわかった。カーテンの隙間から零れる煌びやかな照明は、自分の記憶にあるその場所と同じだったからだ。

『、』
中から声が聞こえる。チーカは咄嗟に、その壁にへばりついた。もつとよく聞かなければ。

『そ こちらで、い う』
何の話をしているのか、まだよく聞こえない。自分は逃げ出した身なのだから、こんなことをすれば捕らえられてしまうかもしれない。だけど、それでもいい。チーカは決死の思いで、カーテンの隙間から王室を覗き込んだ。

そこにいたのは王と、何人かの軍人達だった。階級は……父と同じ将官だ。彼等は何の話をしているのだろうか？

『しかし、敗戦した国に王自ら出向くなど、どんな事になるやらわかったものではありませんぞ！』

敗戦？

『いいだろう。もう終わったんだ、戦争は。しかし私自ら手にかけてやらねばならん者がいるのだ』

『どこにいるというのですか？日本国にはもう何もありません。残ったのは王が異界から呼び寄せた魔物達と、それから数少ない生き残り達。軍ですら、もう壊滅しました。指導者は床に伏せているといます、もう王に敵意を向ける者などいないのですよ！？』

『いるんだよ！！私はその者を殺す為にこの戦争を仕掛けたのだから。そいつは欲深く術の力で我が国を滅ぼそうとする悪党だ！そいつが死んだという確実な情報が入ってこない限り、わしは日本国行きを諦めたりはせんぞ』

『……わかりました。ですが、しばらくは待つて下さい。まず軍に日本国の被害を調べさせなければなりません。それに、我が国の情勢も安定させなければいけない事だつて、王にはおわかりでしょう』
何を言っているのだろう、彼等は。日本国は負け、私たちは勝つた。戦争は、終わった。

なににどうして、お父さんは帰つてこないの？

『チーカ様！』

遠くで自分を呼ぶ声が聞こえ、チーカはハツとした。ここから立ち去らなければならぬ。見つかつてしまつては終戦の情報を手に入れた意味が無いのだ。

すぐさま駆け出し、そのまま城を出た。そこらに溢れかえる血の跡。この国が戦場になつたわけではないが、負傷者が皆帰つて来てこの有様なのだろう。だとしたらこの血を辿れば、そこに行き着くわけだ。

無言のまま、ただひたすら歩き続けた。気付かぬうちに街道から焼け野原に入つていて、いつの間にか辺りには死体が散らばつていた。もっと、もっととたくさん死体を見なければ、父がいるところにはいけない。

『これは違う、これも違う、これも、これも』
どこにいるの、お父さん。

死体を踏みつけては転んだり、ひっくり返して顔を確認したりしながら、チーカは無表情のまま戦場を彷徨つていた。頭のどこかで理解していたのだ。父は死んだと。

しばらくして、いつの間にか囲まれたのがわかつた。汚い笑いを溢しながら近寄ってくる集団。彼等の手には、様々な戦の道具が握られていて、それに統一性がない。骸あさりの集団だ。チーカにはそんな知識はなかつたが、少なくともこいつらが自分に得を与えるために近寄つてきたのではない事は瞬時に判断できた。

『げへへ……』

眉を顰めるチーカを怯えていると取つたのか、その中の一人がそ

んな笑い声を発した。チーカはゆっくりとその方向に視線を向ける
と目を見開いた。あいつの手の中にある、あの剣は。あの柄は、父
の。どこにでもありそうな剣だが、そこにはひとつ父のこだわりの
宝石が埋め込まれていた。オーピメントという鉱物。またの名を、

雌黄。光り輝くそれは、チーカの髪と同じ金色だった。

『返せ。それを返せ！！』

丸腰の少女が、大の大人を相手にやみくもに飛びかかって勝てる
はずもなく。一瞬驚いてたじろいだ彼等も、冷静でない目の前の子
供をあつという間に黙らせた。それでも何度突き飛ばされても根気
強く立ち上がるチーカに、少し手こずってはいたのだが。

立ち上がる力を失くし、倒れ込む。歪む視界の中で、遠ざかる集
団。その手にはまだ、父の剣が握られていた。

待つて、お父さん。

何で行っちゃうの、置いてかないで。

許さない。

置いていったら許さない。

それでももう追いかける力などもっていない事を知っていたチー
カは、静かに夜空を見上げた。光る星々を見つけると、もう一度、
遠ざかっていく集団を見つめた。

あちらには、日本がある。

日本なんて嫌い、お父さんを連れて行ってしまっから。

「一 記憶 解放」

最近になって聞きなれた声が聞こえ、チーカはブーツとしていた
頭をフル稼働させて思考を現実に戻した。そこには、父の墓に向か
って左手を突き出すリーナの姿があった。訳がわからず彼女のその

姿を凝視していると、リーナは静かにその左手を降ろした。

「貴方のそれじゃ失敗よ、…これで完成」

一 記憶 解放。

どつりで術が発動しないわけだ。リーナがそう唱えた瞬間小さく空気が震えたかと思うと、そこには暗いブラックホールのような小さな穴が出来ていた。膝に置いていた剣が宙に浮かび、そこに吸い込まれるように消えていく。

あっという間の出来事で見ているしかなかったが、チーカにとつて一瞬のうちに全てが終わってしまった。暗い穴も、もう無い。

「リーナ・ファイアセ……サード殿」

何を言えいいのかわからなくなってとりあえずそう言ってみたチーカに、リーナはふわりと微笑んだ。といっても、目元だけが墓に向いていた身体をチーカに向けると、リーナは長いふさふさの髪を慣れた動作で掻き揚げる。

「貴方に”殿”なんてつけられると気が引けるわね」

「敬語は常識です」

それを受けて、リーナは静かに黙り込んだ。似ている　そう思ったのだ、チーカのことを。

もしかやと思い先程自分が異界への門を開いた墓の名前を見ると、そこにはチーカと同じ姓が刻まれていた。情報として読んだことがある。かつてハンドレット公国最高の楽師と謳われた軍人、アルナイル・ツスタ。彼女の養父、というわけか。

成程、似ているはずだ。

「…復讐は空しくなったら終わりよ」

突然のリーナの言葉にチーカは驚いて「なに…」と小さく溢しただけだった。そう言ったきり青空を見つめ続きを言わないリーナに疑問符を抱えながら、チーカは首を傾げた。そんな様子のチーカにリーナはまたクスリと笑うと、静かに言った。

「全てを捨てなければ復讐は成立しない」

今も未来もいらぬのなら、復讐を続けなさい。でも誰かとの明

日が欲しいなら、復讐なんてやめたほうがいい。でないとな身を滅ぼすわ。

その表情にチーカは、自分がブルーウェイブの一員だということ彼女にばれているという事実を理解する。どこから情報が漏れたのだろうか、よりにもよってリーナ・フィアセに流れてしまうなんて。

しかい、ふと思う。それを知っていながら、何故リーナは自分に近付いたのだろう。復讐の為にブルーウェイブに入る事を承知したと知っていながら、どうしてこんな助言をしてくるのだろうか。彼女は何か、他に何か自分に伝えようとしているのではないか？

「……」

馬鹿げた話だ。彼女は紅の殺し屋。敵だというのに。伝えるも何も無いではないか。それなのに拭い切れない、何か。これは…父を失った時の不安に似ているような、これは、これは…。

しかしそれは、突然起こった。二人が黙って見つめあうその最中、遠くからサイレンのような音が聞こえたのだ。一度ではない、何度も繰り返すように聞こえるその音に自分と同じように危険を察知したらしいリーナを見て、これは紅の殺し屋の仕業ではないのだと思う。そもそも紅の殺し屋は今まで夜しか行動した事が無かったな、とも。

「あそこは……アルビレオ」

リーナがそう呟いた直後、そちらの方向から獣の遠吠えのような声が聞こえた。魔物が、街を襲った。瞬時にそう判断した二人は目を合わせると、急いで本部へと走った。

F i n

第五章　これは血の伝承

「状況は！」

リーナとチーカが軍本部の第一司令室に駆け込んだ時、そこには既に二人のフォースと二人のサードが集まっていた。勿論彼等も部下を何人が連れていたが、上官の会議の間に駆け込んでしまった事にチーカは少なからず後悔しつつ敬礼する。

「こりゃあ…飛族だな」

術で作られた望遠鏡型の探知機を覗き込んでいたバファロが顔を上げながら言った。術や魔物に関しては自分が専門だからと思いいリーナがそれに近付くと、気付いたバファロが探知機からどいた。

バファロに習って探知機を覗き込むと、そこには確かにアルビレオの街を襲う飛族の姿があった。

「本当…」

しかし、アルビレオの街に住む飛族の獣。それは確か、遙か古に彼等の先祖が街を守る神としてアルビレオに住む事を人間と約束したという伝説の血筋を持つ魔物では無かっただろうか。現在でも知恵を持つという噂があるが、それは今となっては噂でしかない。しかし街を襲うという行為は血の契約として有り得た事ではない。

その旨を周りにいた人間達に告げると、ミノルがそれに答えた。

「だが…何らかの原因により魔物は暴れた。現に怒りで我を忘れてる」

対策の必要がある。

そう一言言うと、ミノルは素早く決定を下した。

「飛族撃退特別班をアルビレオに派遣する。フォース二名、サードはファイアセと以下第五戦闘部隊、第一第二補給部隊、レイと以下第二戦闘部隊、ユーランと以下第一戦闘部隊。各部隊からの要員は二小隊とする」

名を呼ばれたフォース、サードと、告げられた部隊に所属する軍

人達が一斉に敬礼した。ユーランと呼ばれたサードを横目で見ながらルアールが苦い顔をしていたが、リーナはそんな事は気にせずひたすら煙が上がるアルビレオの街を眺めていた。

「事態は緊急を要する。既に多くの被害者を出している事はここから見ても明らかだ。現地に着いたら補給部隊は術軍第一補給部隊隊長を中心にすぐに市民の救助を。戦闘部隊は我に続け、飛族を叩く！」

その宣言を聞いて動き出す軍人達。その中でリーナの元にルアールが行った事を確認しながら、ユーランサードがリーナに声をかけた。

「よろしくな。初共戦だ、仲良くやろうぜ」

「よろしく」

彼、カイ・クロエ・ユーランサードとリーナは初共戦。今まで戦の場で一緒になる事が無かった。空軍指令隊長カイ。彼の實力は如何なものか、リーナは本当に楽しみだった。しかし、ルアールは。

リーナに挨拶をしたきり自分の戦闘部隊に指示を出しに行ったカイを二人は見つめていた。ルアールはどこかうっとおしそうに髪を一束耳にかけると、自分も指示を出しに行くという意味を込めて「あとでね」とリーナに言った。

「……さてと」

久々のリーナ・ファイアセとしての戦。市民の救助に向かいますかね。

馬にまたがり部下を整列させると、いつの間にかリーナの隣にルアールがいた。どうやら後ろにはカイが着くらしく、二人とその部下は並んで行進のようだ。

先程から浮かない顔のルアールを見て、リーナはひとつ溜息を吐いた。それに気付いたルアールは、いつもとは打って変わって自分から話題を持ちかけてきた。皮肉なほど嫌そうな顔をして。

「カイ嫌い」

「……はい？」

あなた麻衣ですか。とでも聞きたくなるほど短い、というか主語が無い。これから魔物退治に行くという時に何が嬉しくてカイの悪口を聞かなければならないのだろうか。とリーナは内心舌打ちするが、これから共に戦う仲間として情報があるのも悪くない。もつとちゃんと話せという意味を込めてルアールの頭をゴツンと叩くと、後ろにいた数名の部下がぎょつとした表情を二人に見せた。

「……いたい」

「何が嫌いな」

ルアールの批判を軽く無視し、問う。すると彼女は歪んでいた表情をさらに歪め、唾でも吐きそうな勢いで「死ねばいいのに」と言った。これにまた部下がぎょつとするが、それに反してリーナは面白そうにニヤリと笑った。

「よっぽど嫌いに見える」

「だから言ってるじゃん」

だから理由を聞いてんじゃん、と言い返せば、ルアールはどこか面白くなさそうに口を尖らせた。今日のルアールは本当に不機嫌らしい。

ふと、先程ヨーラと会話していた時の事を思い出す。そういえばあんな場所に突然リヨが現れるのもおかしい。もしかしてルアールは、魔物にデートを邪魔された事も併せて怒っているのではないだろうか。

「あいつ、従兄に似てんの」

八つ当たりか、とリーナが思案顔でいると、口を尖らせていたルアールが言った。

輝愛の従兄といえば、確か黒介とかいう名前のチビがいた気がする。輝愛と炎火が出逢う少し前の戦争で親を亡くし、当時は輝愛の弟達と一緒に暮らしていたはずだ。黒介には妹もいて、確か名は桃といった。

「え、クロ？似てない」

輝愛の家族データを一気に頭の中で浮上させそう言うと、ルアーは違うと頭を横に振った。はて、彼女に他の従兄弟がいるという話は聞いていないが。

「リーナは会ったこと無いよ。海と夜の名を持つ馬鹿でね、自殺したんだ」

生きていれば同じ年齢。さらりとそう告げたルアーの瞳は、苦々しげに輝いていた。悲惨な死に方だったのだそうだ。黒介や桃、弟達もそれを見て、一時は誰も食べ物が咽喉に通らなくなったという。

カイに初めて会った時。あまりにも似過ぎていて、本当に本人が生き返ったのかと思った。しかし動揺した心を抑えきれず彼に話しかけると、答えは無惨なもの……というか、からかわれただけだった。

『お前、俺に惚れたからってそういう冗談よせよな』

「……今でも腹立つ。誰があんなチャラ男に惚れるよ」

今にも馬を反転させて後ろにいるカイに体当たりでもしに行きそうなるルアーの気配を感じ取ったのか、後ろの方でカイが大袈裟に肩をびくつかせた。それに彼の部下達は疑問符を浮かべるが、ルアーを直接見ていた彼女の部下やリーナの部下達は一斉に目を反らした。直視できたものではない。

「ふうん……」

唯一それを直視できるリーナは、そんなルアーに興味を無くしたように呟いた。

カイ・クロエ・ユースラン。好きではないが、嫌いでもない。リーナにとって彼はそんな部類だった。仲間とも思っていないが、何故だかカイにはどこか他人とは思えない雰囲気がある。果たしてこれの正体は何なのか。もしかしたら本当に「海と夜の名」を持つ輝愛の従兄が蘇ったのかもしれない。

ふふふ、と一人笑うと、リーナは隣にいるルアーの頭を慣れた仕草で撫でた。特に意味もなく時々行われるそれに、ルアーもも

う慣れていた。

獣の雄叫が聞こえる。荒廃したアルビレオの街。事態は思ったとおり深刻だった。あちこち逃げ惑う人々を蹴散らすように魔物が暴れる。それを見た補給部隊はすぐに救助班を編成し、市民の救助にあたった。

「でかいね……」

余裕の微笑みを湛えながらバファロが言った。ミノルと比べるとかなり身長に差がある彼だが、こうして馬に跨ってみると上手くカモフラージュされるらしい。様になっているその様子を横目で見ながら、リーナは静かに呪文を唱えた。

「はあああああっ！」

大きな爆発音と共に獣の左目から大量の血が流れる。それを確認したリーナが浮遊の術で空中に浮かび上がったのを皮切りに、各フオース、ソードが一斉に魔物に切りかかった。

この魔物の表皮は固く、そのうえ治癒能力が高いらしい。魔物の身体に障ると人間の身体は何かしらの異常反応を起こすというのは常識なので、リーナの部下である術軍第五戦闘部隊隊長カンナが手早く魔物の身体の一部を摂取し、副隊長セーホーに状態反応の確認を指示した。その間に同戦闘部隊の第一小隊、第二小隊は陣を敷き終え、中隊長サワの指示が下ればいつでも遠距離術攻撃ができる体制となっていた。

「ラス・エラセド・アウストラリス！」

第一小隊側にいたサワが、左手を目の前に出しながら言った。それに反応して、第二小隊側にいた中隊副長ショーコウが右手を目の前に出しながら同じ言葉を繰り返す。ショーコウが言い終わると二人は揃って両手を目の前に出し、また同じタイミングで曲げた。次に先程と同じように二人が両手を前に出すと、小隊員達は一斉に赤い炎を魔物に向けて発射した。炎は魔物に向かうに連れてだんだんとその形を獅子へと変えていく。遠くからだとその様子はまるで大

鎌が襲い掛かるように見えるので、ラス・エラセド・アウストラリス（獅子の大鎌）という術名がつけられたのだ。

「獅子の大鎌だ！ケリユネイアの鹿を敷け　！」

優秀な部下を持つているのは何もリーナだけではない。このハンドレット公国軍には最初に攻撃を仕掛けたサードが率いる軍の作戦に沿って自らの作戦を決めるといふ妙なしきたりがあるが、それに最も素早く反応できると言われているのが、このルール率いる陸軍第二戦闘部隊の隊長ラカーユだった。筋肉質な巨漢の女で、そこからモーニングスターやらを振り回していそうな山賊のような格好を好んでしていた。

「南だ、ブラッドアロー用意！」

ケリユネイアの鹿というのは、術軍が獅子の大鎌を行った時の為にラカーユが作った布陣だった。獅子の大鎌が当たると敵は必ず一方向へと倒れる。大鎌は大抵大きな獲物に使われるので、そこが人の住む場所だったりすると大変な事になるのだ。大きな魔物がそのまま横に倒れてどれくらいの範囲が押し潰されるのか、素人にはわからないことだ。

「構え！」

その倒れる敵の足元を崩し被害範囲を狭める。それがケリユネイアの鹿だった。この作戦に使われるブラッドアローというのは毒になる魔物の血が先っぽに塗られている矢で、効果範囲は狭いが身体を麻痺させることができる。魔物の足元を狙えば、そこだけでも痺れさせる事ができるので。それに加え大鎌で魔物の身体は傾いている。実践で行われたのは二度程しか無いが、充分効果を発揮できる作戦だった。

「今だ、撃て　！」

作戦通り、足場を崩した魔物が倒れた。起き上がることもなく魔物を空軍の弓矢が襲う。次いで術軍の遠距離攻撃、陸軍の近距離攻撃を仕掛けられ魔物はだんだんと弱っていた。

「リーナ隊長！」

そんな中、カンナに言われ魔物の性質を調べていた術軍第五戦闘部隊副隊長セーホーがリーナを呼んだ。ひたすら魔物の周りを跳び回りながら術を連発していたリーナは、その声を聞き一旦攻撃を中止する。駆けつけると、すぐにセーホーの真意がわかった。

「何これ……」

リーナはその場に膝を着き、セーホーの手元にある術と魔物の皮膚を覗き込んだ。皮膚の周りを淡く白い光が包んでいて、セーホーの手が添えられた部分に黒い三つの斑点がある。

一目見ただけでわかる。セーホーの術に間違いが無かったのなら、これは異常なことだ。

「こんなの見たことありますか？」

「無いけど……こう出てるんだから、そうなんだろうね」

異常反応無し。セーホーが調べた結果はこうだった。

今までこんな魔物を見た事が無い。しかしリーナはハンドレット公国に来てからまだ日が浅いので、もしかしたらこういう魔物もいるのかもしれない。そう思い年配の軍人を探すが、どうやらこの中で一番の年配者はルアールの部下である中隊長のサザンのようだ。彼は今ラカールの指示の元、魔物を渡って反対側にいる。聞きに行こうにも時間が無い。

「よし、フォース殿二人に聞いてくる」

セーホーはカンナの援護に回るようにと指示すると、彼女は規律正しく敬礼をして走り去った。

リーナが飛び上がりながら魔物の元へ行くと、ちょうど近くにバファロが舞い降りた。左手に持った剣は少し血で汚れていて、どうやら彼には魔物に傷をつける事ができるようだ。リーナは彼に向かって声を張り上げた。

「バファロフォース！」

「何！」

次の言葉を発しようとする、魔物の羽根がリーナの頭上に影を落とした。力強く振り落とされたそれを決死の思いで避けると、魔

物の胴体が真下に入り着地する場所を失う。浮遊の術を唱えようにも深く息を吸い込みすぎて喉が詰まってしまった。仕方無いので自らの身体で試そうと魔物の身体に降り立とうとすると、リーナでさえ何が起こったのかわからないような一瞬のうちに、背後にはバファロ、足は地面に着いていた。

「何、やってんだよ！」

彼が助けてくれたようだ。次いで襲い掛かる魔物の炎をバファロと同じ方向に避けると、リーナは先程しようとした質問を大声で叫んだ。

「バファロフォー、異常反応を起こさない身体を持つ魔物って知ってますか！」

魔物の咆哮で語尾が掻き消されたが、リーナの言いたかった事は彼に伝わったようだ。敵に刃を向けながらも奇怪な表情でリーナを見返してくる。彼の反応を見る限り知っているとは思えない。声の届かない位置まで離れてしまったバファロを見て内心舌打ちしながら、リーナはもう一度魔物の身体との接触を試みた。

異常反応が起こった時の為、一応片手に簡単な術を用意しながら跳び上がる。その身体がまたも不自然な浮遊感に襲われ、今度こそリーナは舌打ちした。

「お前、さっきから何やってんの？」

バファロよりも運ばれ心地が良いな、なんて的外れなことを考えながらリーナはミノルのその言葉を脳内で軽く排除した。

まったく地位が高い者というのは余計なことをしてくれる。すぐ下の階級である自分達ソードをどれだけ信頼していないかの証拠だなどとブツブツ一人言を言いながら自分から離れるリーナを見ながら、ミノルはどこか苛々した様子で降りかかった火の粉を剣で払った。

「何が余計だって」

敵の攻めを避けようともせずひたすら片手の剣で受け止めているミノルを見て、リーナは対抗するように片手で術を使い魔物を跳ね

除けた。他所から見れば大分狂った光景だったのだが、当の本人達はそれぞれ別のことで頭がいっぱいだった。

「この魔物、状態異常を起こさないみたいなんです」

「どういう意味だよ」

察しろよ、とミノルへの怒りを魔物へぶつけると先程襲い掛かってきた羽根が折れてしまった。致命傷を与えてはいけないと気を付けていたリーナだったので少し後悔するが、ここまで暴れられてはそんな事はもうどうでもよくなっていたのかもしれない。

「バファロフォースに聞いても知らないって言うていたので、触って確かめようかなって」

「何で俺より先にバファロに聞くんだよ」

しかも自分から危険な目に行くななんて馬鹿じゃないのか！とミノルも何処か怒った様子で力任せに剣を振るった。その拍子に魔物の皮膚が大きく裂け、それからほんの少しの時差でリーナが使った爆発術の影響で亀裂が大きくなり破片がミノルの頭上へ落ちてきた。

「うあっ」

魔物から剣を抜いていたミノルは避けようとして体制を崩し、そのまま勢い付きも片方の手で皮膚を掴んでしまった。剣を抜ききり体制を立て直すために一度座り込んだミノルは、自分の片手にある魔物の欠片に一瞬驚く。

彼がそんな事をしている間にリーナはすっかり自分の知りたかった事が確かめられたのだと理解し、嬉々とした様子で魔物の背中に飛び乗った。

「おい、リーナ！」

まだ不安だったミノルはリーナを呼び止めるが、実際自分の片手にある物のせいで身体に異常がある訳ではない。ミノルは舌打ちすると彼女を追って魔物の背中へ飛んだ。

ミノルなどほとんど無視の状態だったリーナは既に心法の術を唱え始めていて、ミノルはリーナが呪文を唱え終わるまで彼女を守る

ように魔物の部位をひとつずつ切り落としていった。

「リーナ・フィアセサードが飛族撃退特別班各員に伝える。この魔物は異常反応を起こさない。セカンド、ファーストは遠距離攻撃を取り止め、すぐに近距離攻撃へと切り替えよ」

リーナの心法の内容に軍人達がざわめく。彼女の言葉にすぐ反応したのはラカーユだけで、魔物のことをよく知っている術軍が一番信じていない様子だった。最も信じられないのは言葉の内容であって、リーナではない。その証拠に、次に彼女が出した指示を実行に移す速さは尋常ではなかった。

「尚この魔物は物理と術同時の攻撃に弱い。よって術軍第五戦闘部隊第一中隊第一小隊は陸軍に、第二小隊は空軍に着いてサポートをしる」

陣を敷いていた術軍が一斉に散らばる。それを確認して心法の術を終えた時、リーナはやつと背後にミノルがいることに気が付いた。彼のおかげで魔物の羽根は使い物になっておらず、あちら此方から透明の水のような血が垂れ流れていた。

「……すみませんでした」

守ってくれていたのだと理解したリーナは少し間を置いてからそう言うが、ミノルは無言のまま未だむしゃくしゃした様子でリーナの長い髪の毛を引っ張っただけだった。

リーナの心法を信じギリギリまで魔物に近付いていたカイは軽々と敵の攻撃を避けながらその様子を見ていた。いつも薄く笑っている口元が今は真っ直ぐに引き締まっていて、どこか不穏な空気を漂わせている。

「いちやこらしてるようにしか見えねえよなあ……?」

部下のヤイチが隣に並んだのに気付いてカイが言った。自分に着いて来た彼は背後にサポートとしてショーコウを連れている。

問われたヤイチはと言えば複雑そうな顔をしてカイをちらりと見ただけだった。ショーコウに攻撃の合図をすると、すぐにカイの隣から飛び立ってしまう。

ヤイチを見送ったカイの後ろから次々と空軍の軍人たちが魔物の元へ飛んで行く。その中にチーカの姿を見つけると、カイはいつものように静かに口元を吊り上げた。

「はあああ！」

あちこちから戦の音が聞こえる。金属音、爆発音、風を切る音、人の声。勢いを増す軍人達の攻めに苦しみ、もがき叫び声をあげる魔物だが、なかなか倒れてはくれない。

そんな中、苛々が頂点に達したミノルがフォース、ソードを収集しセカンド、ファーストを下げた。彼の意図を察した軍人達は自らの仕事をこなすため散らばっていく。フォース、ソードは魔物を見下せる四方の場所へ、セカンド、ファーストの術を使える者達はその間に魔物の動きを止める術を発動させた。

「四つ目の合図で放射だ！」

準備の出来たリーナ、ルアル、バファロ、カイがミノルに合図をすると彼がそう叫んだ。頷いた四人は動きを止めた魔物へゆっくりと武器を構えるとミノルの合図を待つ。

「One」

五人の片腕が動き指先で皆同じ紋を作る。

彼等を見守る軍人達は一切の口をきかず、辺りは静寂に包まれていた。

「Two」

結ばれていた紋が全て解き放たれ、そこからチリチリと黄色い光が五人の腕を伝う。そして、

「Three」

静かに瞳を閉じた。

「Four」

その瞬間、瞳を閉じていた五人にも誰かがそこを通ったのがわかった。しかしそんな事を気に止めることもなく、彼等は一斉に自分の武器から黄色い光を魔物に向けて放射した。

この術は大変高度なものだった。術で扱うことのできる自然エネ

ルギーの中で最も破壊力の高いものを、更に最も高い純度を保ったまま敵へぶつける。放射の際に一度金属に通すと純度を保てる時間が延び安全性が増すのだが、フォーソヤサードでさえそうしなければ使用することを禁止されている術だった。

「散れ！」

大きな爆発音と共に魔物の断末魔が上がる。ミノルの掛け声でリーナ達に併せギリギリまで魔物を押さえつけていたセカンド、ファースト達はその場から飛び上がった。その瞬間。リーナはいつかのフラッシュバックのような感覚に襲われた。空中に浮いた自分の身体感覚が無くなる……。

本当に？

『、ありがとう』

約束を……。

『大丈夫。の。は貴方を裏切ったりしないから』
でも、

『僕も裏切らない』

……あいしてる。

離れていく小さな人影。それを見送る長い髪、その膝の上には小さな、小さな、こども。

その子供が小さく鳴いた。

身体に感覚が戻った時リーナの足は地面に着いていた。突然の明るい光にちかちかする目を何度か瞬かせると目の前には先程の攻撃によって原型を留めないほど身体がバラバラになった魔物の姿があった。背後からは歓声も聞こえる。勝ったのだ。

急いでミノルやルアールの姿を探すが彼等もまた安心したような表情で魔物だったモノを見ていて、リーナの異変には気付いていない。彼等の様子から考えるに自分がトリップしていたのは一瞬だったようだ。

安心して思わずほつと溜息を吐くと右後方の瓦礫の上に避難していたバファロが隣に降り立った。ぎくりとして彼の顔を覗き見るとバファロは少しだけ嬉しそうに微笑んだ。

「お前でもそういう顔するんだな」

何を言われているのか理解できずにボーツと彼を見ていると、バファロはリーナの肩をぼんと叩いてミノルの方へ跳んで行った。視線で彼の後を追うとミノルと目が合う。弾くように目を逸らすと不審そうにこちらを見るカイと目が合った。

「これより戦闘部隊は補給部隊の補助に入る。サードはそれぞれの軍の指揮を取れ」

アルビレオの街は壊滅状態だった。リーナは部下達に補給部隊と連絡を取り非難テントの位置を確認、班を分けてテントに迎えそこにいる補給部隊の指示に従うように、と手短かに伝えると、自分は街を歩き生き残りを探していた。街の住人はほとんどが逃げ遅れていて、先程から何人の死体を乗り越えて来たかわからない。

「……」

リーナは人間の体温を感じ取る術を使用していたのだが、それが先程やつと反応を示した。術を信じてここまで歩いて来たのだが、彼女の目の前に広がっているのは崩れた一軒屋だけだった。見た目ほど中は崩れていないようで、術で捉えた生き残りは案外すぐに見付かった。

「あ、あ……あぁっ……」

リビングだったのだらう。ソファの骨組みだけ残ったような物に寄り掛かって片足から血を流している女性を見つけた。同じくらいの年齢だろうか……怯えて意味の無い言葉が口から零れるように出ているが、意志の強そうな瞳をしていた。

何処かで見えたことがある。瞬間的にリーナはそう思った。後ずさる彼女に少しずつ近付いてみると大事そうに何かを抱えているのが見える。バドミンソンのラケット……そうだ、彼女は。

「私はハンドレット公国術軍所属のサード、リーナ・フィアセ。貴女を助けに来ました」

燃えずに残っているトロフィー。彼女は日本国出身の天才バドミントン選手ミドリ・トキワだ。

「サー、ド……」

肩膝を着き礼儀正しく階級証を見せたリーナに少し安心したのか、ミドリは身体の震えを抑えそう呟いた。にこりと微笑んで立ち上がったリーナは彼女に手を差し伸べる。ミドリはそれにゆっくりと自分の手を重ね合わせた。

「うわっ」

リーナが多少強引にミドリを立ち上がらせる。右足の傷はもう塞がっているようで、ミドリは驚いただけで痛みを訴えなかった。それを確認し彼女を引っ張って家を出ようと歩き出す。すると、少し歩いたところで彼女が抵抗した。

「まだ、家族が」

何？と振り返り首を傾げたリーナにミドリが恐る恐るそう言った。ミドリを見つける前に二人の遺体を見つけたので、そのことを言っているのだらう。両親らしき人ならもう、とリーナが首を振ってそう言つと、ミドリは両目に涙を溜めながらまた口を開いた。

「姉貴が……！」

ついにしゃくりあげて泣き出してしまったミドリを見つめ、リーナは思考のみで術を使う。生きている人間はこの家の中にはいない。しかしこの女性は、それを自分の目で確かめるまで認めはしないだらう。

思い出す。認めたくなかった、大切な人たちの死。だけど、認めざるを得なかった。まだ守りたいものがあつたから。

「お姉さんは、どこに」

“事態は緊急を要する”のに一体、自分はこんなところで何をやっているのだらう。死人を探すなんて馬鹿な話はない。それが例え親族であるとしても墓を掘り返すなど野蛮なことだと思つると同じ

で、死者の亡霊を求めて彷徨うのと同じような愚かさ。それでもミドリの気持ちを助けたくなくなったのは一種の意地なのかもしれない。

「か、階段の、おくっ」

乗り気の無かったリーナが何を思ったのか姉を助けてくれるのだと気付いて、ミドリはつつかえながらも急いでそう言った。

階段の奥というのはリビングを出て左の瓦礫で塞がった部分を通らなければならない場所だろう。リーナは特に問題無いだろうと思いい瓦礫の一部を術で吹き飛ばした。あっという間の出来事にミドリが驚くが、人一人通れるくらいの穴に下半身を突っ込んだリーナに手を差し伸べられ、その手を取った。

瓦礫は予想に反してあまり幅を取っていなくて、穴の向うにはすぐに足を着けられた。穴を通り抜けたミドリが擦り剥けたデニム生地のパンツを軽くはたいて振り向くと、姉の部屋の扉のあった部分に立ち尽くすリーナがいた。

「あっねぎ！」

姉の部屋は半分ほど瓦礫で埋まっていて、潰れた部分はかろうじて赤いベッドが見える程度だった。リーナを押し退け駆け付けたミドリが見た、あかいベッド。

その悲惨な状況にリーナは首を横に振る。折れ曲がった腕であったような物は、リーナのように死線を何度も潜り抜けて来た者でしかそれが人間だったとは理解らないほど異様だ。実際ミドリに見えるのは瓦礫とベッドだけで姉だったものを認識できてはいなかった。

「、いない」

ミドリはそう呟き部屋の中に一歩踏み出す。破れた靴下を履いた片足が又チャアと粘ついた液体を吸い取った。見る見るうちに赤く染まっていく白いはずの靴下。そう、姉のベッドも白かった。

「な、い」

立ち尽くすミドリに背後から近付いたリーナは彼女を術で眠らせた。

腕の中に崩れ落ちた同じ年頃の女性。程よく発達した筋肉と意志の強い顔つき、そして沙藍よりも淡く光るアイスグリーンの髪の毛。彼女の両親は、この白緑色にちなんで　　緑　　という名前を付けたのだらうか。

そのまま彼女を連れて近くにある非難テントに走った。入った途端そこにいた軍人達は皆リーナに敬礼したのだが、ミドリの知り合いらしき二人の女性が慌てた様子で近付いてきた。各々が彼女の名を呼びリーナに生死を問うてくる。リーナはしつと片手の人差し指を口元に当てるとミドリを空いている簡易ベッドに寝かせた。生きているのだと理解した二人は静まり、ミドリを心配そうな顔付きで見つめている。

「あああっ！」

その時、今寝かせたばかりのミドリが叫び声をあげながら飛び起きた。彼女の顔を覗き込んでいた二人は驚いたようにさつと身を引く。ミドリはひとつ涙を流したかと思うと次の瞬間黙り込んだ。混乱している様子の彼女に近付くと、ミドリの視線はひとつずつ自分の方へ上がってくる。

「ファイアセ、サード」

覚えていたらしいリーナの名を呼ぶミドリは、やけに怯えた表情をしている。リーナが大丈夫？と聞くと今度はキツと彼女を睨み付けた。どんな暴言が跳んでくるやら、ここまで混乱した人間が何を言うかリーナには大体予想が付いたが、ミドリの口から予想通りの言葉が出て来ると予想していたとはいえ顔をしかめた。

「見捨てたのかよ！」

テント内にミドリの声が響く。鬼のサード殿に暴言を撒き散らすミドリに軍人達も顔をしかめるが、運ばれて来た民間人はリーナとミドリを凝視しただけだった。彼等にしてみれば今は他人の事など気にかけていられない状況で、しかし”見捨てた”という言葉は深く心に突き刺さるものだった。多かれ少なかれ自分達も見捨て、見捨てられた近しい人を持つていたからだ。

「死んでいた」

「そんなこと無いだろ！」

まだ治療もしていない負傷した右手を強くベッドに叩きつける。

近くにいた年配の男性が「うるさいぞ」と一言静かな声を出したがミドリはやめなかった。男性には目もくれずひたすらリーナを睨みつける。側にいる二人の友人にも気付いていないようだった。

「そうやって……見捨てんの、あんたらハンドレットは、やっぱり！」

「うるさいぞ！」

先程と同じ男性の怒鳴り声と、ミドリの友人片方が彼女の名を呼んだのと、リーナがミドリの頬に手を添えたのはほぼ同時だった。

背を向けていた格好から振り返った男性も友人もリーナがミドリを殴るのだと思い驚いた顔をする。ミドリはといえば彼女も同じように思ったのか強く目を瞑っていた。

「私は誰も見捨てない。お姉さんは亡くなっていた。だから、私はミドリを見捨てたくなかった」

私はどちらの人間でもあるから。そう前置きをした上でリーナは言った。

殴りもしない、叱るでもない。ただのエゴでしかないはずのその言葉は、しかし今のミドリにはしっかりと届いた。詰まるところ姉が死んだということと彼女に認めさせるにはそれが充分な言葉だったのだ。

「う、うううっ……あああつ」

うわああああん！ミドリは泣いた。出来るだけ姉の魂の届くように大きな声で泣いた。男性はもう怒鳴らなかつた。

何分かして泣き止めた時やっとミドリは二人の友人が自分を抱きしめて共に泣いていた事を理解した。それに一瞬顔を赤くするが、二人は自分が泣き止んでもまだ泣き止まないものだから、それを止まらせるのに必死になってしまった。

「アスカ、…カエデ」

やっと泣き止んだ二人を見てミドリは噛み締めるように言った。既にリーナは自分より先に此処へ来ていたルアールの元にいた。アスカという名のミドリの二人の友人の片方はルアールが此処に連れて来たという。ルアールが確認したところアスカの母親はシグムントへ行っていたらしく連絡を取って無事を確認した。父親の方は仕事へ出ていたのでわからないというが、母親が連絡を取るとのことだ。弟がいるらしいがそれも無事で、同じテント内で治療を受けているようだ。

もう片方は……とリーナが呟くと、側にいた二人の軍人が近付いてきた。

「じゃあ、貴方達が？」

軍人は空軍第一戦闘部隊第一中隊所属第一小隊員だと二人は言った。丁寧にも自分達の名はナオス・トウレイスとマゼラン・クエーサーだとまで言ったので、人の名前を覚えるのが苦手なルアールは所属部隊から名前まで長つたらしい台詞をブツブツと繰り返していた。

「家族はどうしたの？」

「それが……」

二人が彼女　カエデを此処まで連れて来たというので聞いたのだが、二人は言いにくそうに口を結んでしまった。煮え切らない二人にリーナが固い表情をすると、マゼランと名乗った女性の軍人が意を決したように言った。

「両親共に、死亡です」

小声で、しかしリーナにはきちんと届くように。少し低いマゼランの声は確かにリーナに届いた。ルアールも聞こえていたらしく二人はしばし暗い顔をする。死亡　という言葉は、戦争でもないこの状況では悲痛すぎた。

だが、　しかし、と続けたナオスにリーナは少しの希望を抱く。「妹弟がいるようです。双子の女の子と男の子で、保育園に行っていて行方が分からないというのですが……」

それを聞いた瞬間リーナの足は動き出していた。背後で、どこへ行くのかと聞いたルアールに短く一言。

「その辺探してくる」

一番近い非難テントは何処か。その辺と言っても街中はもうあの軍人達が捜しただろうから、あとは別の非難テントに誰かが連れ帰っているかだ。それでもなければもう望みは薄いが…。

そんな事を考えながら歩いていると、いつの間にかリーナはアルビレオの中で最も被害が甚大な地域へと来ていた。屍の量が半端無い。広場だったのか噴水のようなものから水が吹き出していた。

その中で術を使わずとも生存を確認できる人間がいるのをリーナは見逃さなかった。

「……何やってんの」

数刻前に何人かが自分に振りかけたのと同じ言葉を倒れている彼にかける。瓦礫と化した噴水の縁のようなものに寄り掛かって左腕から血を流していた。不審だ。近寄ってみるがサードともあろうものが起き上がれないほど苦しい傷でもあるまい。

「はは……」

彼　　カイは眉を顰めながら小さく笑った。その声があまりにも掠れていたものだからリーナは思わずしゃがみこんで腕の傷をじっくりと見てしまった。ざっくりと割れているその傷は何か刺さったようで、その予想は当たりカイは右手に血のついたガラスの破片を持っていた。

その破片を見てリーナは悟った。腕が傷付きたとえ神経が麻痺したとしてもこの男は自力で帰って来るだろう。それは術で助けを呼ばなかったプライドの高さからも見て取れる。では何故戻ってこなかったのか。その原因がこのガラスだろう。

「融合爆発」

そのガラスからは先程倒した魔物の術の気配が見えた。そしてこのガラスは、術や魔法を通さない特殊な加工をしたガラスだ。中に

魔力を籠めた針金を通してあって、その力でガラスは術を通さないように変化する。しかしこの針金に直接術の力が流れ込むと　力イの二の舞。つまり、爆発するのだ。魔物にあれだけ好き勝手に術を使われては起こって当然の出来事なのだが、対処が遅れたのは上司のせいにもしておこう。

ともあれ、融合爆発を起こした物質やそのせいで傷付いた人間の皮膚は、時に凶器となりうる。特に怪我人が大勢いる場所にこの状態のカイが帰ったとしたら、他の患者の傷に悪影響を及ぼしただろう。そういう物なのだ。

「馬鹿だね」

「サードのくせに？」

リーナの毒舌に合の手を入れるカイは、どこか楽しそうだった。彼の言葉にニヤリと笑い頷くと、まいったとも言おうように右肩をすくめる。やはり左肩は麻痺してしまったのか指先を軽く動かしただけだった。

そうこうしているうちに術で応急処置を終えたリーナは、彼の軍服の一部を無理矢理切り取った。包帯の代わりにと傷口に巻いていくが、短くなった袖にカイはしばらく口を尖らせていた。そうして治療を終えたリーナは彼の傷口をぺしりと叩き立ち上がる。

「だ！」

文句を言うようにリーナを見上げるカイは既に元気そのものだった。右手に体重をかけてすくと立ち上がる。悔しいほどの身長差だがそれを皮肉る時間も惜しみ、リーナはカイにこの近辺の非難テントの在処を聞いた。

「ここから三百メートル地点。バファロがいるよ」

南の方角を差してカイが言う。仮にも上司を呼び捨てにすることに少しも抵抗が無いらしい。リーナと同じくハンドレット公国に忠誠心が無い証だが、ああ、そうか。彼もそうなのか。

「ありがとう」

一人何かに納得し彼から離れる。一緒に非難テントに行こうなん

て言わなかったのは自分の治療の完成度を誇っていたからでもなく、彼が傷のわりに元気だったからでもなく。これ以上共に居る意味は無いと互いに視線で言い合っていたからである。

彼と別れ走った。近づくにつれて姿を現すテントは先程自分がいた物より少し大きい。物理的な物を術で支えると増幅するというのがバファロがやったのだらうか。流石フォースといったところだ。しかし見えてくるテントに比例して聞こえてくる子供の泣き声のようなものに、リーナは首をひねった。

「わかった、わかったから……」

少し乱れた息を整えながらテントの入口をくぐると、そんな声が聞こえてきた。目の前の光景に呆然とする。泣き声は小さな女の子で、それをあやしているのはあのフォース殿バファロだ。ひしとバファロに張り付いて離れない女の子は、どんなに彼にあやされても泣き止む気配がない。

「ほら、よしよし」

「うわあぁん！」

頭を撫でて泣き声を大きくするだけ、軽く背を叩いてみても同様だった。胸に張り付いていただけの子供をひよいと抱き上げると、また泣き声を大きくしながらバファロの首にしがみついた。嫌われているわけではないらしい。

しかしこれは見物だ。あのハンドレット公国軍最強と謳われるフォースが子供をあやしていて、あまつさえ泣き止ませることすらできないなんて。もつとも、軍最強と子供をあやすのでは勝手が違うというのはリーナにも解っていたが。

リーナに気付いた何人かの軍人に敬礼を返しながらバファロの元に進んで行くと、女の子が泣きながら何かを言おうとしているのがわかった。それは誰かの名前のようで「お姉ちゃん」とか「ゆうちゃん」とかそんな言葉だった。

「かしてください」

泣き声にかき消されないようになるべくバファロに近付いてそう

言うと、彼はやつとリーナの存在に気付いたようだった。自分がやる、とリーナが手を差し伸べると、待つてましたとでも言うようにさっさと子供をリーナに渡す。

更に大きな子供の泣き声がテント内に木霊した。

「で、お姉ちゃんの名前は何て言うの？」

顔に引っかけ傷と、ぐしゃぐしゃになった髪の毛。あまりにも無惨なフォースとサードの姿に周りの軍人は笑いをこらえるのに必死だった。

あれから何とか時間をかけてこの子を泣き止ませたのだが、実際のところ最終的に泣き止ませることが出来たのは保育士だと名乗り出た女性のおかげだった。こんな小さな一人の子供に魔物と戦った時よりも余裕を無くされるなんてどんな大人だ。と言っても彼等はまだ成人したばかりだったのだが。

「カエデ」

先程のリーナの質問に小さな声で答える。まだ不審そうに二人を見上げているが、側に腕を治療している先程の保育士がいるので泣き出すような事は無かった。つくづく自分達の無力さに呆れてしま

う。

しかし”カエデ”という名を聞いたことにリーナはほっとする。

この子を探して此処まで来たのだから。

「弟君はどこにいるの？」

「ゆうちゃん、いなくなっちゃった」

また死亡だろうか。眉を顰めるが、落ち込む前にこの子を何とかしなければ。バファロに了承を得、近くにいた兵に先程自分がいたテントの位置を教えた。姉であるカエデの元にこの子を連れて帰るように、と。

すると、カエデの妹が抱きついて離れない保育士　イルム氏がそれを止めた。

「私たちが責任を持ってこの子達を親御さんの下へ送り届けます、だから……」

「大丈夫です」

信じてください。

そう会話を切り落とすとリーナはイムール氏に近付いた。多少強引かと思われたが今この状況で彼女の心中を察している暇はない。保育士として自分が勤める園に通う子供を守りたいと思うのはわかるが、とにかく時間が無かったのだ。

「ゆうちゃん、というのは……」

そう聞いた途端、イムール氏は表情を変えた。肩に手を置き軽くさするが、彼女はリーナから視線を逸らすように俯いてしまった。しかし何かを伝えようとしているのは明らかだ。証拠にイムール氏は先程から胸を大きく上下させている。

「わからないんです」

しばらくして、搾り出すようにイムール氏が言った。

先を聞かねばならない。リーナは近くにあつた椅子を引き寄せると、イムール氏の隣に座った。

「襲われる前に突然、園を飛び出して行ってしまって。追いかけてよとしたら園が燃えて……」

そして行方不明、という訳だ。この大惨事の中、会話すらまともにできない子供がたった一人で生き残っているとは考えにくい。それでも。

助けないと。

リーナの頭の中にはそれしか無かった。

「近くにテントは」

立ち上がり、少し前から隣にいたバファロに聞く。どこか疲れた様子の彼はよほど子供が苦手と見える。ひとつ溜息を吐いてから彼は答えた。

「北にある駅にミノル、あつちの病院にお前の所の補給部隊のセカンドがいる」

バファロが確認出来たのはそれだけだという旨を伝えると、リーナは礼を言つて即座にその場を後にしようとした。しかし彼はそれ

を引き止めた。

「何が」

突然「まだいるぞ」などと言われてしまっただけは、こう答えるしかない。奇怪な顔をして尋ねるリーナに、バファロは肩を竦めながら言った。

「魔物」

リーナは時々、思うのだが。バファロという人物はどうもつかめない。普段から口数が少ない訳でも暗い性格でも無いのに、こういう時はどうも落ち着いていて口数も極端に少ない。確かにリーナも真剣な時は喋らなくなるが、どうもバファロは意図してそれをやっている気がするのだ。

からかわれている。そう言っても過言では無いのではないかとはい？」

気付いてしまうとどうもとっつきにくい。同年齢のくせに、とか身長低いくせに、とか訳のわからない責め苦が頭の中に浮かんで消えていく。無意識に口調が強くなったのもそのせいだろう。その上それに気付いたバファロが口角を上げたものだから、リーナはパニックそうになってしまった。

バファロとしてもやはりわざとリーナを挑発するようにしているので、作戦成功と言えばそうだった。しばらく顔を真っ赤にしているリーナを表情でからかっていたが、それもすぐ真剣な表情に戻すと、こう言った。

「魔物の子供が洞窟にいる」

バファロによれば、ここにテントを張る前、近くの洞窟で魔物と遭遇したという民間人を保護したのだそう。その民間人というのは医者で、異常だと思ひ魔物の子供に近付いたところ腕を噛み付かれたらしい。

「毒は！」

魔物に噛み付かれて無事な者など聞いたことが無い。慌ててリーナがそう言つと、バファロはまたも肩を竦めただけだった。やはり、

無事だということだ。

ほっと胸を撫で下ろすが、先程のバファロの言葉に違和感が残る。"異常"と言ったが、何の事だろうか。バファロが話しを続けようとしたので、リーナはそのまま黙った。

「それで、その異常なんだが。どうやら子供は、強力な自白剤を盛られたらしい」

この騒ぎより前に。

自白剤は、そこら辺の草を採って作る簡単な薬草とは違う。様々な動植物の臓器や繊維を絶妙なバランスで合わせ、それを強力且つ絶対的な物にする為には術まで使う。自然の産物では無いのだ。つまり自分達が殺した魔物は、自らの子に人間が毒を与えた事に対して怒っていたという事だ。何て愚かな。

「ありがとう」

バファロに対して一言礼を言うと、リーナはそのテントを去った。

洞窟に着いたリーナは、また異常な物を見た。弱りきった魔物の子供が、小さな人間の子供を守るように身体を丸めていたのだ。生きていくのかわからないが、確かに魔物の分厚い尻尾に包まれた物は人間のように見えた。

洞窟の中に一歩踏み出す。リーナはしまったと思った。

幻術…！

魔物は飛族だと思って油断していた。幻術を使える魔物はいないが鬼ならいる。幻鬼族、この子供はそれと飛族のハーフだったのだ。幻術とはその名の通り幻を見せる術だ。人間でも使える者はいる。事実リーナも使える。が、幻鬼族が使うそれは術が違う。目に見える幻だけでは無い、目に見えている幻のこの場所に本当に自分もいるような錯覚に陥るのだ。

いくら力の強い者でも、それを突破するのは難しいと言われてい

る。

リーナの後ろから、誰かが声をかけた。場所は変わっていない。しかしリーナは有り得ないその声に驚愕し一気に身体を反転させた。「もう、ほら終わったよ」

背の低い少女とも言える女性が、リーナに向かって手を伸ばす。彼女の前には死んだ魔物の姿があった。

そうか、倒したんだ。

一人納得したリーナは、彼女の手を取った。すると、彼女の後ろにもう一人女性が立っているのが見える。この釣り目の彼女も、リーナと右手を繋いだ女性と同じくらいの背丈だった。

「らしくないね、 が幻術にはまるなんて」

「私が？」

そう呟くと、釣り目の女性の後ろに背の高い男性が現れた。ここまで来てやっとリーナは異変に気付く。これだけ女性と身長差があつて、何故今まで気付かなかつたのだろうか。

「何だよ、はまったことすら気付いてなかったのかよ」

茶化すように言う彼の顔が、一瞬ぐにやりと曲がった。

……！

これは幻だ。リーナがそう気付いた時、回りの人間や情景がぐるぐると回り出した。やはり魔物は弱っていたのだ。それでも弱りきつた幻にリーナが捉えられてしまったのは、おそらくずっと探していた幸せな一時がそこにあつたからだろう。

いつまでも止まることを知らず周り続ける風景。先程見た物を振り切るように頭を左右に振ると、リーナは今の状況を整理することに専念した。

洞窟に入る前に見た魔物の身体の疲労から考えてみても、この幻術を見ても。魔物は相当に弱っている。無理に幻術を使ったのだから、このままではこの術も暴走し、魔物に更なるダメージを与えてしまうだろう。

そんな事を考えた矢先、回っていた風景が止まり暴風が吹き始めた。それに押し流されるように消えていく風景。辺りは真つ暗にな

つたが、それを確認した一瞬後には全てが真っ白になっていた。白すぎて何も見えない。そこに、三つの影が見えた。

「本当だよ、ありがとう」

ひとつ、人間の子供のような影が言った途端、三つの影はそれぞれきちんと顔も姿も見えるようになった。先程言葉を発したのはやはり青年で、どこか見覚えのあるような顔だった。

「約束を……」

「大丈夫だって。俺達の父さんは貴方を裏切ったりしないから」

心配そうな顔つきで立っている青年を見上げる女性。髪が長く、膝の上に子供が頭を乗せていた。それで立ち上がれないでいたのだ。「この、貴方達の身体の一部を使えば、父さんが作り出した薬はもっと強くなる。犯罪者はこの自白剤で嘘なんか吐けなくなるんだ」貴方達が知恵を持つという事も他言しない。薬も犯罪者にしか使わない。身体の一部をもらった事を俺達は一生感謝するよ。

そう笑顔で言う青年の顔をまじまじと見ていたリーナは、ある事に気が付いた。この青年は、先程会った人間ではないか。そう、この魔物の母親を殺す瞬間に、術に巻き込まれる危険も顧みずそこを通り過ぎた”誰か”では無いだろうか。リーナには何故だかそう思えた。

そしてこの女性と、膝の上の子供。これはおそらく魔物たちだ。

自分達が、殺した。

「でも、」

「僕も裏切らない。愛してる」

切ない声で女性も「愛してる」と伝えた。

場所が変わった。魔物の子供が人目に着かない程度に洞窟の外に出て来ていた。そこに一人の人間が近付く。あの青年だ。

青年は子供の背中を一撫ですると、ズボンのポケットから注射器を取り出して子供の耳の裏に当てた。よほど痛かったのだろう。子供は泣き叫び青年を突き飛ばそうと尻尾を振り乱した。痛みは増すように、耐えなければと一瞬硬直する。その隙を狙って青年は駆け

出した。

異変を察知したらしい母親が洞窟から出て来た。うずくまる子供を見た母親は 暴走した。一目見てわかったのだ、何が起こったのか。

『何故、どうして、どうして!』

母親の叫び声が聞こえる。あの女性と同じ声だった。

また風景がぐらりと歪んだ。これ以上この子供に幻術を使わせてはならない。リーナは自白剤の効果を無くす術を用意すると、手が塞がったので言葉の印で幻を解いた。

目の前に魔物が現れる。まだ息はあるようで、キュウ、と一度だけ小さく鳴いた。

「よしよし」

近付いて頭を撫でる。その動作のうちに薬の効果を無くすと、リーナは子供を眠らせようと術を使った。その時、それを拒むようにもう一度子供が暴走を起こした。

やばい。そう思ったが、リーナを取り込んだ幻に少年の姿をした魔物の子供が現れ、無理矢理幻から抜け出そうとしていた右手を止めた。それが魔物の子供だと何故わかったのか、その時リーナはそんな疑問すら思いつきもしなかった。

『貴女は泣いている』

先程と違って、直接ではなく木霊するように声が聞こえる。目の前の少年の口の動きと同じように声が聞こえてくるので、その少年が喋っているのだという事は理解できた。

「あなたにまで解かってしまうのね」

目を見据え呟く。すると少年は静かに目を閉じた。そしてまた口を開く。

『理解しながら救われようとしなのは何故』

救い。

それは何を指すのだろう。リーナの中でそれは、考えてはいけないう事柄の中に入っていた。自分に救いがあったてはいけない。救わな

ければいけないのは彼等であつて、彼等が救われれば自分が救われる事は無い。

だからリーナにはこんな答えしか出せなかった。

「それが出来ないからよ」

『やろつとしないだけ』

小年はいつの間にか、また目を開いていた。そして気付いたのだが、彼の瞳は魔物の子供と違って深い藍色だったのだ。魔物の子供は輝愛と同じ煌くアメジストの瞳を持っていた。

「それを出来ないというの」

『それは、逃げ？』

ああ言えばこう言う、というのはこの事か。しかしリーナには、それよりも彼の瞳の色が気になった。深い藍色はだんだんと濃くなつていき、漆黒になった。それに今度は茶系が混じり、奈美と同じ琥珀色の瞳になる。

「そう、これは逃げ。進みながら逃げてるの」

彼の瞳の色を気にしながらも、口からはどんどん彼と会話をする為の言葉が零れ出ていた。

瞳の色には赤が混じり、自分と同じ真紅色の瞳になる。

『何が怖いの』

少年がそう言った時、真紅の瞳は光を浴びたように輝き、ただの赤になった。そしてそれは何かを抜き取られるように急速に色を変えて行き最後には、深い輝きを持つ燈色になって変化を止めた。

「自分の愚かさを認めることが」

言った言葉は震えていた。その瞳があまりにも綺麗で、あまりにも懐かしかったから。

『あなたは愚かじゃない』

少年は相変わらず指先一本動かさずリーナと会話を続けている。唯一の動作である”話”に使う口元は滑らかで美しく、その動きは些か女性らしさを感じさせる。それに気付いた時、同時に彼の髪の色や肌の色も変化を始めた事に気が付いた。

「私は愚かよ」

『貴女はただの人間だ。特別な何かなんてない。そんなに背負わなくても良いんだよ。それが人間だって認めて良いんだよ』

リーナは不思議な感覚に陥っていた。何故だろうか。彼の言葉の響きは彼女を思い出させるのだ。かつて失った彼女を。

「だめよ。それを認めるのは後ろへ逃げることを意味する。わざわざ死に捕まりに行くことになる」

『ならないさ』

少年の瞳が動いた。リーナの目を真つ直ぐ貫いていた視線は、今度はリーナの胸元に注がれている。そして気付いた。自分は今、昔の格好をしている。胸元にある大きな紅い水晶、彼はそれを見ているのだ。

「何故」

そう言い、自分の胸元を見ていた瞳を彼に戻す。

リーナは更に驚愕した。そこには、肌の色を白へ、髪の色を琥珀へ変えた少年がいた。しかし、ふっくらとした唇や丸いラインの顎はどこから見ても女性だ。そして、その瞳の色。

これじゃ、まるで。

『僕がいるから』

「貴方は眠るのよ、永遠に。そして壊れたこの町を守る神になるの」
思いついた言葉を飲み込むように、早口にそう言った。口にすれば目から水が出てくるかもしれないから。涙なんて綺麗なものじゃない、零れるなんて量じゃない、ただの水が。そんなのは嫌だった。『神にならなろう、みんなは僕を神と呼ぶ。でも貴女は、違う』

「何」

これ以上聞きたくなかった。それでも否定の言葉は出てこなかった。聞きたくない反面、聞きたいと思う気持ちもあったからだ。失ったという事を理解してから、一度しか呼んでいない彼女の名前を、今呼べるかもしれないから。

『僕の名前を呼んで。そうすれば貴女を助けよう。これは血の伝承』

「あなたの名は」

『僕の名は、迦楼羅』

。

リーナはその名を心の中でしか呼ばなかった。

F i n n .

第六章 月の神の名

『！俺は頼まれたんだ、晶良と麻乃と』

『その名を簡単に口に』

「なああ！！」

「リーナ！」

強制的に目覚めさせられたような感覚。瞼を開けたリーナの視界に入ってきたのは太陽ではなく、それを遮るようにして芝生に寝転んだ彼女に覆いかぶさるミノルの姿だった。

無理な体勢で上半身を起こしていたリーナの肩をミノルは優しい手つきで押した。

「何があつた、夢の中で」

ミノルの両手がリーナのそれを芝生に縫い付ける。リーナはミノルの瞳を見つめながら次第に心を落ち着かせていった。先程まで見ている夢、その中で会話した男の声が脳裏に木霊する。もし彼女がそこで目を瞑つたり逸らしたりすれば、きっともう一度、彼が言った二人の名を脳裏に浮上させた事だろう。リーナは今、自分にとって最善の行いをしたのだ。

「ただの悪夢です」

彼にとつて、間違つてはいない。嘘でもない。

アルビレオの魔物騒動から一ヶ月が経っていた。原因を知つたりリーナはミノルにその事を報告したが、どこから手が回されたのか原因究明は為されないまま二週間前、捜査は打ち切られた。幻術の中で見た人影をつきとめられれば良いのだが、今も尚リーナの中では「見た事があるような」という程度でしか思い出せなかった。

「過去か、それとも予知夢か。死ぬ夢でも見たか」

アルビレオからリーナ達が帰った後、周りの人々の様子が少しづつ変わっているのは誰しもが気付いていた。例えばバファ口は以前

よりリーナと親しくなったようだし、ミノルはあからさまにリーナを見つめている時間が多くなった。小人数しか気付いていない事といえば、リヨが彼女の部下に聞き込みをしているという噂だ。

バファロとミノルの異変、そしてそれに気付いたリーナ、ルアー、ユーマの異変は、少なからず周りに影響していた。

「まさか」

二人がいるのは一ヶ月ほど前に出会ったあの裏庭だった。同じ風景、雨は降っていない。

リーナは先程まで夢術というものをかけられて夢の中にいたのだが、その術をかけた人物を彼女はわかっていて。事実、会話をして争いになった相手なのだから。

ミノル、いやハンドレット公国の人民は日本国にのみ伝わる夢術の存在を知らない。ミノルがリーナを目覚めさせる為に行ったのは夢術の解除ではなく、ただ彼女を眠りから覚ますための簡単な呪文だった。その程度の事で解けてしまう夢術。けれどそれは攻撃や幻術よりも遥かに難しく、日本の血が必要だとも言われる程に長い年月をかけて作り出された術だ。

その中で起こった事はただの夢ではない。彼との会話は確かに事実だった。

だから、ただの悪夢と答えたこと。間違っているし嘘になるという事は、リーナにしか理解らないはずだった。

「ゲームをしようか」

無表情にそう言ったミノルは先程の会話と何の関係も無い話をしているように見えるが、二人にはわかっていて。リーナは静かに耳を傾けた。ミノルの言葉を聞き漏らしてはいけない。彼はリーナが今ついた嘘を知っているのだ。

「お前が一度嘘を吐くたび、俺はお前にキスをする」

屈辱だろう、憎き敵に何度も口付けられなければならないなんて。

次の瞬間、リーナの唇はミノルに塞がれていた。抵抗はない。数秒経って離れたそのキスは、あの時より浅いものだった。

「貴方と、不純な関係になれと？」

リーナは冷静だった。二度あることは三度ある、とはよく言うがこれは二度目だ。落ち着きを払ってはいるが彼女の心臓は有り得ないほどに早く打っていた。起こった事実、羞恥、そして胸に湧き上がったこの言葉を、彼に言うかどうか。

「命令じゃない。お前が決める」

事実上命令だったが、生憎ここにはこの二人しかいない。彼等を見張る陰が二つあったのだが、二人が知る由もなかった。それ程までに動揺していたのだ、二人とも。

リーナは不適に笑った。迷いはなかった。もう喉まで上がってきたあの言葉、名前を。リーナは言ってしまった。

「おあいにく様。貴方とそんな関係になるくらいなら死んだ方がましよ、アルテミス」

ミノルの瞳が、驚愕に見開かれた。

カロキ・デオは首都シグムントの中央広場に位置するカフェだ。マリア・ナイトはアルバイトだが店主は彼女をひどく気に入っていた。マリアは静かで読書家のようにいつもノートを一冊持っている。実際のところ麻衣は読書家というよりは美術家でツールペイントが好きだったが、特にそのイメージ違いを修正する気は無かった。

カラン、カラン。扉が開き客が入店した。基本的にマリアは客から声がかかるまで動かない。ひたすら持っているノートを読んだり何か書き込んだりしているのだ。それでも仕事をしない訳ではないし中央広場という人がたくさん来る場所にあるにも関わらず、このカフェは客足が悪いので店主もマリアを責める事は無かった。

「おや、これはルアル様ではありませんか」

しかし今日の客を見たマリアの反応は違った。その人が入ってきた途端、小走りで近付いたのだ。店主はめずらしい人の来店にマリアが驚いているのだろうと思いい、フォローのつもりでそう言った。

「こんにちは。ここに来るのは二度目ね」

「ええ、以前いらつしやつたのはだいたいぶ前でしたね」

店主はマリアにチラツと目配せした。挨拶をしる、という意味だったのだが、マリアはその気が無いのか一向に動こうとしない。店主が名を呼ぶとルアールが制した。

「申し訳ありませんね、人見知りか激しい子で」

「いえ、友人なんです」

ルアールのその一言に店主は仰天した。こんな高位の人物と自分が気分雇った子が知り合いだったなんて。店主がいそいそとカウンターの中に入ると、マリアがルアールを席に案内した。

「連れて来てほしい人がいるの」

ルアールはマリアに一枚の紙を渡した。彼女は一ヶ月前からリーナが迦楼羅の夢の中で見た人物を探していた。と言ってもリーナの記憶は当てにならないので、その場にいた人の気配を一人ずつ調べていたのだが、何しろあの作戦には少しばかり大人数が参加した。

戦争となれば混乱する程多くの人間が動くが、今回はそれ程でもない。何か全員分は調べる事が出来た。しかし一ヶ月の時間を有してしまったのは人数のせいなのだ、やはり。

その間に起こったりヨの異変にルアールは敏感に気付けないでいた。

「誰？」

「麻衣」

「だったらアジトで」と言いかけたマリアはすぐに何か気付いたように口を噤んだ。ルアールが殺し屋内に裏切り者がいる可能性を懸念している事に気付いたのだ。

「じゃあ、またね」

ルアールはマリアに一枚の紙を渡すと、そう言ってウィンクした。マリアが頷くと店主に一礼して扉の向こうに消える。マリアはいつもの定位置に戻ると渡された紙の内容を読み始めた。

『技術開発局シグムント西支部長ロジャース・テクニカル長男フライト』

書かれた内容に多少の疑問を持ちつつ、いつものようにノートに中身を移すと渡された紙をライターで燃やした。

店内に僅かな煙の臭いが漂う。店主はマリアの一連の動作をじっと見つめていたが次第に煙の動きに引き込まれていった。ぼーっとしていた所でマリアと目が合うとゆっくりと反らした。

マリアはしばらく店主を見つめてからノートに視線を戻した。連れて来てほしい、というのは誘拐しろという意味では無い。しかし麻依がルアールの元にこのフライトという青年を連れて行くという事は、ヨーラの時と同じという事だ。

真実を吐かせる代わりに真実を伝える。

フライトとは何者なのだろうか。また面倒臭い事にならなければ良いが、とマリアは一人溜息を吐いた。

カロキ・デオを出たルアールは一人、軍に向かって歩いていく。

この一ヶ月休み無しで術を使い続けていたので身体はもうくたくただ。しかし今日は午後から自軍の補給部隊の訓練に付き合わなければならぬので、ここで家に引き返したり仮眠室に直行したりなんて事は出来ない。休もうとする身体を鞭打って歩いていると、いつの間にか俯いていた視界に影が落ちた。

「あら、軍人さんだ」

「ラインが二本だぜ、セカンドだ」

ルアールは大きく溜息を吐いた。白と赤、二本のラインはサードの証だという事すら知らないハンドレット人なんて、関わればろくな事が無い。顔を上げれば案の定、気持ち悪い笑みを零す男達が身長158cmのルアールを見下していた。

「無知って罪だよ。そこどいて」

強い瞳。彼等がこれから自分をどうしようとしているかなんて検討がつく。ここが公共の場だという事が少し気になったが、軍は目の前だ。いつまでも手を離さない男に苛立ちが募り、ルアールは呪文を唱えていた。

ルアールの右手から水が溢れる。握っていた拳を開くと水の塊が男達を襲った。男達は目をぱちくりとさせている。次第に何をされたか理解してきたのか、血管を浮き上がらせてルアールを怒鳴りつけた。

「このアマ…！軍人だからって良い気になるなよ」

先頭にいた男がルアールの手を掴んだまま後ろにいる男に目配せした。すると後ろの男がポケットから何やら魔導器らしき物を取り出す。小さな懐中時計のような形をした物だ。

ルアールは瞬時に理解した。そして油断していた自分を悔やむ。

奴等はただのヤンキーでは無い。軀漁り屋だ。

「何だかわかるのか？」

「…当たり前」

男が持っているのは魔力を無効化する魔導器だ。ルアールは試しに呪文無しの術を使おうとしたが無駄だった。目の前の男を睨み付ける。ルアールはいとも簡単に男に抱き上げられ肩に乗せられた。

リヨが午前の訓練を終え軍を出た時ルアールが男に連れて行かれる所を見た。つくづく自分は臆病者だと思う。彼女が路地裏に連れて行かれるのを黙って見ている事しか出来なかったのだ。

軍の入り口にリヨが突っ立っていると同じ戦闘部隊の友人が彼に声をかけた。

「なあアルハイ、例えばさ」

部隊長であるアルハイがリヨの顔を覗き込む。彼は何か当てられたような表情をした。

「彼女が知らない男に無理矢理連れて行かれる所、見たら何を疑う？」

「追いかける馬鹿！」

アルハイに耳元で叫ばれリヨは走り出した。ルアールを助けなければ、と言うよりは立ち止まったら落ちてしまう橋を渡っているような気分で走り続けた。

中央広場を抜けて適当に道を選ぶが彼等が何処へ姿を消したのか全く検討がつかない。術が使えればこんな程度の事はお手の物なのかも知れないが生憎リヨは正統派の陸軍だった。剣と弓矢と体力で勝負する、だからそれなりに足は早かった。しかしこの状況下でそんな物はたいした意味を果たさない。少しでも術をかじっておけば良かったとリヨはこの時初めて思った。

その時インスピレーションが働いた。運とでも言うものかりヨは突然、ここを右だ、と思ったのだ。曲がった角には紅の殺し屋のアジトがあつたがりヨが気付く筈も無かつた。

「服を脱げよ」

通り過ぎそうになつたがその声でわかつた。立ち止まり薄暗い路地裏を覗き込むと、そこでは先程の男達がルアールを取り囲んでいた。ルアールは彼等を睨むばかりで何もしようとしていない。男達は気付いていないがルアールは武器を持っている筈だ。しかしそれを使おうとしないのは非戦闘員に武器を向ける事を酷く嫌う性格だからだ。

「聞いてんのか？」

男の一人がルアールの顎を乱暴に掴む。リヨは飛び出しそうになつたがルアールの瞳を見て体が動かなくなつた。自分に向けられた訳ではないが、その瞳は酷く冷めていた。

ルアールは無言のまま男の腕を掴んだ。脇にいた二人の男がルアールを押えようとしたが、ルアールは一人目の男の腕を掴んだまま両脇の男を蹴り飛ばした。同時に飛び上がり一人目の男の腕を捻り上げる。ルアールが使えない筈の魔術を使おうとしたので飛ばされたうちの一人が魔導器の威力を最大限まで上げたが、彼女はさして気にしないように術を発動する為の手を組んだ。

「炎^{えん}」

ルアールの周りに炎が浮き上がり三人に襲い掛かる。男達は襲い来る炎の悪夢に気絶した。

倒れた男達を相変わらずの冷めた目で見つめながら、組んでいた

手を下ろす。するとたちまち炎は消え、焦げたと思つた男達の皮膚も元に戻っていた。単なる幻術だ。彼女は日本術を使ったのだ。

リヨは黙つたままルアールを見つめていた。自分には魔術の知識は無いが、彼女が使つた物が普通の魔術で無い事は見てわかつた。明らかに国が違う。知らない言葉も話していた。リヨは他人事のように、あれは誰だろう、と思つてしまった。

その夜、シグムントの上空が炎で覆われた。突然の爆発音に炎火は家を飛び出した。軍とは反対方向に走ると人が集つている一帯がある。そこがよく知つている場所だったので、炎火は羽織つた長袖の軍服を手繰り寄せ思い切り叫んでしまった。

「アラン！」

術軍第二戦闘部隊に二人の妹弟が所属している女性アラン・ケイティー。彼女はリーナ・ファイアセの良き友人でありリーナは彼女が働く雑貨屋の常連だ。

炎火の叫び声が聞こえたのか、毛布を羽織つた寝巻き姿のアランが振り返つた。燃え上がっているのはアランが働く雑貨屋。アランはそこに下宿もしていた。店主やその家族は外に逃げたようので、炎火はほつとした表情を見せた。

「リーナさん、うちが」

炎火が駆け寄るとアランは彼女にすがりついた。店は未だ燃え続けていて悲惨な状況だった。炎火はアランに一言「大丈夫」と言うのと、自軍の補給部隊に連絡を取つた。これだけ軍の近くでありながら誰も駆けつける様子が無い。あの爆発音に反応したのは野次馬だけだったようだ。

第一補給部隊に連絡が取れたので炎火はすぐさま消火に取り掛かつた。水の魔術を使うが炎は勢いを増すばかり。おそらくこの炎も魔術だろうか、それとも日本術か。だからと言って軍を呼んだ今、日本術を使うのは危険だった。

「……………」

その時炎火の元に手裏剣が投げ込まれた。咄嗟に手刀で振り払うが右手が薄く切れ血が流れる。その傷はすぐに消えた。代わりに現れたのは彼女が抱え込む魔物、愚かしい過去の表れだ。炎火は羽織っていた軍服を投げ捨てると近くの建物に飛び乗った。

誰だ。

次々と飛んで来る、殺し屋が使っている物とは違う形の手裏剣。

それは炎火が昔使っていた物なので扱いやすいが、その素早さは右腕が刀化していなければ追いつけなかったかもしれない。日本特有の古風な手裏剣。これを扱えるのは今となっては生き残った軍人が逃げた貴族くらいだ。

「水壁」

炎火は敵の位置を測るため自分の周りに水の幕を張った。しかしそれは無駄だったようだ。頭上をも覆う大きな水の幕は四方八方から手裏剣に貫かれた。既に三百六十度を囲まれていたのだ。炎火は舌打ちするとすぐさま幕を下ろし手裏剣を叩き落した。

「前進！」

少女の声が聞こえた。同時に大量の黒い人間に囲まれる。前進を忍服で覆った蜂のような数の忍者達は炎火を取り囲むと一瞬たじろいだ。そして、またも叫ぶ少女。尚前進せよと命令する三度目の少女の声に忍者達はやっと反応した。

戦慣れしていない。

炎火には一瞬でわかった。彼等の攻撃を交わしながら試しに中級の少し呪文が長めの術を唱えてみる。これだけの人数がいながら避けながらも十分に準備が出来た。これは、おそらく早々に逃げた貴族の生き残りだ。そして炎火の事を、いや過去の炎火を知っている人間達だろう。

「都の名に懸けて夢視る人、彼を守護りし我等、一の証を受け継ぐ者。彼の力に因って神木、桜花の命を受けし我が持つ紅石の欠片、空の間へ解き放て」

黒蜂達は少女の命令通り炎火を襲った。少女の声は発される度に

位置を変える。黒蜂に混ぜられているのかもしれないが彼等が長だと理解するにはそれでは不十分だ。誤って盾にしてしまつては意味が無い。そう考えると少女は見た目わかりやすい格好をしているだろう。ならば声から位置を特定し目が追いつけば彼女を攻撃する事が出来る。

「我が名は春の菜、巫女より授かりし春の名なり」

そんな可能性を見出しながら炎火は呪文を唱え続けた。戦慣れしていないとは言え伝統的な日本術を使う者達には日本術でしか対抗できない。

炎火は意識を集中させた。大きい術を使って民間人に被害が出ては意味がない。きちんと範囲を絞ると目の前に現れた黒蜂を踏み台にして空へ飛び上がった。

「一番隊秘伝、爆」

補給部隊が駆けつけたアランの店の上空に大きな爆発が起こった。炎火を攻めていた黒蜂の大半が地面へ落ち、辺りが焦げた臭いで覆われる。

呪文を発動した炎火は近くの建物に着地した。攻撃が止んだので様子を見ながら立っていると、しばらくして煙が晴れた。そこには数え切れない程の黒蜂が炎火に向けて土下座をしていた。先程まで炎火と戦っていた黒蜂達とは違う部隊なのか、同じ気配は一つも無かった。

下を見る。アランの店からは少し離れたようで、この異様な光景を見る者は誰もいなかった。それを確認した上で、もう一度彼等を見つめる。視線を戻した時、黒蜂の群れから一人の少女が現れた。古典的な忍服をアレンジしたような着物を着けて、顔はサングラスと布で隠している。腰には短刀を下げている。

彼女は炎火と向かい合うように屋根の上に正座をすると腰から短刀をゆつくりと引き抜いた。その刃を見れば一目でわかる。彼女はかつての日本国の貴族、新橋家の生き残り。

「我が名は新橋蘭。高貴なる新橋家の跡取りなり」

そう宣言したかと思えば、蘭は一瞬にして炎火の懐に入り込んだ。予想していた炎火は自らの短刀を引き抜き応戦する。それは殺し屋になる前から使っていた一番隊の短刀だ。新橋家より地位が上だという事を示すものだった。

「やはり、貴方は梨依菜様」

それがわかればこちらの勝ちだと、蘭はそう言った。一番隊の術を使う事も、一番隊の短刀を使う事も、彼等はわざと炎火にそうさせたと言うのだろうか。炎火は苛立ちを募らせていった。

「私の名前は紫苑炎火」

「過去を捨てたなら何故、術を使いました。何故、その刀を用いて私と戦っているのです」

蘭はわざと炎火を挑発するような言葉を繰り返しているように見えた。炎火は短刀を持つ手に力を込めると、蘭の頬に深い切り傷を作った。背後で黒蜂達がざわめく。

「そろそろ黙れ、小娘」

蘭は驚いたように片手を頬に当てた。その時、炎火の背後から矢が放たれる。沙藍の仕業だ。やっと殺し屋達が駆けつけたのだった。沙藍の矢は黒蜂の一人を正確に射抜いた。黒蜂達はそれを受け立ち上がり戦闘態勢に入ろうとするが、少し離れていた蘭がそれを止めた。戦闘意欲を失くしたかのように突っ立っている彼女の意思を汲み取ってか、殺し屋達は再度攻撃を仕掛けるような事はしなかった。

「私達は同じ日本人。けれども新橋家は紅の殺し屋を信用しません。梨依菜様、貴女以外は」

蘭は静かにそう言うのと自らの血で印を作り術を使った。煙幕が巻き起こり、それが晴れた頃には彼等はいなかった。

炎火はひどく衰弱したようにゆっくりと振り返る。殺し屋達は静かに彼女の元へ降り立った。

「一番隊の術を使ったのか」

悲壮感を漂わせながら遊魔が問う。炎火は頷いた。それに他の面

々も苦い顔をする。紅の殺し屋は、過去を捨て復讐に生きる事と引き換えに奈美から新しい名をもらったのだから。しかし過去を捨てるという事は酷い矛盾を生んだ。もし本当に捨てたなら、復讐心なんてものも亡くなっている筈だから。

「石が無いからね。前みたいにはいかなかったよ」

自嘲するように炎火が言う。無理な笑顔だという事は誰が見てもわかった。気まずい空気が流れ、それから脱しようとする各自の気持ちも汲み取れた。しかし炎火はこうする事しか出来なかった。

「ごめん。一人にして」

真夜中、月明かりの下、炎火は殺し屋を拒絶する事を選んだ。殺し屋達が去り一人きりになったシグメントの空。炎火はそこから見える一番大きな樹まで跳んで行くと、そのてっぺんまでは行かずに生い茂る葉の中に身をうずめた。

何故、一番隊の術を使ったのだろう。奈美との契約を破ってまで無理に使わずとも、あのレベルの敵ならば並の日本術で凌げたはずだ。それをわざと大きな術を使って一掃した。蘭でさえ殺そうと思えば殺せたのに、そうしなかった。

「なみ」

助けて。過去が押し寄せてくる。思い出したくて思い出したくなくて、戻りたくて戻れない過去が。新橋家のせいで流れ込んでくる。ずっと、ずっと言葉にしなかったのに、したくなる。しちやいけな。いってわかってるのに。

「さびしい」

貴女達を失ったのは私が非力だったからなのに。炎火の脳裏には、昼間見た夢が思い浮かんでいた。

目を開けると、そこにはやはりカイ・クロエ・ユーランがいたのだ。

「そろそろ良いだろ？」

リーナの不機嫌そうな顔に苦笑で答えるカイ。実際リーナは不機嫌な訳では無かったのだが、茶化されて笑う気にもならなかったの

で表情を変えないだけだった。

『あの時、倒れているふりをしていた貴方を私が助けた時、この術をかけたわね』

あの時。それは魔物騒動の最中、融合爆発でカイが負傷していた時の話だ。

カイは疲れた、とでも言うつようにニヤリと上げていた口角を下げると、静かに頷いた。一面真白の世界で、ふわりと吹いた風が二人を揺らす。浮かぶように対面している彼等の軍服の袖も少しだけ膨らんでまたしぼんだ。

『怪我はしていた。でも、私にこの、夢を渡る術をかけるために、わざとそうしたんでしょう』

術を練るのは難しいが、かけるのは簡単なのだ。術を持ったほうの手の指先を「ム」の形に動かすだけ、という物だったから。

そう、二人は夢の中にいた。

『ゆっくり話があったんでな。ま、おかげで俺の事もわかっただろ？』

『さあ』

とぼけるリーナにまたも苦笑する。どうやらこれは彼の癖のようだ。

リーナは考えていた。この男は一体どこまで知っているのか。そして自分の予想がどこまで当たっているのか。慎重に言葉を選ばなければならぬ。もし自分の予想通りなら、この男に近付いてはいけない、と。

『手の込んだ芝居までして、貴方が何をしたいのかなんて知らないわ』

謀ったつもりだった。これが輝愛や沙藍ならいとも簡単に引つかかっただろう。だが彼はリーナの友人達ではない、カイ・クロエ・ユーランだった。

『芝居ならお前だってしてるだろ』

逆手に取られた、というのだろうか。こういう事を。だが、これ

は肯定とも取れる言葉だった。リーナの予想に対して。

『貴方には年数が負けるわよ、いつだっけ？』

『死んだフリしたのは六年前。"虐殺"より前のことだ』

虐殺。とある戦を、とある国の人々はそう呼んだ。そしてそれは、リーナが大切な人達を一斉に失った戦でもあった。やはりリーナの予想は当たったのだ、彼は。

『海と夜の名を持つ者、貴方の名は』

かつて、うつくしき芸術の名を持つ者に仕えた者、名は新橋海夜。彼はそう言った。

夢でなければ斬り殺していたかもしれない。いや、現実でも殺せたくはわからないが夢であるのにリーナは術を唱えていた。放った術は決して弱いものではないが、海夜は簡単にそれをかわした。

次の瞬間、二人は同時に刀を抜いたが、その時彼等の格好は国と時代を変えていた。海夜は血まみれの和服。リーナもまた、擦り切れた和服に血を浴びた紅い宝石（迦楼羅に見せられた幻術の中でしていたのと同じ服装）を着けていた。

『仕えるには様々な意味がある。貴方が言っているのはどういう意味なのかしら』

口調を荒げてリーナがそう言うと、海夜は交えていた刀を払い彼女に近付いた。顎を取られ身動きが出来なくなったリーナに彼は一言。

『お前が思っている通りの意味だよ』

リーナの赤い瞳が輝く。真白だった彼等の背景は一瞬にして黒く染まった。まるで彼女の心の変化を写すように。リーナは足で海夜を突き飛ばすと叫んだ。出来る限りの力で。

『我等一番隊を侮辱するかあ！』

リーナが思っている意味とは。うつくしき芸術の名を持つ者、これはかつてリーナが仕えていた主の事だ。主には多くの使者がいた。その中でもリーナは主に最も近い位置にいた。使者の間で"仕える"という言葉は、リーナが編成した彼女合わせて十人の、側近一番

隊のみが使うことになっていた。それは決まりというより暗黙の了解に近かったが、一番隊を除いた使者達は仕えるとは言わずただの隊員、もしくは従者とだけ名乗っていた。それは皆が知っている事だった。

しかしリーナは過去、何度か思った事がある。自分達抜きで行われた何かは存在するかもしれない、と。

『侮辱なんかするか！俺は頼まれたんだ、晶良と麻乃と』

『その名を簡単に口にするなあああ！』

もう、事実を確かめる事も出来ない。炎火のかつての主が、自分達一番隊以外の誰かを仕える者として認めていたかどうかなんて。そもそもそんな事は、本来ならば主の自由だ。これは幼い頃から主の側にいた炎火の勝手な嫉妬だった。一番隊なら良くて他は駄目なんて、とんだ差別だ。

それでも炎火は止められなかった。海夜と名乗った彼。新橋家の跡取りと言った蘭。新橋家が自分を狂わせていく。過去は忘れ、奈美や殺し屋の皆と復讐を、そして日本国の民を守ると誓った筈なのに。主を守る為なら人だって殺して来た、それなのに。

「戻って来てよ」

嘆いてしまう。もう戻ってなど来ないのに。炎火のせいで死に至り、炎火のせいで地獄に落ちたのに。自分はのうのうと生きているのに、寂しいだなんて。

「晶良、麻乃」

死者の名を言葉にする事は許されない。使者が死界から戻って来てしまうかもしれないからだ。けれどももう海夜がしてしまったし、戻って来てほしいと思っっている炎火は日本国の掟なんてもうどうでも良かった。それよりも彼等の名を呼べないという事が寂しさの一部にもなっていたのだから。

風が吹き、静かな夜に木々がざわめく。この国では星があまり見えず、点々と瞬く中に一際輝く月。雨の多い日本国では月は赤い事が多かった。ハンドレットで赤い月など見た事が無い。

そんな風に見上げていた炎火の視界に影が差す。どこからともなく現れたそれは人間だった。

「……！」

相手は驚いたように慌てて炎火のいる樹に片手をかけ身体の動きを止めた。自身を一回転させ枝に着地する。それはミノルだった。

炎火は無言のまま、体制も崩さないまま、何もしない。しばらく炎火を見つめていたミノルは静かに言った。

「火は消えた。軍は撤退して、あそこに住んでた民間人には仮設住宅を提供した。野次馬も去った」

ミノルは持つていた軍服の上着を炎火の肩にかけた。それは先程リーナが脱ぎ捨てた物だ。

炎火の脳内は訳がわからなくなってきた。ミノルが来た途端とても安心したのに、彼が話し出した時にはもう離れて行ってほしいと思った。今は、彼に手を伸ばして縋り付いてしまいたくて仕方がない。混乱した頭のまま炎火はポツリと呟いた。

「ブルーウェイブ」

呟いた瞬間、瞳から涙が溢れてくる。先程から目の奥が熱いだけで何も起こらなかったのに、今度こそ本当に炎火は泣いていた。

ミノルは仰天して、あやうくバランスを崩すところだった。自分は何かしただろうか。とにかくミノルは何とかしたくて、いつもより赤い髪を抱きしめた。腕の中に炎火がいる事に、少しだけ心が満たされる。けれどそれだけは彼女は泣き止まなくて、ミノルは本格的に慌て出した。

「違う。俺は王から術軍が動いたと聞いて」

だからブルーウェイブは関係無い。ミノルがそう言うと、炎火は更に泣き出した。どうしたら良いのかわからなくなり、ミノルは炎火の背中をゆつくりと叩き続ける事しか出来なかった。

誰もいない、この人と二人きりだという安心感が炎火に涙を流させ続けていた。理解はしている。もしかしたらブルーウェイブや紅の殺し屋、もしくは新橋家の誰かが自分達を見張っているかもしれない

ない。今までだってそうだったのだから。しかしそんな事はどうでも良かった。

「ミノル」

呼ばれたミノルは炎火を少しだけ自分から離して、喋り易いようにしてやった。涙を拭こうとするが、炎火はそれをやんわりと拒否した。代わりに、それまで一度も合わせていなかった目を合わせる。そして小さく言った。

「私の事、忘れちゃった？」

涙を浮かばせる炎火の顔がミノルの過去の残像と重なりかける。しかし残像はすぐに消えた。黙っているミノルを見て炎火はまた涙を流す。ミノルは何か言おうとするが、何も言葉が出て来なかった。炎火は今度は自分からミノルに抱きついた。

「助けて」

人生の中で一番、卑怯な言葉を吐いた。

ミノルは自宅に炎火を連れて帰った。これはリーナ・ファイアセで無く、敵である紅の殺し屋だという事を重々承知した上での行動だった。つまり裏切りだ。でももう、彼等は何度も裏切りを繰り返していた。

ミノルは炎火をベッドに寝かせると、その場を離れようとした。着替えようと思ったただけだったが、炎火はミノルの長い軍服の裾を掴んで彼を止めた。ミノルは少し躊躇したが、じつと自分を見つめて逸らさない炎火の目の上に一つキスを落とすと彼女の手を離した。リーナと自分の軍服をクローゼットにかけ、ネクタイとシャツを洗濯かごへ投げ込む。ベルトを外そうとすると何か聞こえる事に気付いた。刺客かと思いきや身を固くするが、それは声のようだった。耳を澄ませばはつきりと聞こえる歌声。

音を立てるのが惜しく思えて、ベルトにかけていた手を下ろすと寝室へと歩いた。なるべく音を立てないようにゆっくり。ミノルが歩いている間にも歌は続く。寝室に辿り付くと案の定、開け放たれ

た一つだけの窓に炎火が腰をかけて歌っていた。

『命の境で出会った二人は今、泣きあっている。大切な者が両手から零れてしまう感触に』

「有り得ない」

歌を途中で止めて炎火はそう呟いた。ミノルの存在に気付いていないのか、そのまま自身を強く抱きしめて黙ってしまふ。ミノルは後ろから近付くと炎火の数歩手前で止まった。

「何が？」

炎火が顔だけでゆっくりと振り返る。肩辺りで止まるが、身体をミノルの方へ向ける気は無いようだった。しっかりと目を合わせ、まるで「わかるでしょ？」と問いかけるように首をかしげる。揺れる長髪が月明かりに光った。

「ここまで来て、まだ俺を拒否するか？」

炎火はそれには答えず窓辺からひらりと床に足を着けた。顔に笑顔を貼り付けているが、その身体は行き場を失くしたように立ちすくむ。

「最近の私はよく泣いてるね」

これは質問では無かった。ミノルも理解していたので返答はせず炎火に一步近付いた。炎火はその場で腰に掲げた刀に手をかける。カチ、という音を立てて刃が少し姿を見せた。

「その度に貴方は抱きしめてくれた」

何故？と、そこでやっと質問が出た。ミノルは尚も答えず、また一步、炎火に近付いた。炎火は静かに刀を抜き目の前に構えた。笑みを深めながら後ずさる姿は逃げ出す直前というよりは噛み付く前触れのような。

「それは、貴方が私を知らないからよ」

ミノルが炎火に手を伸ばしたのをきっかけに、炎火は一瞬でミノルに近付いた。喉元に刀を突きつけるが、同時にミノルの魔術を持った手を炎火の脇腹で寸止めされる。炎火は目を見開き頬を吊り上げたまま言った。

「誰だ」

炎火の問いにミノルは口角を上げると何の躊躇も無しに魔術を炸裂させた。爆発もせず光も放たないその術は確かに炎火の脇腹を傷付けた。といつても咄嗟に避けたので掠り傷程度だったが、しかし炎火はすっかり頭に血が上ってしまった。何も言わずどうも動かないが彼女の右腕には確かに先程まで存在しなかった刀が存在していたのだ。

ミノルはといえば指先に残った魔術の欠片を軽く振り払うとクツクツと笑い出した。右腕と、左手に持った刀を構える炎火をあざ笑うように額に右手を当てて笑っている。静かに何かを待つように佇む炎火の気配を察したのか、しばらくしてから笑うのをやめた。そして炎火に向き直る。

「お前を知っている者だよ、梨依菜」

炎火は叫んだ。そのままミノルに突進すると思いきや、走り出した彼女は窓から飛び立つと屋根を踏み台にして夜空に飛び立った。これ程、全力で逃げたのは生まれて初めてだった。それが悔しくて心の中でもう一度叫んだ。

炎火が去った暗い部屋にミノルは一人立っていた。風が吹きカーテンが揺れる。誰もいないそこに、どうして自分がいるのかわからなかった。突然の出来事にしばらく呆然としてしまう。その時、心の中で声が聞こえた。何を言ったのか聞こえないが、その声を聞いた途端ミノルの身体は無意識に動いていた。急いで反転しクローゼットを開ける。そこにはきちんとリーナサードの軍服がかかっていた。夢では無かったのだ。

「リーナ…?」

確かに先程まで歌声が聞こえていたのに。ミノルはまるで恋焦がれるかのようにしばらく彼女の姿を捜した。それでもやはり見つからなかった。やっと見つけれられた時、彼女は翌日、軍本部へ出勤したリーナ・フィアセサードだった。

敬礼をする彼女の側にはいつもの通りルアル・レイとユーマ・

ホルスが在る。その後ろに見知った髪色の女性がいたのでミノルは思わずリーナの目の前で立ち止まってしまった。それにリーナが反応した事に気付いてしまったので、更にそこから動きずらくなつたのだ。

「…そのファーストは？」

濁したつもりのような言葉しか思い浮かばず、苦し紛れにミノルは言った。それにルアールが「陸軍のトレーサンドです」と答えた。どこの隊かと聞くと、リーナが何故そこまでしつこいのか問うたので、それ以上何も聞けなくなつてしまった。

緑の髪は妹サライのトレードマーク。そのサラが、どうしてこんな所に在るのか。スパイだという事がばれた上で戦法として使われているのか、それともスパイとしてこちらに潜入させて在るのか。ミノルには謀りかねた。こんな時、この秘密を自分一人だけの物としている事が愚かしく思える。誰の意見も聞けないではないか。しかし、これを誰かに打ち明ける事は死に値する。裏切りなのだ。

だからと言つてこの場で彼女を呼び出す訳にもいかず、ミノルはそうかと一言言つと四人の前を通り過ぎた。彼を見送る八つの目が思い思いに光つて在た。

「本当だ」

先頭で振り返らないままりーナが言つた。背後でサラが頷いた気が配がしたので振り返ると、サラは得意げな顔で笑つて在た。リーナはそれに笑つとサラの額に人差し指を押し当てその場を去つた。額を押さえて首を傾げるサラにルアールが言つ。

「おまじない。大事な人にしかやらないつて言つてた」

私はやつてもらつた事無いんだよ、と悪戯そうに笑つとルアールも自軍の訓練へと向かつた。ユーマもそれに続きサラの肩を叩くとリーナの消えた方向に小走りで行つた。一人取り残されたサラは困惑に悩まされた。

そもそも何故、彼女がここに在るのか。それは昨夜、炎火がアジトへ歸つて来た所から始まる。天窓からリビングに飛び込んできた

炎火を迎えたのは、炎火を抜いて会議を開いていた殺し屋の面々だった。血相を変えている炎火を心配して駆け寄る麻衣を振り払い、彼女が真っ先に向かったのは沙藍の元。胸倉を掴むと静かに言った。「誰だ。誰なんだ、あいつは……」

何の事やらわからない四人は炎火の次の言葉を待つ。誰も答えない事に苛立つてか炎火は沙藍を突き飛ばすと右腕を構えた。その刀に何人かが息を呑む。恐ろしいのだ、それが。テーブルに身体を打ち付けられた沙藍は座り込むと炎火を睨みつけた。

「何がよ」

「アルテミスだよ！」

今度は沙藍が息を呑んだ。その名は他の皆も知っていたが、それが何だというのか。その答がわかるのはこの二人だけだった。沙藍は何か言おうとしたが自分から続けようとしている炎火の姿を見てやめた。歯ぎしりをしてやっと口を開いたかと思うと搾り出すように彼女は言った。

「あいつじゃなかった、それに私を知っていた……！誰なんだよ、沙藍なら知ってるでしょう！」

沙藍は訳がわからなかった。困惑した表情で炎火を見つめると彼女は突然何か思いついたように表情を変え、だんだんと肩の力を抜いていった。握り締めていた手を緩めると、しばらく何か言いたそうにして、それからおずおずとそれを沙藍に差し出した。

「ごめん」

沙藍はそれを振り払うと自分で立ち上がり炎火に背を向けた。その時その表情を見れた者はいなかったが、おそらく彼女は泣いていた。駆け寄ろうとする遊魔を避けるように歩き出すとリビングの入口で立ち止まり言った。

「私は知らない。アルテミスの事なんて。何も知らない！」

それから廊下に駆けて行く音が聞こえた。二階に上がったようなのでいなくなる心配は無いか、と遊魔は追いかけるのをやめ、改めて様子のおかしい炎火に向き直る。振り払われた手を握り締める彼

女はまるで大きな失敗をしたかのように悔しそうな顔をしていた。

「アルテミスが、何だって？」

敵の大將の息子の話だ。もし炎火が接触したのなら、いや、していなくとも放っておける話ではない。しかし炎火は相変わらず何も言いたくなさそうで、遊魔は仕方が無いか、と進み出ると炎火の頬を叩いた。

「言わなきゃわかんねえだろ」

遊魔はそのまま炎火に背を向けるとテーブルを直し椅子に座った。重苦しい空気の中でその姿は異常な程の違和感があり、誰も動き出したり話し出したりする事が出来なかった。

炎火は一人、先程の自分の失態を思い出し後悔の渦に巻かれていた。そもそも一番隊の術を使った時からおかしくなっていたのだ。いや、それよりもっと前……そう、きつとカイ・クロエ・ユーランと初めて話した時から。あの魔物騒動の時から炎火は自分がどこか変化し始めている事に気付いていた。その上、敵と密会し彼の謎の現象に立ち合い、それに傷をえぐられた。更には仲間当たって、こんな事があっていいはずがない。暗殺集団紅の殺し屋が、こんな事で。

あまりにも弱くなり過ぎた炎火の瞳に涙が浮かぶと、その気配を察知した遊魔が軽く溜息を吐いて言った。

「輝愛、早く治療してやれよ」

その言葉に三人共が驚く。輝愛と麻衣は急いで炎火の身体を調べ傷を発見した。ミノル、ではなくミノルの中にいた”誰か”にやられた物だ。一向に塞がる気配が無い事は炎火もわかっていた。しかし、それを今あからさまに怒っている遊魔が指摘するなんて。炎火が遊魔の名を呼ぶと遊魔は鼻をかいた。

「別に怒ってんじゃないよ」

ただ、と続けようとするが上手い言葉が見つからないらしく、遊魔は炎火を見上げた。気まずい空気を漂わせたまま二人は苦笑いをした。

何を怖がっていたのか、強張っていた炎火の肩の緊張が解けた。言葉を伝えなければ何も始まらない、そんな事はわかっていた。それは互いに、そうなのだと、また認識したのだった。

そんな炎火が口を開きかけた時だ、二階から大きな音が響いた。四人の目の色が変わる。再度音がして沙藍がリビングに駆け下りてきた。真白な頬に血が飛び散っている。それは明らかに返り血だが、彼女の腕の中にある者を見て彼等は動揺の色を隠せなかった。

「竜亞……！」

血まみれの彼女が、沙藍の腕の中にいたのだ。

突然天井を突き破って落ちてきたのだという沙藍の顔に嘘はなかった。急いで治療をしたいところだが、　　そもいかない。それがわかってしまって、彼等は動きを止めた。

来る、数え切れない程の蜂が。あの黒い大群が、来る。奇声と共に、二階から新橋の軍が雪崩れ落ちるように入り込んできた。逃げ場もなく、戦闘を始めざるを得ない状況に追い込まれた紅の殺し屋。しかし黒蜂を倒していく中、炎火は思う。かつてこのような危機に晒された事があったが、あの時、敵に回していた者達はもっと強くなかっただろうか。逃げ場もなく、助けもなく、多勢に無勢、ただひたすら戦い、仲間は次々と血だるまになって倒れた。今の竜亞のように。

あれから生き残った私達。こいつらは何が違うのか、それは。私を殺す気がない。それから、死にたくないと思っていない。

もしそうだとしたら。

「ふざけるな」

家が吹っ飛ぶ事も気にせず、炎火は日本術を炸裂させた。

天井が抜け、丸焦げになった黒蜂。それでもまだ懲りもせず現れる新橋の軍。

「みんな」

突然、麻依が尖った声を出した。長年、くの一として育った彼女は、このような小さくても仲間に届く声を出せるのだ。応戦しつつ

聞き耳を立てる殺し屋達に麻依は静かに言った。

「蒼が来る」

こんな暗号を使った事は無かった。けれど彼等にはわかった。奴等が来るのだ、殺し屋の人間が、おそらく今一番会いたくない人々が。先ほどの炎火の件がなくても、自分達がここで日本術を駆使して新橋軍と戦っているのがばれたらまずい。民間人ならともかく、来るのは野次ではなくブルーウェイブなのだ。

沙藍が、戦いつつ守っていた竜亞を見る。隠蔽は出来ない、物も壊してしまっているし、何より仲間の血を流している。炎火にそう目配せすると、彼女は大きな声で叫んだ。

「撤退！」

その時、何が起こったのか彼等にはわからなかった。黒蜂達にも少し遠くから見ていたブルーウェイブも。ただ一瞬、空に紅い血が流れたかと思うと、何事もなかったかのように辺りが静まり返っていたのだ。

ブルーウェイブがその荒れ果てた一軒家に辿り付いた時、そこには術を使った痕跡と大量の死体があっただけだった。

紅の殺し屋は全部で八人。巫女の千羽、一と七番の炎火、二と十番の麻依、三と八番の輝愛、四と六番の遊魔、五と九番の竜亞、七と十番の沙藍、スパイのシユン。

彼等はそれぞれの番号に与えられた役割を果たす為、個人で行動している。勿論、作戦を共にする事はあるが、それは自立した個人が収集して為される物であって、決して馴れ合っている訳ではない。だが彼等の生い立ちを考えると、それが上手くいかなかったのは仕方の無い事なのかもしれない。それぞれ短いながらも一癖ある人生を送ってきた者達だ。しかしそれを仕方の無いの一言で片付けてしまつては、現状を一変しようとしている彼等も気分が良くないはずだ。

ではどう言えば良いのか、どう言ってほしいのか。言葉を拒否す

る者もいるだろうが、きつと炎の名を与えられた彼女は、まだ下手なだけで、いつか上手になる、そう心の中で繰り返し返しているだろう。

紅の殺し屋、総勢八人は暗闇の中にいた。炎火の右腕が自ら体内に取り込んだ魔物にもぎ取られ、次の瞬間には此処にいたのだ。

相も変わらず炎火の右腕からは血が滴り落ちていて、既に致死量に達しているのではないかという勢いだ。しかし炎火の瞳はまだ生気を保っていた。そしてもぎ取られた右腕も、大量の血を流しつつそこに浮かんでいる。それは異様な光景だった。

「沙藍、治療を…」

炎火のその咳きは竜亞に対する事だったが、沙藍は咄嗟に炎火に駆け寄ろうとした。麻衣に止められやつと理解した沙藍は、それでも渋々といった感じで竜亞の治療に当たった。

そう、ここがどこかわからないけれど、少なくともブルーウエイブや新橋の軍が追って来られるような場所では無い事くらいは紅の殺し屋たちは理解できた。

「誰もいないな」

遊魔が静かに呟く。すると、炎火が奈美に跪いたので、他の面々も何だかそうしななければならぬような気がして同じような形を取った。そういった形式だったものは日本国軍が殺し屋となった時に抜け落ちていたので、人によっては久々な物だ。

「奈美様、ご無沙汰しています」

首を垂れたまま炎火が言った。奈美はそれに相槌を打つと殺し屋の面々を見渡した。このように全員が同じ場所に集まるのは、いつ以来だろうか。突然、不可解な現象によってこんな場所に連れて来られて、混乱しないところが流石だと、彼女はそれだけ思った。

あとは、早く帰りたい。本当にそれだけ思った。

「此処がどこだか、奈美様はわかりますか？」

聞かれたくない事を聞かれ、返答に困る。しかし、それでもそれ

が運命なのだろう。思い直した奈美は小さく頷いた。何人かが面を上げる。理由は違えど彼等も”早く帰りたい”のだろう。

「教えてください」

炎火の凜とした声が暗闇の中に響く。言われた奈美は何も言わずに首を振った。

「此処がどこだかよりも、どうして私達がここにいるか理解するほうが、今の貴女には重要です」

二人の視線が絡み合う。炎火は何となく予想していた言葉を言われ、考えをめぐらせていた。奈美に会い、右腕の正しい制御方法を教えてもらった。その修行中、何度も言われた事がある。

「尾羽張を追い来る」

地獄より異郷の者によって引きずり上げられた伝説の武器は、用が終わっても帰る事が出来なかった。それを戻らせようとする力が発するのは時間の問題だと奈美は言っていたのだ。いつか、右腕に取り込んだ武器は炎火の身体から脱出しようとするだろう、と。

伝説の武器、尾羽張。それが使われた日の事は、ここにいる皆にとって忘れられない出来事だ。

「では、ここは現世と地獄の境目といったところですか」

「そこには行った事があるでしょう。こんなところですか？」

間髪入れず返された言葉が詰まる。流星にもう殺し屋の面々は奈美の意図を理解できた。我等が主は、ここで何かしらの決着をつけようとしている。それが何かはわからないが。

「いえ、違います」

炎火はすらりと左手を上げ、ある方向を示した。何かを感じ取るうと、麻衣が耳を澄ます。しかし彼女はすぐにそれをやめた。無理矢理にでも意識を途絶えさせなければ引っ張られてしまいそんな感覚が一瞬にして襲ってきたのだ。

「あちらに行けば境目です」

鬼はそこからやって来る。現の世へと繋がる扉を血眼になって探している。人間を食らえば人間になれると信じ、彼等はそうやって

一生を過ごす。行けば生きては帰れないだろうと言われる鬼の世が、この先にある。

では、此処はどこなのか。答えを求めてか、輝愛がちらりと奈美を見やった。それを受けた奈美は、応えるのは自分ではないと言わんばかりに炎火に視線を向けた。その炎火は切れた自分の腕から伸びる、ぬらりとした血管のようなものをつまみ上げて言った。

「こいつの中かな」

その血管の先。どく、どく、と鼓動のような音を発している炎火の腕だったもの。そこに生える一本の黒い刃。先代、先々代と二世代に亘って日本国の主を殺めた尾羽張。今となってはそれも炎火の大切なパートナーだ。

炎火の呟きに、その通りと奈美が頷いた。そして、鋭い視線で炎火を見つめ、言った。

「彼に近付きましたね？」

炎火はわかった。こんな回りくどいことをして、奈美は何をどうしたいのか。きっと、第三勢力が現れ、尾羽張も異界に帰りたがっているこの機会に、彼女はこう言いたいのだろう。

「騙し合いつこは終わりですか？」

奈美は幼い子供のような笑顔になった。問うた炎火も思わず頬が緩む。そして紅の殺し屋たちも、それぞれ何かを覚悟したような表情をしたのだった。

F i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1602i/>

紅の殺し屋

2010年10月10日01時30分発行